

IBM Unica Interact
バージョン 公開日: 2011年6月7日
8.5.0

ユーザガイド



Copyright

© Copyright IBM 2011
IBM Corporation
Reservoir Place North
170 Tracer Lane
Waltham, MA 02451-1379

すべてのソフトウェアおよび関連ドキュメントには、「IBMインターナショナルプログラムライセンス契約」に規定されている使用および開示に関する権限、米国政府ユーザに対する制限付き権限、および適用可能な輸出制限が適用されます。

本書の例で使用されている企業、名前、およびデータは、特に指定のない限り架空のものであります。

IBM、IBMのロゴ、Unica、Unicaのロゴ、NetInsight、AffiniumおよびMarketingCentralは、米国およびその他の国、もしくはその両方における商標または登録商標です。その他の製品およびサービスの名称は、IBMまたはその他の企業の商標である場合があります。© Copyright IBM Corporation 2011. All rights reserved.

目次

はじめに IBM Unica テクニカルサポートへの問い合わせ.....	9
1 IBM Unica Interactの概要.....	11
概要.....	11
Interactの概要.....	12
Interactのアーキテクチャ.....	12
Campaignの主要な概念.....	15
Campaignについて.....	15
オーディエンス.....	16
キャンペーン.....	16
セル.....	16
フローチャート.....	17
オファー.....	17
セッション.....	18
Interactの主要な概念.....	18
設計環境.....	18
インタラクティブチャネル.....	18
インタラクティブフローチャート.....	19
インタラクションポイント.....	19
イベント.....	19
プロファイル.....	20
ランタイム環境.....	20
ランタイムセッション.....	20
スマートセグメント.....	20
タッチポイント.....	21
処理ルール.....	21
Interact API.....	21
ゾーン.....	21
Interactでの作業.....	21
Interactユーザ.....	22

Interactのワークフロー	22
Interactの実装のプランニング	25
2 インタラクションの構成	26
設計環境	26
Interact APIについて	28
タスク1: インタラクティブチャネルの作成	30
インタラクティブチャネルでの作業	30
オファーの最大表示回数	31
インタラクティブチャネルを作成するには	31
テーブルのマッピングについて	32
インタラクティブチャネルにプロファイルテーブルをマップするには	32
インタラクティブチャネルにディメンションテーブルをマップするには	33
オーディエンスのプロファイルテーブルマッピングウィザード	33
インタラクティブチャネルの[サマリ]タブ	35
タスク2: ゾーンおよびインタラクションポイントの作成	38
ゾーンでの作業	38
ゾーンを追加するには	39
インタラクションポイントでの作業	39
インタラクションポイントを追加するには	39
インタラクションポイントでの操作方法	40
タスク3: カテゴリとイベントの作成	41
カテゴリでの作業	41
カテゴリを追加するには	41
イベントでの作業	41
イベントを追加するには	44
イベントでの操作方法	44
タスク4: オファー制約の作成	45
制約での作業	45
オファー制約を追加するには	45
オファー制約を編集するには	46
オファー制約を有効/無効にするには	46
オファー制約を削除するには	47
タスク5: カスタム学習モデルの作成	47
学習モデルでの作業	47

学習モデルを追加するには	47
学習モデルを編集するには	48
学習モデルを削除するには	48
学習モデルを有効/無効にするには	48
タスク6: スマートセグメントの作成	49
スマートセグメントでの動作	49
セッションの作成	49
インタラクティブフローチャートの定義	50
タスク7: オファーの定義	50
オファーの定義	50
Interactのオファーテンプレートを作成するには	51
タスク8: 処理ルールの作成	52
処理ルールでの作業	52
オファーの資格	53
マーケティングスコア	53
処理ルールの詳細オプション	54
インタラクション方法タブでの作業	54
インタラクション方法タブを作成するには	55
処理ルールを追加するには	55
詳細オプションを追加するには	57
処理ルールの詳細オプションの式	57
処理ルールを有効/無効にするには	59
処理ルールを削除するには	59
インタラクション方法タブの配置について	60
インタラクション方法タブに配置をマーキングするには	60
配置要求をキャンセルするには	60
インタラクション方法タブに配置解除をマーキングするには	61
インタラクション方法での操作方法	61
タスク9: ターゲットセルとコントロールセルの割り当て	62
(任意)ターゲットセルとコントロールセルの割り当て	62
セルコードを上書きするには	62
タスク10: IBM Unica Interactの設定の配置	63
Interact構成の配置	63

3 インタラクティブフローチャート 64

インタラクティブフローチャートについて.....	64
インタラクティブフローチャートの作成.....	65
インタラクティブフローチャートを作成するには.....	66
インタラクティブフローチャートとデータソース.....	67
テスト実行プロファイルテーブル.....	67
ディメンションテーブル.....	68
インタラクティブフローチャートの構成.....	68
クエリとInteract.....	69
データ型と保存されたオブジェクトについて.....	69
ユーザ定義項目、ユーザ変数、マクロおよびInteract.....	70
EXTERNALCALLOUTの使用.....	71
インタラクティブプロセスについて.....	72
決定プロセスについて.....	72
決定プロセスを構成するには.....	72
決定プロセスのブランチを構成するには.....	73
PopulateSegプロセスについて.....	74
スマートセグメントを作成するには.....	74
インタラクティブフローチャートのサンプルプロセスについて.....	75
サンプルプロセスを構成するには.....	75
インタラクティブフローチャートの選択プロセスについて.....	77
選択プロセスを構成するには.....	77
インタラクティブフローチャートのスナップショットプロセスについて.....	78
スナップショットプロセスを構成するには.....	78
インタラクティブフローチャートのテスト実行の概要.....	80
テスト実行のサイズを構成するには.....	81
テスト実行を行うには.....	81
インタラクティブフローチャートの配置について.....	82
インタラクティブフローチャートを配置するには.....	82
配置要求をキャンセルするには.....	83
インタラクティブフローチャートの配置を解除するには.....	83
4 バッチフローチャートでのIBM Unica Interact.....	84
バッチフローチャートのインタラクティブリストプロセスについて.....	84
[インタラクティブリスト]プロセスボックス.....	84
インタラクティブリストプロセスを設定するには.....	85

5 ランタイムサーバへの配置	89
配置の概要	89
ランタイムサーバの概要	91
配置と削除	92
運用ランタイムサーバグループに配置するには	93
テストサーバグループに配置するには	93
配置を解除するには	94
6 IBM Unica Interactのレポート	95
Interactのレポートについて	95
Interactのレポートデータ	95
Interact 8.0.0レポートとレポートスキーマ	96
Interactレポートの表示	98
インタラクティブチャネルの[レポート]タブからレポートを表示するには	98
キャンペーンの[レポート]タブからInteractレポートを表示するには	99
分析ホームからInteractレポートを表示するには	99
インタラクティブポイントパフォーマンスレポートのポートレットについて	100
インタラクティブチャネルの[レポート]タブから利用できるInteractレポート	100
チャンネル配置履歴レポートについて(インタラクティブチャネル)	100
チャンネルイベントアクティビティのサマリレポートについて	101
チャンネルインタラクティブポイントパフォーマンスのサマリレポートについて	101
チャンネル処理ルールインベントリレポートについて	102
インタラクティブセグメントリフト分析レポートについて	102
キャンペーンの[レポート]タブから利用できるInteractレポート	102
チャンネル配置履歴レポートについて(キャンペーン)	102
インタラクティブオファー学習の詳細レポートについて	103
インタラクティブセルパフォーマンスレポートについて	103
インタラクティブオファーパフォーマンスレポートについて	104
インタラクティブセルリフト分析レポートについて	104
レポートのフィルタリング	104
インタラクティブポイントでフィルタリングするには	104
イベントまたはカテゴリでフィルタリングするには	105
オファー別にフィルタリングするには	105
ターゲットセル別にフィルタリングするには	105
時刻別にフィルタリングするには	106

チャンネル配置履歴レポートをフィルタリングするには	106
チャンネル処理ルールインベントリレポートをフィルタリングするには	107

はじめに

- IBM Unica テクニカルサポートへの問い合わせ

IBM Unica テクニカルサポートへの問い合わせ

ドキュメントを参照しても解決できない問題が発生した場合は、社内のサポート担当者からIBM Unica テクニカルサポートに問い合わせることができます。このセクションの情報を参照すると、問題を効率的に正しく解決できます。

サポート担当者でない場合は、社内のIBM Unica 管理者に問い合わせてください。

収集すべき情報

IBM Unica テクニカルサポートに問い合わせる前に、次の情報を収集する必要があります。

- 問題に関する簡単な説明。
- 問題発生時に表示される詳細なエラーメッセージ。
- 問題を再現するための詳細な手順。
- 関連するログファイル、セッションファイル、設定ファイル、およびデータファイル。
- 使用している製品およびシステム環境に関する情報。この情報は以下の「システム情報」の説明に従って取得できます。

システム情報

IBM Unica テクニカルサポートに問い合わせるときに、使用環境に関する情報が求められることがあります。

その問題が発生してもログインできる場合、この情報の多くは[バージョン情報]ページで確認できます。このページにはインストールしたIBM Unica アプリケーションに関する情報が表示されます。

[バージョン情報]ページにアクセスするには、[ヘルプ] > [バージョン情報]を選択します。[バージョン情報]ページにアクセスできない場合は、各アプリケーションのインストールディレクトリにあるversion.txtファイルを表示するとIBM Unica アプリケーションのバージョン番号を確認できます。

IBM Unica テクニカルサポートの問い合わせ先

IBM Unica テクニカルサポートへの問い合わせ方法については、IBM Unica 製品テクニカルサポートのWebサイト(<http://www.unica.com/about/product-technical-support.htm>)を参照してください。

1 IBM Unica Interactの概要

- 概要
- Interactの概要
- Interactのアーキテクチャ
- Campaignの主要な概念
- Interactの主要な概念
- Interactでの作業

概要

Interactは、受信マーケティングチャネルの訪問者に対し、カスタマイズされたオファーを提供する対話式エンジンです。Interactを設定すると、厳密なイベントベースによって状況に応じた、戦略的な動作を実現できます。Interactは、企業マーケティング管理ツールのIBM Unica Suite内のモジュールであり、IBM Unica Marketingと統合されています。

Interactは、顧客の履歴情報についてオンラインとオフラインの両方のデータ、および現在の顧客の活動を徹底的に利用して、リアルタイムの顧客インタラクションを作成します。これらのインタラクションには、売上げを伸ばし、リレーションシップを築き、リードを生成し、交換レートを上げ、チャネルの使い方を最適化し、消耗を少なくすることがあります。リアルタイムインタラクションを促進するビジネスルール、および販売やサービスの戦略を確立できます。また、それらを変更することでマーケティング活動から継続的に学習したことを反映することができます。

IBM Unica Suiteと完全に統合されているため、Interactにより、マーケティング組織はリアルタイムの受信顧客処理の戦略を従来の発信キャンペーンに合わせるができます。Interactを使用すると、IBM Unica Marketingの機能を活用して、リアルタイムマーケティング活動を次のように強化できます。

- マルチチャネル操作の活用

Web、コールセンター、店内、ブランチなどのすべての顧客接点からの情報を使用して、顧客と見込み客について深く理解し、一貫したブランドを作り出し、顧客とのコミュニケーションを最大限にとります。

- 最先端のWebサイトのカスタマイズ

既知の訪問者と匿名の訪問者と関わることで、行動を分析し、インタラクションをカスタマイズします。具体的には、クロスセルオファーを作成し、編集コンテンツを選択し、適切なサービスオプションを提供し、バナーメッセージをまとめます。

- **コンタクトセンターのインタラクションの最適化**

コンタクトセンターの機能を活用して、収入の増加と顧客維持を図ります。優れた自動音声応答(IVR)ナビゲーション、保留メッセージの選択、顧客の維持とクロスセルをにらんだインスタントオファー、オファーの優先順位付けおよびWebサイトの操作(チャットやVoIPなど)を提供します。

Interactにより、タッチポイントシステムから配信されたリアルタイムの分析的なコンテンツを制御して微調整できます。戦略には、重要と思われる要因を含めることができます。これらの戦略により、特定の顧客のアクションへのレスポンスを促進できるようにするため、Webサイト上のインスタントオファーボタンからコールセンターでのクロスセルまでのカスタマイズコンテンツを強化します。Interactにより、重要なオンライン販売、マーケティングおよびサービス戦略を制御し、市場での機会や変化に迅速に対応することができます。

Interactの概要

Interactは、Webサイトやコールセンターなどの顧客対応システムと統合され、最適にカスタマイズされたオファーと訪問者のプロフィール情報をリアルタイムに取得することで、顧客とのやりとりを充実させることができます。たとえば、ある顧客が書店のWebサイトにログインしてサイトを熟読すると、Interactはその顧客の購入履歴の傾向(日本文学と特定の著者の本)を呼び出します。その顧客がInteractに統合されたページに移動すると、Interactは以前のやりとりに基づいて顧客に表示するオファー(同じ著者による同様の著名な日本の作品)を選択します。

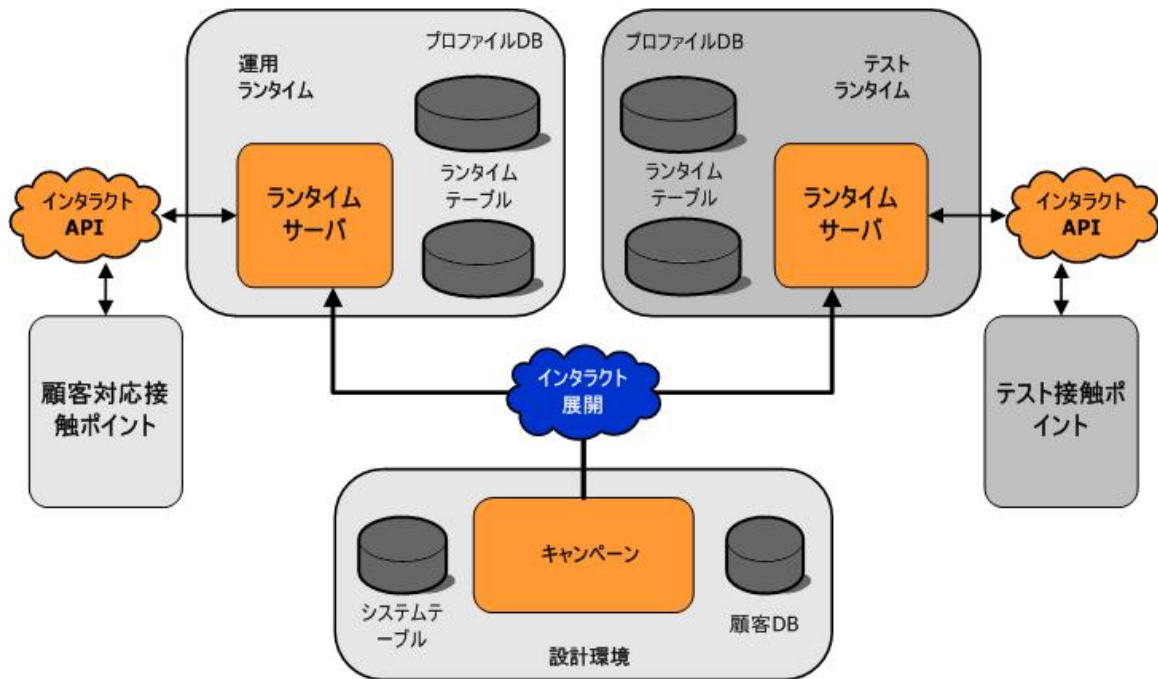
アプリケーションプログラミングインターフェイス(API)を使用して、タッチポイントと統合するためにInteractを構成します。APIを使用して、顧客情報の収集、その情報へのデータの追加、タッチポイントで顧客が行ったアクションや顧客のプロフィール情報の両方に基づいたオファーの表示を行えるように、Interactを構成します。

Interactは、どのオファーをどの顧客に割り当てるかを定義するため、Campaignと緊密に統合されています。この統合により、Campaignのすべてのオファー管理ツールとともに、同じオファーをすべてのキャンペーンで使用できます。すべてのキャンペーンでコンタクト履歴とレスポンス履歴のすべてを統合することもできます。たとえば、電子メールとダイレクトメールによるコンタクトを使用して、ユーザに表示されるオファーに対し、リアルタイムに影響を与えることができます。

次の項では、Interactのさまざまなコンポーネントとその連携方法について説明します。

Interactのアーキテクチャ

Interactは、少なくとも設計環境とランタイム環境という2つの主要コンポーネントで構成されます。オプションのテストランタイム環境も構成できます。次の図は、高レベルのアーキテクチャの概要です。

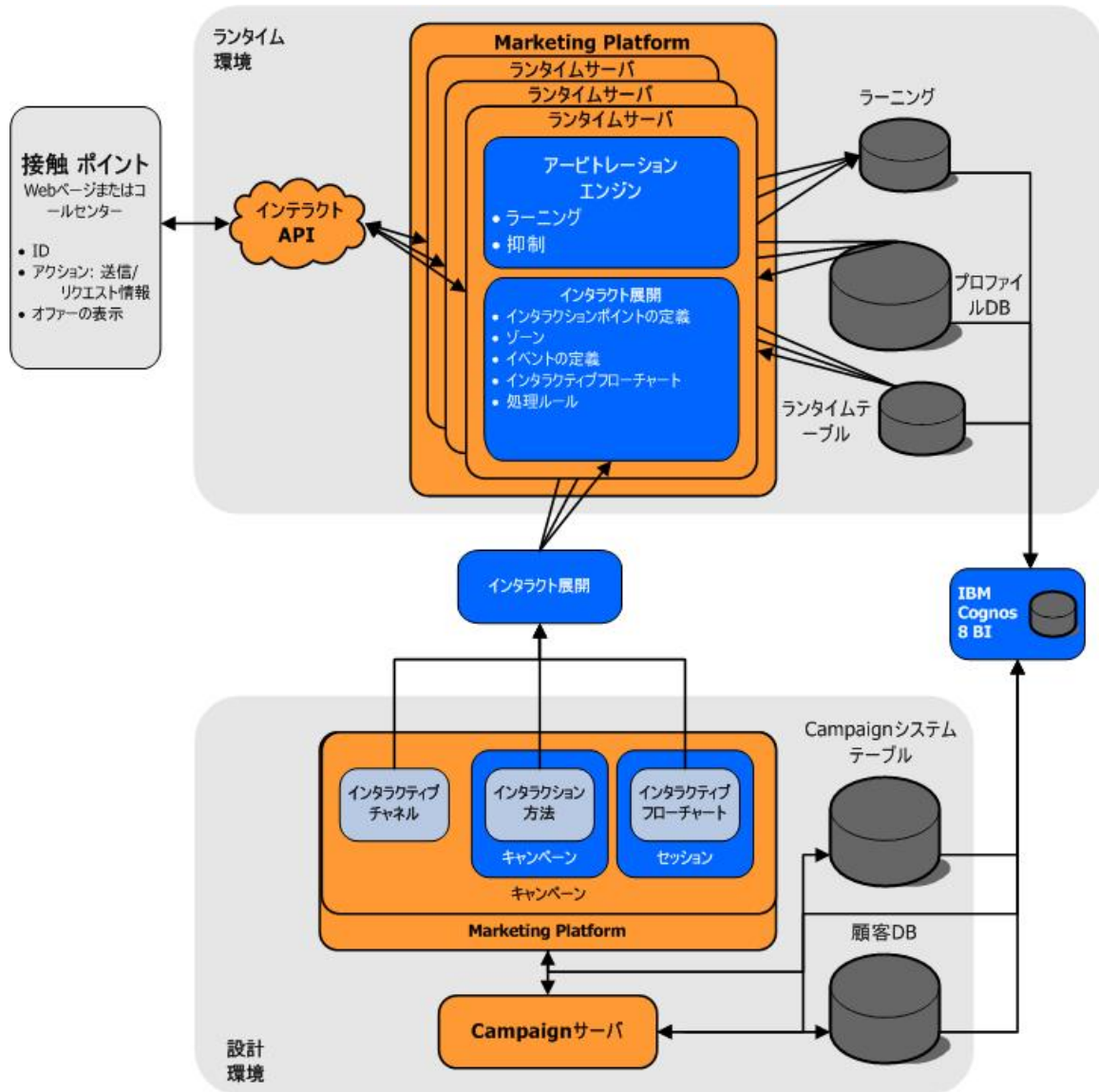


設計環境は、Interactの構成の大部分を行う場所です。設計環境は、Campaignと共にインストールされ、Campaignのシステムテーブルと顧客データベースを参照します。

Interactで顧客とのやりとりを処理する方法を設計して構成したら、テストする場合はテストランタイム環境にデータを配置し、リアルタイムで顧客とやりとりする場合は運用ランタイム環境にデータを配置します。

運用におけるアーキテクチャは、より複雑なものになる場合があります。たとえば、ランタイム環境に複数のランタイムサーバがある場合、それらを1つの負荷分散装置に接続することで、パフォーマンス要件を満たすようにします。

次の図に、Interactの環境をもう少し詳細に示します。



設計環境では、タッチポイント内の任意の場所におけるInteractの動きは、インタラクティブチャネルを構成することで定義します。その後で、インタラクティブフローチャートを作成することで顧客をセグメントに分割します。インタラクティブフローチャート内では、テスト実行を行うことで、顧客データが正しくセグメント化されたことを確認できます。続いて、オファーを定義する必要があります。次に、インタラクティブ方法で、セグメントにオファーを割り当てます。すべてのInteractコンポーネントを構成したら、構成をステージングランタイム環境に配置する準備が整ったことになります。

Interactの配置は、次の要素で構成されます。

- インタラクティブチャネルとインタラクティブ方法を含むInteract構成データ
- スマートセグメント、オファーおよびインタラクティブフローチャートを含むCampaignデータのサブセット

Interactの配置の一部でないときに、ランタイム環境で顧客データが必要になることがあります。このデータがランタイム環境で使用できることを確認してください。

ステージングランタイム環境は、顧客指向でないという点を除いて運用ランタイム環境と同じであり、タッチポイントでのAPI統合など、Interactの構成全体をテストできます。ランタイム時は、システムが行うアクションをテストする人(顧客またはステージングサーバの場合もあります)がタッチポイントに存在しています。これらのアクションでは、Interact APIを使用して、ランタイムサーバにイベントを送信したりデータを要求したりします。ランタイムサーバは続いて、オファー(データ)セットなどの結果と共に応答するか、または顧客を新しいセグメント(イベント)に再セグメント化します。動作内容に満足するまでは、Campaign内のInteract構成の変更を続行して、ランタイム環境で再配置することができます。続いて、運用ランタイム環境に構成を配置します。

運用ランタイムサーバは、コンタクト履歴とレスポンス履歴などの統計的な履歴データを記録します。構成されると、ユーティリティによってコンタクト履歴とレスポンス履歴のデータが、運用ランタイムサーバグループ内のステージングテーブルからCampaignのコンタクト履歴とレスポンス履歴にコピーされます。このデータはレポートで使用されます。レポートを使用してInteractの設定の効果を把握し、必要に応じて構成を変更します。このデータは、リアルタイムキャンペーンを従来のキャンペーンに統合するために、CampaignやOptimizeなどのその他のIBM Unica 製品でも使用できます。たとえば、顧客がWeb上のオファーを承認した場合に、そのデータをCampaignで使用することで、同じオファーを郵便で送付しないようにしたり、電話でオファーのフォローアップができるようにします。

次の項では、CampaignとInteractの両方における重要な用語と概念について説明します。

Campaignの主要な概念

Interactを使用する前に、知っておく必要があるCampaignの概念がいくつかあります。これらの概念は要約して説明されています。詳細については、『*Campaignユーザガイド*』を参照してください。

Campaignについて

Campaignは、ユーザがダイレクトマーケティングキャンペーンを設計、実行および分析できるようにする、Webベースの企業マーケティング管理(EMM)ソリューションです。Campaignでは、使いやすいグラフィカルユーザインターフェイスにより、顧客IDリストの選択、非表示、分類およびサンプリングのダイレクトマーケティングプロセスがサポートされています。

ターゲットを選択すると、Campaignを使用してオファーを割り当てたり、電子メールを送信することなどにより、マーケティングキャンペーンを定義および実行できます。Campaignを使用すると、キャンペーンに対するレスポンスのトラッキング、出力リストの作成およびコンタクト履歴へのコンタクトの記録を行ったり、次のキャンペーンでそれらの情報を使用することもできます。

オーディエンス

オーディエンスは、キャンペーンのターゲットにできる識別子のコレクションです。たとえば、一連のキャンペーンでオーディエンスとして「世帯」、「見込み客」、「顧客」および「アカウント」を使用できます。これらの各オーディエンスは、キャンペーンのマーケティングデータに対する視点を表します。

オーディエンスは、通常は階層的に整理されます。上の例で説明します。

- 世帯は、階層の最上位であり、各世帯には複数の顧客と1人以上の見込み客を含めることができます。
- 顧客は、階層内で2番目の階層であり、各顧客には複数のアカウントを含めることができます。
- アカウントは階層の最下位に位置します。

もう少し複雑なオーディエンス階層の例としては、B2B環境のオーディエンスで、ビジネス、会社、部署、グループ、個人、アカウントなどが必要となる場合があります。

こうしたオーディエンスは、それぞれが1対1、多対1、1対多などの関係性を持っている場合があります。オーディエンスを定義すると、これらの概念をCampaignで示すことによって、ユーザが目的を定める際にこれらのオーディエンスの関係性を管理できるようになります。たとえば、世帯ごとに複数の見込み客がいる場合、世帯ごとに1人の見込み客にメールの送信を絞ることができます。

キャンペーン

キャンペーンはマーケティングにおいて、マーケティングコミュニケーションや販売の目標を達成するために実行される、関連のアクティビティやプロセスとして選択されます。Campaignには、設計、テスト、自動化および分析を支援するマーケティングキャンペーンを表す、キャンペーンと呼ばれるオブジェクトも含まれます。

キャンペーンには、キャンペーンの実行用データに関する一連のアクションを設計するため、1つまたは複数のフローチャートが含まれます。

セル

セルは、データベースから読み込んだ(顧客または見込み客のIDなどの)IDのリストです。Campaignでは、フローチャートでデータ操作プロセスを構成および実行することで、セルを作成します。これらの出力セルは、同じフローチャートの下流にある、そのプロセスによって作成された他のプロセスへの入力としても使用できます。作成できるセルの数に制限はありません。

Campaignでオファーを1つまたは複数割り当てるセルをターゲットセルと呼びます。ターゲットセルは、同質のオーディエンスメンバで構成されるグループです。たとえば、セルは、単価の高い顧客や、Web上の店舗を好む顧客、期日支払いのアカウント、電子メールでのやりとりを選んだ顧客、またはリピート購入者に対して作成できます。作成したセルまたはセグメントは、パフォーマンスレポートでの比較において、さまざまなオファーやコンタクトチャネルを別個に扱ったり、それぞれをトラッキングしたりできます。

ID を含むセルはコントロールセルと呼ばれ、オファーを受け取る資格がありますが、分析目的のオファーは受け取ることができません。Campaignでは、コントロールは常にコントロールを提供します。

「セル」は、「セグメント」に代わる用語として使用されることがあります。戦略的セグメントは、キャンペーンフローチャートよりもセッションで作成されるセルです。戦略的セグメントは、キャンペーン内でグローバルに使用できるという点を除き、他のセル(例: フローチャートのセグメントプロセスで作成されたもの)との違いはありません。戦略的セグメントは、静的なIDのリストです。最初のリストを作成したフローチャートが再び実行されるまでは変更されません。

フローチャート

Campaignでは、フローチャートが、プロセスと呼ばれるビルドブロックで定義したとおりに、データ上で実行する一連のアクションを表します。フローチャートは、スケジュールや定義されたトリガによって手動で実行することができます。

フローチャートは、ダイレクトメールに適した受信者を決定し、受信者のグループでメーリングリストを作成し、1つまたは複数のオファーに受信者を関連付けることなどにより、特定のマーケティングの目的を達成するために使用します。また、キャンペーンに応答した人をトラッキングして処理し、キャンペーンの投資収益率を計算することもできます。

各キャンペーンでは、キャンペーンを実装するために1つまたは複数のフローチャートを設計して、フローチャートを作成するプロセスを構成して、必要なデータ操作やアクションを実行できるようにします。

各フローチャートには次の要素があります。

- 名前
- 説明
- 1つまたは複数のデータソースからマップされた1つまたは複数のテーブル
- マーケティングロジックを実装する相互接続されたプロセス

オファー

オファーは、さまざまな方法で配信される単一のマーケティングメッセージを表します。

Campaignでは、1つまたは複数のキャンペーンで使用できるオファーを作成します。

オファーは次の状況で再利用されます。

- さまざまなキャンペーンで
- 異なるタイミングで
- さまざまな人々(セル)の集まりで
- オファーのパラメータ化されたフィールドを変更することで、異なる「バージョン」として

コンタクトプロセスのいずれかを使用して、フローチャートのターゲットセルにオファーを割り当てます。その後で、オファーを受信した顧客や応答した顧客に関するデータを取得して、キャンペーンの結果をトラッキングします。

セッション

セッションはCampaignの構造概念です。基本となる永続的でグローバルなデータ構造体(戦略的セグメントやキューブなど)をCampaign管理者が作成し、すべてのキャンペーンで利用できるようにします。キャンペーンと同様、セッションも個々のフローチャートで構成されます。

Interactの主要な概念

この項では、Interactで作業する前に知っておきたい主要な概念について説明します。

設計環境

設計環境は、Interactの構成の大部分を行う場所です。設計環境では、イベント、インタラクティブポイント、スマートセグメントおよび処理ルールを定義します。これらのコンポーネントを構成したら、コンポーネントをランタイム環境に配置します。

設計環境は、CampaignのWebアプリケーションと共にインストールされます。

インタラクティブチャネル

インタラクティブチャネルは、インターフェイスの方式がインタラクティブダイアログであるタッチポイントにおいて、Campaignの表現方法です。このソフトウェアの表現方法は、インタラクティブマーケティングに関わるすべてのオブジェクト、データおよびサーバーリソースをまとめるために使用されます。

インタラクティブチャネルは、インタラクティブポイントとイベントを定義するために使用するツールです。また、インタラクティブチャネルの[レポート]タブからは、インタラクティブチャネルのレポートにアクセスできます。

インタラクティブチャネルには、運用ランタイムサーバとステージングサーバの割り当ても含まれます。複数のインタラクティブチャネルを作成すると、運用ランタイムサーバとステージングサーバのセットが1つしかない場合や、顧客指向のシステムによってイベントとインタラクティブポイントを分ける場合に、イベントとインタラクティブポイントを整理することができます。

インタラクティブフローチャート

インタラクティブフローチャートは、Campaignのバッチフローチャートと関連していますが、やや違いがあります。インタラクティブフローチャートの主要な機能はバッチフローチャートと同じで、顧客をセグメントというグループに分割します。インタラクティブフローチャートの場合は、グループはスマートセグメントになります。Interactでは、これらのインタラクティブフローチャートを使用して、行動イベントやシステムイベントで訪問者の再セグメント化が必要と判断された場合に、プロフィールをセグメントに割り当てます。

インタラクティブフローチャートには、バッチフローチャートのプロセスのサブセットと、インタラクティブフローチャートに固有のプロセスがいくつか格納されます。

✧ インタラクティブフローチャートはCampaignのセッションでのみ作成できます。

インタラクションポイント

インタラクションポイントは、オファーを表示するタッチポイント内の場所です。インタラクションポイントには、ランタイム環境に適切なコンテンツがない場合に表示される、既定のフィルターコンテンツが含まれています。

インタラクションポイントはゾーンで整理できます。

イベント

イベントは、訪問者によってランタイム環境でトリガされるアクションのことで、セグメントへの訪問者の配置、オファーの表示、データの記録などがあります。

イベントはインタラクティブチャンネル内に作成された後、`postEvent`メソッドを使用したInteract APIへの呼び出しによってトリガされます。イベントは、Interact設計環境で定義された次のいずれかまたは複数のアクションに誘導できます。

- 再セグメントのトリガ
- ログオファーコンタクト
- ログオファー承認
- ログオファー拒否

また、イベントを使用して、`postEvent`メソッドで定義されたアクションをトリガすることもできます。これらのアクションには、テーブルへのデータの記録、学習データの記録、フローチャートのトリガなどがあります。

イベントは、設計環境での利便性をはかるため、カテゴリ別に整理することができます。カテゴリには、ランタイム環境における機能的な目的はありません。

プロフィール

プロフィールは、ランタイム環境で使用される顧客データのセットです。このデータは、顧客データベースやリアルタイムに収集されたデータ、またはその両方で利用できる顧客データのサブセットになります。このデータは、次の目的に使用されます。

- リアルタイムインタラクションのシナリオで、顧客を1つまたは複数のスマートセグメントに割り当てるため。

セグメント化するオーディエンスごとにプロフィールデータのセットが必要です。たとえば、場所ごとにセグメント化する場合、保持しているすべての住所情報から顧客の郵便番号のみを含めることができます。

- オファーをカスタマイズするため。
- 学習用にトラッキングする属性として

たとえば、Interactを構成して、訪問者の婚姻に関するステータスと、各ステータスで特別なオファーを承認した訪問者の数を監視できます。ランタイム環境では、その情報を使用してオファーの選択を絞り込むことができます。

このデータは、ランタイム環境では読み取り専用です。

ランタイム環境

ランタイム環境ではタッチポイントに接続して、インタラクションを実行します。ランタイム環境は、タッチポイントに接続される1つまたは複数のランタイムサーバで構成されます。

ランタイム環境では、Interact APIと連携しながら、設計環境から配置した情報を使用して、タッチポイントにオファーを表示します。

ランタイムセッション

ランタイムセッションは、タッチポイントの訪問者ごとにランタイムサーバ上に1つ存在します。このセッションでは、ランタイム環境で訪問者をセグメントおよび推奨オファーに割り当てるための、すべてのデータが保持されます。

ランタイムセッションは、`startSession`呼び出しを使用するときに作成します。

スマートセグメント

スマートセグメントは、定義された特性を持つ顧客のグループで、戦略的セグメントに似ています。ただし、スマートセグメントではIDのリストではなく、リスト内で許可されるIDを定義します。たとえば、「コロラド州に住むすべての顧客のうち、10,000ドル以上の残高があり、過去半年間に自動車ローンが適用されている人」というスマートセグメントを作成できます。これらの定義は、インタラクティブフローチャートを使用して表現できます。スマートセグメントはInteractでのみ利用できます。

タッチポイント

タッチポイントは、顧客とやりとりできるアプリケーションまたは場所のことです。タッチポイントは、顧客がコンタクト(受信インタラクション)を開始するチャネルになるか、または顧客にコンタクト(発信インタラクション)するチャネルになります。一般的な例は、Webサイトやコールセンターアプリケーションです。Interact APIを使用してInteractをタッチポイントに統合し、タッチポイントでの顧客のアクションに基づいて、オファーを表示できます。タッチポイントは、顧客対応システム(CFS)とも呼ばれます。

処理ルール

処理ルールでは、オファーをスマートセグメントに割り当てます。これらの割り当ては、処理ルールでオファーに関連付けたカスタム定義のゾーンによって制約されます。たとえば、「ログイン」ゾーン内のスマートセグメントにオファーセットを割り当てて、同じセグメントの別のオファーセットを「購入後」ゾーンに割り当てることができません。処理ルールは、キャンペーンのインタラクション方法タブで定義されます。

各処理ルールには、マーケティングスコアもあります。顧客が複数のセグメントに割り当てられると、複数のオファーが適用可能になります。マーケティングスコアは、Interactで提示するオファーを定義するのに役立ちます。ランタイム環境で提示するオファーは、学習モジュール、オファー非表示リスト、グローバルオファーの割り当てと個々のオファーの割り当てによって影響を受けます。

Interact API

Interactのアプリケーションプログラミングインターフェイス(API)は、Interactをタッチポイントと統合するため、HTTP経由のJavaシリアライゼーションまたはSOAP実装として動作させることができます。

ゾーン

インタラクションポイントはゾーンで整理されます。処理ルールを制限して、特定のゾーンのみに適用することができます。すべての「ようこそ」コンテンツを含むゾーンを作成し、「クロスセル」コンテンツ用の別のゾーンを作成すると、顧客がいるタッチポイントの場所に基づいて、同じセグメントに対して異なるオファーセットを表示することができます。

Interactでの作業

- [Interactユーザー](#)
- [Interactのワークフロー](#)
- [Interactの実装のプランニング](#)

Interactユーザー

Interactは、組織内の多数の人が使用できるように設計されています。Interactは、タッチポイントとマーケティングキャンペーンとの接点であるため、両者に関わる組織内の担当者は、Interactを使用するか影響を受けることになります。

次のリストで、潜在的なInteractユーザーの役割を説明します。これらの責務は、組織内の複数の人で分担するか、数人で複数の役割を実行することができます。

- タッチポイントを取り囲むすべてのインフラストラクチャを監視するユーザー。このユーザーは、設計環境の構成に積極的に関わることはありませんが、タッチポイントが常時稼働中であることを保証する責任があります。また、Interact APIを使用して、タッチポイントとランタイム環境との統合をコーディングします。このユーザーは、運用ランタイムサーバへの新しい構成の配置を承認します。また、このユーザーは、ステージングサーバからの統計情報とレポートを検討して、運用ランタイムサーバに新しい構成を配置したときの影響を分析します。
- Marketing Platform、CampaignおよびInteractをインストールして構成するユーザー。このユーザーは、ランタイムサーバグループをインストールして構成しますが、新しい構成の配置作業も担当します。このユーザーがInteract管理者とみなされることがあります。
- リアルタイムインタラクションを設計するユーザー。このユーザーは、インタラクティブチャネルとキャンペーンで作業することによって、オファーとそのオファーを受信する顧客を定義します。このユーザーは、ランタイム環境で実際に構成作業を行うことはありませんが、構成について定義し、時間をかけてパフォーマンスと投資収益率の詳細レポートを検討します。
- インタラクティブフローチャートを作成することで、インタラクティブチャネルの分類ロジックを設計するユーザー。
- Interactで使用されるデータを管理するユーザー。このユーザーはInteractを使用することはありませんが、設計チームにとって不可欠です。このユーザーは、分類ロジックを設計するユーザーおよびタッチポイントを管理するユーザーと協力して、正しいデータを必要な場所に配置して、適切な形式でインデックス付けすることで、すべてのパフォーマンス要件を満たすようにする必要があります。

Interactのワークフロー

Interactの構成は、複数の手順を複数の担当者で、反復的なプロセスによって行います。構想から配置までのプロセスは、主に3つのコンポーネントに分けることができます。それは設計、構成、テストです。

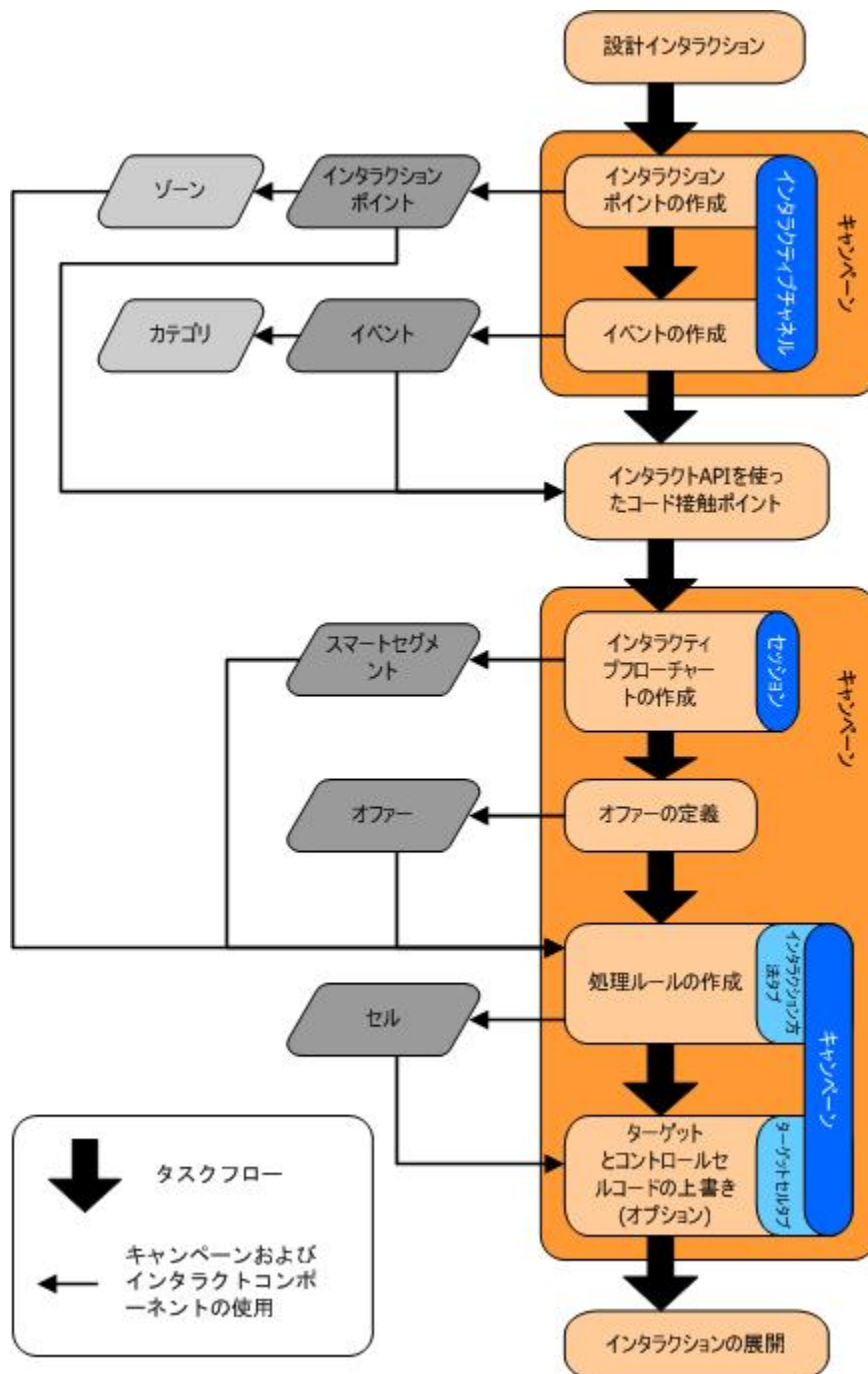
- **設計:** 設計フェーズでは、どのようなインタラクティブマーケティング戦略を使用したいか意見を出し合います。タッチポイントで行うことについて構想を練った後は、それをInteractで実装する方法を決定する必要があります。この話し合いは、タッチポイントを管理する人とマーケティング計画を設計する人が協力し合って行います。ビジネスの目的とターゲットの集計項目を使用して、インタラクションポイントとゾーンのリストを作成します。このリストは、セグメントと非表示の戦略をおおまかに示すものです。こうした話し合いには、セグメント化を実行するのに必要なデータも含まれます。

- **構成:** 構成フェーズでは、タッチポイントの管理者とInteractユーザが設計を実装します。Interactユーザは、セグメントへのオファーの割り当てを定義し、設計環境内でインタラクティブチャンネルを構成します。タッチポイントの管理者は、Interact APIを使用してランタイムサーバと動作するタッチポイントを構成します。データ管理者は、テストと運用の両方で必要なデータテーブルを構成し、作成する必要があります。
- **テスト:** 設計環境でInteractを構成した後は、ステージングランタイム環境に対し、さまざまなコンポーネントの配置をマーキングします。Interact管理者は、ステージングサーバに構成を配置し、テストを開始します。Interactの実装の設計に関わったチームのメンバ全員が、設計したとおりに構成が実行されており、ランタイム環境のパフォーマンスが応答時間とスループットの点で許容範囲内にあるかを確認します。

ユーザは、変更をいくつか加えたり、テストをさらに実行する必要があるかもしれません。全員が結果に満足したところで、マネージャが運用サーバに対し、その構成の配置をマーキングします。

この時点で、タッチポイントの管理者もすべての結果を確認し、構成が顧客対応システム上で不都合な影響を与えないことを保証します。構成は、すべての関係者から承認を得たところで、運用ランタイムサーバに配置できます。

次の図に、サンプルの設計フローを示します。この図では、進捗を直線で示していますが、実際には多くの人々がさまざまなコンポーネントで同時に作業を進めます。これは反復的なプロセスでもあります。たとえば、Interact APIを使用してInteractと動作するようにタッチポイントを構成するには、インタラクティブチャンネルに作成されたイベントを参照する必要があります。タッチポイントの管理者がランタイム環境にタッチポイントを構成するときに、イベントがもっと必要であると気付く場合があります。その場合は、Interactユーザが設計環境にこれらのイベントを作成する必要があります。



最初のタスクは、インタラクションを設計することです。続いて、インタラクティブチャネルに、インタラクションポイント、ゾーン、イベントおよびカテゴリを作成します。タッチポイントの管理者は、Interact APIでインタラクションポイントとイベントの名前を使用して、タッチポイントを構成します。

インタラクションの構成、Campaignセッションでのインタラクティブフローチャートの作成およびオファーの定義を続行します。

すべてのゾーン、オファーおよびセグメントを作成したら、キャンペーンのインタラクション方法タブで処理ルールを作成できます。このタブは、セグメントに対しゾーン別にオファーを割り当てる場所です。また、時間をかけて、[ターゲットセル]タブにターゲットセルとコントロールセルを割り当てることもできます。

これでインタラクションが完了し、ステージングサーバに配置してテストすることができます。

Interactの実装のプランニング

Interactの実装を設計するには、複数のコンポーネントを調整する必要があります。次の例では、Interactの実装を適切に設計するために答える必要がある、さまざまな質問を整理する方法を示しています。これらの質問は、インタラクション構成を設計するためのものです。

実装の設計における最初の手順は、「顧客とどこでどのようにやりとりしたいか」と自問することです。この質問への答えはほぼ無限にあります。Webサイト、自動音声応答(IVR)システム、販売時点管理(POS)システムとの統合を検討していますか? サイト内移動に基づいたバナー広告、以前の選択に基づくお勧め選択リスト、または現在の購入実績に基づいた節約クーポンを表示しますか? ほとんどのタッチポイントには、インタラクションで使用可能な場所が複数あるため、この質問は複数回問う必要があるかもしれません。

Interactでしたいことが明らかになった後は、作成する構成コンポーネントを定義する必要があります。タッチポイントの管理者と協力して、作成する必要があるインタラクションポイントとイベントを定義します。また、表示するオファーや顧客の分類方法、および使用中のサンプリング、統合またはトラッキングの戦略も考慮する必要があります。これらの質問に答えると、プロファイルデータベースに作成する必要がある情報を定義するのに役立ちます。同時に、インタラクションポイントをゾーンで整理する方法も考慮してください。ゾーンによって共通の目的をまとめることで、オファーの表示を微調整できるからです。

複数のオプション機能があり、オファー非表示、学習、個々のオファーの割り当ておよびスコアオーバーライドなどを実装できます。これらの機能のほとんどでは特定のデータベーステーブルが必要ですが、設計環境での構成作業はほとんど必要ありません。これらの機能の詳細については、『*Interact*管理者ガイド』を参照してください。

パフォーマンスはInteractに不可欠であるため、顧客を分類するのに必要なデータを考慮する必要があります。データベースからデータを取得するたびにパフォーマンスへの影響があるため、ランタイム環境に提供する情報は慎重に設計する必要があります。顧客データの設計と保守の詳細については、『*Interact*管理者ガイド』を参照してください。

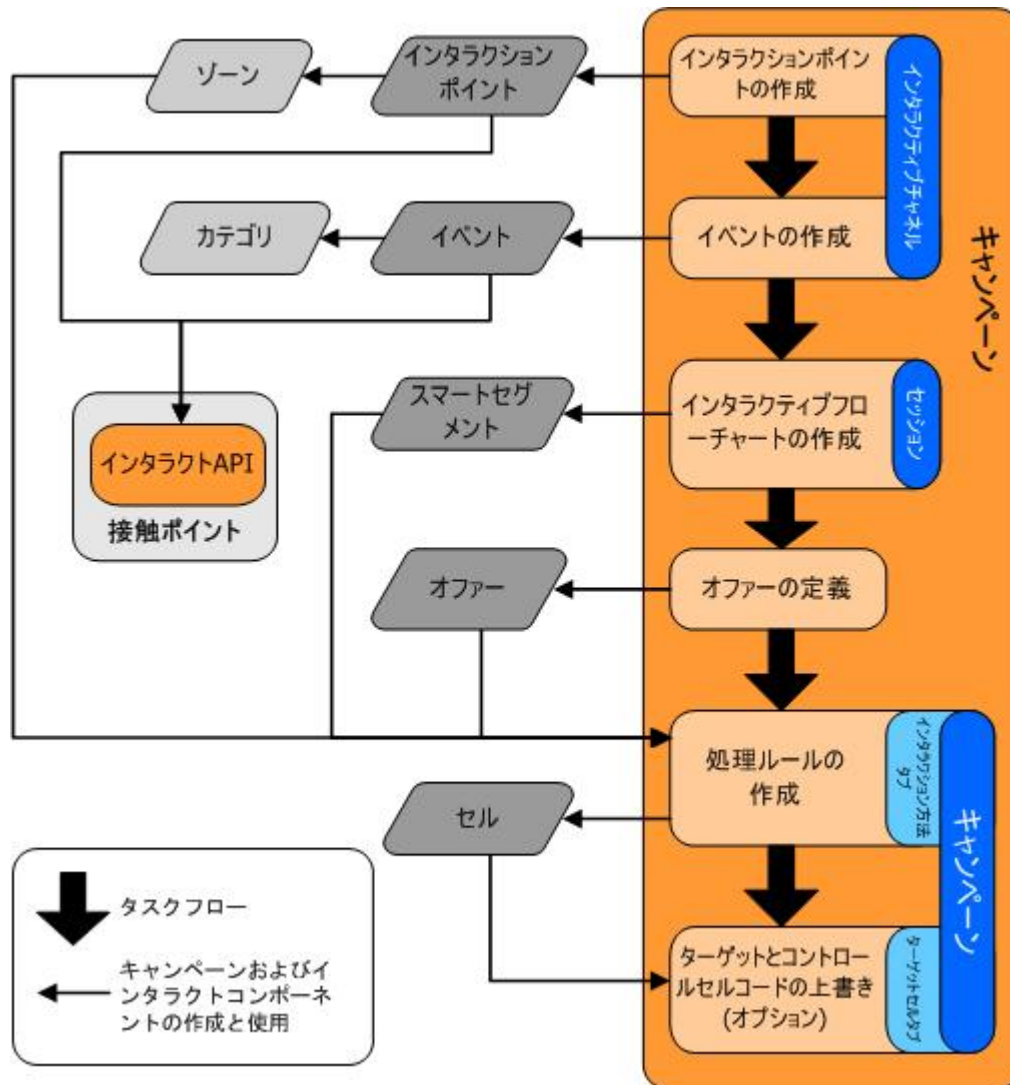
2 インタラクションの構成

- 設計環境
- Interact APIについて
- タスク1: インタラクティブチャネルの作成
- タスク2: ゾーンおよびインタラクションポイントの作成
- タスク3: カテゴリとイベントの作成
- タスク4: オファー制約の作成
- タスク5: カスタム学習モデルの作成
- タスク6: スマートセグメントの作成
- タスク7: オファーの定義
- タスク8: 処理ルールの作成
- タスク9: ターゲットセルとコントロールセルの割り当て
- タスク10: IBM Unica Interactの設定の配置

設計環境

Interact構成の設計は、組織内の多数の人々に関連する複数の手順から構成されます。この項では、設計環境に必要なさまざまな構成手順について説明します。

Interact構成の大半は、Interact APIを使用してタッチポイントとの統合を設定する手順で構成されています。Interact APIでの作業に関する詳細については、『*Interact管理者ガイド*』を参照してください。



上の図は、すべての設計ワークフローからの抜粋で、設計環境に見られる構成コンポーネントのみを示しています。この図では、進捗を直線で示していますが、実際には多くの人々がさまざまなコンポーネントで同時に作業を進めます。繰り返しのプロセスもあります。たとえば、処理ルールで作業しているときに、インタラクティブポイントとゾーンを再編成する必要があると気付く場合があります。Interact構成での作業は、従来のキャンペーンの作成と作業にも関連します。

サンプルのワークフローには、次の手順が含まれます。

1. インタラクティブチャネルを作成します。
2. インタラクティブチャネル内にインタラクティブポイントを作成します。
3. インタラクティブチャネル内にイベントを作成します。
4. インタラクティブフローチャートを使用して、スマートセグメントを定義します。
5. オファーを定義します。
6. インタラクション方法タブで、処理ルールを定義します。
7. (任意)ターゲットセルタブで、ターゲットセルとコントロールセルを上書きします。

8. インタラクションを配置します。

これらのタスクをすべて完了すると、設計環境でInteract構成に必要なすべてのコンポーネントを作成したことになります。これらの構成は、[配置準備完了]とマーキングできます。Interact管理者がランタイムサーバに構成を配置し、タッチポイントがInteract APIに統合されると、Interactの実装は完了します。

Interact APIについて

タッチポイントと動作させるためのInteractの構成には、次の2つの主要なコンポーネントがあります。

- 設計環境でのInteractの構成。
- Interact APIを使用してランタイム環境で動作するタッチポイントの構成。

これらの2つの構成コンポーネントは異なる2つの領域に見られますが、互いに関連性があります。Interact APIは、設計環境内の構成要素をいくつか参照する必要があります。Interact APIで作業している担当者と協力して、命名規則、要素の目的などについて合意する必要があります。これは、反復的で協力的なプロセスです。Interact APIとタッチポイントでの作業の担当者は、イベントとインタラクションポイントをもっと作成しなければならないことがあります。設計環境でインタラクションを設計するときは、APIで作業している担当者に要件をさらに求める場合があります。

Interact APIによって参照されるInteract構成の要素は複数あります。ただし、次の3つの要素は名前でも参照されます。

- インタラクティブチャネル
- インタラクションポイント
- イベント

Interact APIで作業するときは、これらの要素を名前でも参照する必要があります。これらの名前を一致させる必要がありますが、大文字と小文字は区別されません。`myinteract`、`myInteract`および`mYiNtErAcT`の名前をすべて一致させます。

インタラクションを強化するためにInteract APIで使用できるその他のInteract構成の要素には、スマートセグメント、キャンペーンの開始日と終了日、オファーおよびインタラクティブフローチャートなどがあります。

ランタイム時にInteract APIはインタラクティブフローチャートおよび処理ルールからの情報を要求しますが、APIはそれらの情報を間接的に呼び出します。たとえば、APIはインタラクティブフローチャートを呼び出しません。ただし、APIは再セグメントを要求するイベントを呼び出して、インタラクティブチャネルに関連付けられたすべてのインタラクティブフローチャートを実行します。同様に、APIが`getOffers`メソッドでオファーを要求すると、処理ルールの参照を含む一連のイベントが開始されます。

Interact APIは、Campaignの次の要素を参照します。

- オーディエンスID
- オーディエンス
- カスタムオファー属性

- オファーコード
- オファーの説明
- オファー有効日
- オファー終了日
- オffer名
- オffer処理コード

これらの要素は、設計環境全体で共有されるため、組織におけるこれらの要素の標準を決定する必要があります。この情報のいくつかは、オーディエンスIDなどのInteract APIを正しく呼び出すために提供したり、オffer属性などのAPIを使用して要求したりする必要があります。

また、Interact APIでオfferのスコアを参照することもできます。通常は、これはインタラクション方法タブに割り当てられているマーケティングスコアになります。このスコアは、Campaign環境全体ではなくInteractのみに関連します。インタラクション方法タブのマーケティングスコアは変更または上書きできます。Interact APIの詳細については、『*Interact*管理者ガイド』を参照してください。

Interactランタイム

この項では、インタラクション中にランタイムサーバ上で起こる事象について、簡単に説明します。

ランタイムセッションが開始されたとき、つまり訪問者がコンタクトを開始したときに、Interact APIは`startSession`をトリガします。この呼び出しには、次の手順が含まれます。

1. 新しいランタイムセッションを作成します。

ランタイムセッションは、訪問者に関連付けられたすべてのデータを含むランタイムサーバ上のインスタンスです。これには、セグメントメンバシップまたはオfferのリストなどの、すべての既知のプロファイルデータおよびランタイムへの要求結果が含まれます。

2. ランタイムセッションで訪問者のプロファイルデータを読み込みます。
3. インタラクティブチャネルに関連付けられたすべてのインタラクティブチャートを実行し、訪問者をセグメントに配置します。

訪問者がタッチポイントと対話するときには、Interact APIが、イベントのトリガ、プロファイル情報の要求および訪問者のオーディエンスの変更などの複数のアクションを実行できます。訪問者がタッチポイントのインタラクションポイントに到着すると、Interact APIは1つまたは複数のオfferを要求したり、イベントをトリガしたりできます。訪問者がログアウト、操作を中止、またはタイムアウトした場合、ランタイムサーバはランタイムセッションを終了します。

これは基本的な概要です。有効にできるオプシオン機能は多数あり、学習モジュールなどでオfferの推奨機能を強化できます。これらのオプシオン機能の詳細については、『*Interact*管理者ガイド』を参照してください。

タスク1: インタラクティブチャネルの作成

- インタラクティブチャネルでの作業
- オファーの最大表示回数
- インタラクティブチャネルを作成するには
- テーブルのマッピングについて
- インタラクティブチャネルにプロファイルテーブルをマップするには
- インタラクティブチャネルにディメンションテーブルをマップするには
- オーディエンスのプロファイルテーブルマッピングウィザード
- インタラクティブチャネルの[サマリ]タブ

インタラクティブチャネルでの作業

インタラクティブチャネルは、インタラクティブマーケティングに関わるすべてのオブジェクト、データおよびリソースをまとめるために使用される、顧客対応タッチポイントの表現方法です。通常は、Interactと統合しているタッチポイントごとに1つのインタラクティブチャネルを作成します。たとえば、Interactと統合するWebサイトとコールセンターが1つずつある場合は、タッチポイントのタイプごとに1つずつ、計2つのインタラクティブチャネルを作成します。ただし、同じタイプのタッチポイントを表すために異なるインタラクティブチャネルを作成することもできます。たとえば、社内のブランドごとに専用のWebサイトがある場合は、各サイトが同じサーバ上でホストされている場合でも、ブランドごとに1つずつインタラクティブチャネルを作成します。

インタラクティブチャネルでは、インタラクシオン構成の複数のコンポーネント(インタラクシオンポイント、ゾーン、イベントおよびカテゴリなど)を整理および構成します。また、インタラクティブチャネルには、プロファイルテーブルをマップして、インタラクシオンのプロセスと方法をランタイムサーバに配置します。インタラクティブチャネルの[サマリ]タブには、参考としてインタラクシオン構成(インタラクティブフローチャートおよび処理ルール)のその他のコンポーネントへのリンクが表示されます。

インタラクティブチャネルは、Interact APIと直接やりとりするCampaignのInteract構成における、3つの要素のうちの1つです。APIのstartSessionメソッドを使用するときは、インタラクティブチャネルの正確な名前を使用する必要があります。この名前の大文字と小文字は区別されません。

インタラクシオンチャネルは、組織に必要なだけ配置できます。さまざまなキャンペーンが、インタラクシオン方法タブの同じインタラクティブチャネルを参照できます。たとえば、新しい携帯電話のキャンペーンと新しい電話料金プランのキャンペーンがあるとします。各キャンペーンに、Webサイトのインタラクティブチャネルのインタラクシオン方法タブを設定することができます。同じキャンペーンに複数のインタラクティブ方法タブを設定して、それぞれのタブで異なるインタラクティブチャネルを参照することができます。したがって、新しい携帯電話のキャンペーンに、Webサイト用のインタラクシオン方法タブとコールセンター用のインタラクシオン方法タブを設定できます。

オファ어의最大表示回数

インタラクティブチャンネルの設定の1つは、**[1回の訪問時のオファ어의最大表示回数]**です。この設定では、1回のランタイムセッション中に1人の訪問者に対し、タッチポイントが単一のオファ어를表示する回数を定義します。この数値は、ランタイム環境がオファ어를推奨する回数ではなく、オファ어가コンタクトとして記録される回数によってトラッキングされます。オファ어コンタクトを記録していない場合、ランタイム環境はオファ어가提示されていないと見なします。そのため、オファ어의最大数を超えた場合でもオファ어의推奨を続行します。

また、ランタイム環境は、**[1回の訪問時のオファ어의最大表示回数]**を計算するために、既定の文字列をオファ어と見なすことはありません。たとえば、すべてのインタラクティブポイントで同じ既定文字列を保持していて、同じ既定のオファ어とネットワーク上で発生している事象が示される場合、タッチポイントはランタイムサーバにアクセスできなくなります。そのため、タッチポイントはインタラクティブポイントからの既定の文字列を表示します。タッチポイントは同じオファ어를複数回提示しますが、そのオファ어は**[1回の訪問時のオファ어의最大表示回数]**としてカウントされません。

インタラクティブチャンネルを作成するには

1. **[キャンペーン] > [インタラクティブチャンネル]**を選択します。
[すべてのインタラクティブチャンネル]ページが表示されます。
2. [すべてのインタラクティブチャンネル]ページで、**[インタラクティブチャンネルを追加]**アイコンをクリックします。
[インタラクティブチャンネルの追加/編集]ページが表示されます。
3. インタラクティブチャンネルの**[名前]**と**[説明]**を入力します。
4. インタラクティブチャンネルの**[セキュリティポリシー]**を選択します。
5. このインタラクティブチャンネルに関連付けるサーバグループを、ランタイムサーバグループのリストから選択します。
Shiftキーを押しながらクリックするか、または**Ctrl**キーを押しながらクリックすることで、複数のサーバグループを選択できます。
6. **[運用ランタイムサーバグループ]**リストから、運用サーバを選択します。
7. **[1回の訪問時のオファ어의最大表示回数]**を入力します。
8. **[変更の保存]**をクリックします。

新しいインタラクティブチャンネルのインタラクティブチャンネルの**[サマリ]**タブが表示されます。

インタラクティブチャンネルを編集するには、インタラクティブチャンネルの**[サマリ]**タブで、**[このページを編集]**アイコンをクリックします。

✳ セキュリティポリシーは編集できません。

インタラクティブチャンネルを削除するには、[すべてのインタラクティブチャンネル]ページのインタラクティブチャンネルの横にあるチェックボックスをオンにして、[選択項目の削除]アイコンをクリックします。インタラクティブチャンネルを削除すると、そのチャンネルに関連付けられたすべてのインタラクシヨポイントとイベントが削除されます。インタラクティブチャンネルを削除できるかどうかは、そのインタラクティブチャンネルの配置ステータスに依存します。

関連トピック

- 配置と削除

テーブルのマッピングについて

テーブルのマッピングは、Campaignでアクセスできる外部の顧客テーブルまたはシステムテーブルを作成するプロセスです。

テーブルマッピングは、ベース、ディメンションまたはその他のテーブルを定義するために使用されるメタデータです。データソース、テーブル名と場所、テーブル項目、オーディエンスおよびデータに関する情報が含まれています。テーブルマッピングは、テーブルカタログで再利用するために保存できます。

インタラクティブチャンネルにプロファイルテーブルをマップするには

ディメンションテーブルをマップする前に、プロファイルテーブルをマップする必要があります。

1. インタラクティブチャンネルの[サマリ]タブの[マップされたプロファイルテーブル]で、マップするオーディエンスごとに[マップされていない]をクリックします。

オーディエンスのプロファイルテーブルマッピングウィザードが表示されます。

2. オーディエンスのプロファイルテーブルマッピングウィザードの手順を完了します。

オーディエンスのプロファイルテーブルマッピングウィザードによってテーブルマッピングが検証されると、Campaign > partitions > partitionN > Interact > flowchart > datasourceのプロパティで定義されたデータソースが参照されます。すべてのインタラクティブチャンネルが同じデータソースを参照する必要があります。このデータソースはテスト実行専用です。

プロファイルテーブルのマッピングを編集するには、マップされたプロファイルテーブルの名前をクリックして、オーディエンスのプロファイルテーブルマッピングウィザードの手順を完了します。

関連トピック

- オーディエンスのプロファイルテーブルマッピングウィザード

インタラクティブチャンネルにディメンションテーブルをマップするには

ディメンションテーブルをマップする前に、インタラクティブチャンネルにプロファイルテーブルをマップする必要があります。

オーディエンスのプロファイルテーブルマッピングウィザードは、Campaign > partitions > partitionN > Interact > flowchart > datasourceのプロパティで定義されたデータソースを参照します。

すべてのインタラクティブチャンネルが同じデータソースを参照する必要があります。

1. インタラクティブチャンネルの[サマリ]タブの[マップされたプロファイルテーブル]で、プロファイルテーブルの名前をクリックします。

オーディエンスのプロファイルテーブルマッピングウィザードが表示されます。

2. [新しいディメンションテーブルのマッピング]をクリックします。
3. オーディエンスのプロファイルテーブルマッピングウィザードの手順を完了します。

関連トピック

- オーディエンスのプロファイルテーブルマッピングウィザード

オーディエンスのプロファイルテーブルマッピングウィザード

オーディエンスのプロファイルテーブルマッピングウィザードは、インタラクティブチャンネルにプロファイルテーブルとディメンションテーブルをマップする場合に使用します。

オーディエンスのプロファイルテーブルマッピングウィザードでは、最初の画面にマップ、編集、マッピング解除が可能なテーブルのリストが表示されます。

- プロファイルテーブルに続けてディメンションテーブルをマップするには、[新しいディメンションテーブルのマッピング]をクリックします。オーディエンスにプロファイルテーブルを定義した後は、ディメンションテーブルだけをマップできます。
- テーブルのマッピングを編集するには、編集対象のテーブルを選択し、[マッピングの編集]をクリックします。
- テーブルのマッピングを解除するには、解除対象のテーブルを選択し、[マッピング解除]をクリックします。

マップするテーブルの選択

項目	説明
マップするテーブルの選択	<p>これは、Campaign > partitions > partitionN > Interact > flowchart > dataSourceプロパティで定義されたデータソース内のすべてのテーブルのリストです。</p> <p>プロファイルテーブルをマップしている場合は、Campaign > partitions > partitionN > AudienceLevelsカテゴリで定義されているオーディエンスIDを含むテーブルを選択する必要があります。各オーディエンスIDの列は、名前から名前にマップする必要があります。</p>
訪問セッションの開始時にこのデータをメモリに読み込む	<p>このチェックボックスは、セッションを開始するときにオーディエンスメンバに関連付けられたレコードをランタイムセッションに読み込む場合にオンにします。この機能をインタラクティブチャネルのすべてのディメンションテーブルで選択すると、ランタイムセッションの開始時に、選択されたオーディエンスに対してすべてのデータベースの読み取りが行われます。これにより、ランタイムセッション全体のパフォーマンスが向上する可能性があります。ランタイムセッション開始時のデータベースの読み取りがパフォーマンスに作用することで、ランタイムセッション中の後続データの要求が速くなるためです。setAudienceメソッドを使用して、テーブルのデータを再び読み込むことができます。すべてのデータをメモリに読み込むと、パフォーマンスが向上する一方で、システムに対するメモリ要件も高くなります。</p>
IBM Unica テーブル名	<p>テーブルの名前は、インタラクティブフローチャートに表示されます。インタラクティブフローチャートでのテーブル名の表示方法は、フローチャートの設計者が正しいテーブルを選択しやすくするために変更することができます。名前は空白にできません。文字で始める必要があります、英数字とアンダスコアだけを含めることができます。また、IBM Unica のテーブル名は、テーブルマッピングにおいて、オーディエンスごと、インタラクティブチャネルごとに一意である必要があります。</p>
テーブルの詳細	<p>テーブルの詳細フィールドには、[項目名]が実際のデータソースで表示されるとおりに、[IBM Unica 項目名]がインタラクティブフローチャートで表示されるとおりに、[タイプ]フィールド、およびこれが [オーディエンスキー] フィールドであるかどうかが表示されます。</p> <p>プロファイルテーブルをマップしている場合、このテーブルのほとんどは無効です。オーディエンスIDフィールドに一致するフィールドでは、[オーディエンスキー]が選択されている必要があります。フィールドごとに [既定値] を定義できます。</p> <p>ディメンションテーブルをマップしている場合、[オーディエンスキー]列が有効です。ディメンションテーブルをベーステーブルに結合するフィールドの場合は、[オーディエンスキー]チェックボックスをオンにします。</p>

プロファイルテーブルをマップしている場合は、[マッピングの検証]をクリックします。

参照テーブルをマップしている場合は、[ディメンションをベースにマッピング]をクリックします。

ディメンションをベースにマッピング

項目	説明
ディメンションテーブルが次のベーステーブルに関連しています	このディメンションテーブルを結合するテーブルを選択します。
一致するベーステーブル項目	ベーステーブルからフィールドを選択して、ディメンションテーブルでキーフィールドをマップします。
結合タイプ	テーブルを結合する方法を選択します。有効な選択肢は、[自動選択済み]、[内部結合]および[外部結合]です。

マッピングの検証

テーブルのマッピングを検証すると、設計環境は、このインタラクティブチャンネルに関連付けられたすべてのインタラクティブフローチャート、キャンペーンおよび学習構成を調べることによって、変更が原因でインタラクション構成のいずれかの部分が壊れていないことを確認します。たとえば、インタラクティブフローチャートで必要なフィールドを削除すると、削除の影響を受けたため、ランタイム環境に配置する前に変更する必要があるフローチャートのリストが表示されます。

✧ マッピングを検証する場合、Interactはテスト実行のInteractサーバを使用します。関数の構文チェックを行うため、テスト実行のランタイムサーバを稼働させておく必要があります。

プロファイルテーブルマッピングを編集している場合に、テーブル名やフィールド名を変更すると、Interactはそのプロファイルテーブルに関連付けられたすべてのディメンションテーブルのマッピングを解除します。

✧ テーブルのマッピングを終了するには、[この変更を完了]をクリックする必要があります。

ディメンションテーブルを追加または編集するときは、スキーマがプロファイルテーブルのスキーマと一致するようにしてください。

インタラクティブチャンネルの[サマリ]タブ

インタラクティブチャンネルの[サマリ]タブには、2つの主要セクション(インタラクティブチャンネルのサマリと配置ステータス)があります。

インタラクティブチャネルのサマリ

項目	説明
説明	インタラクティブチャネルの説明です。説明を詳しく入力しておく と、他の設計環境のユーザがこのインタラクティブチャネルの目的を理 解しやすくなります。
セキュリティポリシー	セキュリティポリシーは、このインタラクティブチャネルで適用されま す。
ランタイムサーバグループ	このインタラクティブチャネルで利用可能なランタイムサーバグルー プのリストです。
運用ランタイムサーバグルー プ	稼働中の顧客対応タッチポイントに対して選択済みのランタイムサー バグループです。
1回の訪問時のオファーの最 大表示回数	1回の訪問時に特定のオファーを表示する最大回数を、整数で定義しま す。ランタイム環境では、この数値と処理ルールおよび学習エンジ ンを使用して、表示するオファーを選択します。
マップされたプロファイル テーブル	<p>Campaignで定義されたオーディエンスごとに、プロファイルテーブル のIBM Unica 名と実際の名前を表示します。</p> <p>まだプロファイルテーブルを定義していない場合、この項目は [マップ されていない]と表示されます。</p> <p>テーブルの名前または [マップされていない]は、オーディエンスのプロ ファイルテーブルマッピングウィザードへのリンクになっており、この リンクからインタラクティブチャネルのプロファイルテーブルとデメン ションテーブルをマップできます。</p> <p>マップしたプロファイルテーブルの数は、サポートされているオーディ エンスの数として一覧表示されます。タッチポイントで必要なオー ディエンスより、Campaignで定義されたオーディエンスのほうが多い 場合があります。プロファイルテーブルは、タッチポイント上のやり とりで使用するオーディエンスのみに定義するだけです。すべてのオー ディエンスに対しては必要ありません。</p>

配置ステータス

この項目には、インタラクティブチャネルに関するすべての配置情報のステータスが表示されます。

項目	説明
前回の運用配置	運用サーバグループにインタラクション構成を配置した最新の日付と時刻です。非運用サーバグループへの配置に関する詳細は、チャンネル配置履歴レポートで確認します。
サーバグループへの前回の配置	サーバグループへの前回の配置に関するステータスと時刻です。
運用配置を待機中の変更	運用サーバグループへの配置を待機しているインタラクション構成の変更数です。
最大待機時間	運用サーバグループへの配置を待機しているインタラクション構成変更のうち、最も古い構成変更の待機時間です。
運用サーバに配置	運用ランタイムサーバグループにインタラクション構成の変更を送信する場合は、このリンクをクリックしてプロセスを開始します。これは顧客対応システムであるため、いくつかの通知手段によって運用サーバグループに変更を送信する準備が整ったことを確認できます。赤色のアスタリスク(*)は、運用サーバグループに配置されていない変更があることを示しています。
別の場所に配置	運用ランタイムサーバグループでないランタイムサーバグループのいずれかにインタラクション構成の変更を送信する場合は、このリンクをクリックします。
すべての配置を解除(運用)	運用ランタイムサーバグループからインタラクション構成を削除する場合は、このリンクをクリックしてプロセスを開始します。これは顧客対応システムであるため、いくつかの通知手段によって運用サーバグループに変更を送信する準備が整ったことを確認できます。赤色のアスタリスク(*)は、運用サーバグループに配置されていない変更があることを示しています。
すべての配置を解除(別の場所)	運用ランタイムサーバグループでないランタイムサーバグループからインタラクション構成を削除する場合は、このリンクをクリックしてプロセスを開始します。

項目	説明
運用配置を待機中の変更	<p>このテーブルには、運用サーバグループに配置されていないすべての変更のリストが含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> 運用配置を待機中の変更 — 変更を含むインタラクティブフローチャートまたはインタラクション方法へのリンクです。 変更のタイプ — 変更が新しい(追加/更新)か、または取り消し(配置解除)であるかを示します。 要求日 — 配置をマーキングされた変更の日付と時刻です。 変更のソース — 変更を含むセッションまたはキャンペーンへのリンクです。 要求者 — 変更配置をマーキングしたInteractユーザのユーザ名です。 <p>アイテムを無効にすると、そのアイテムは前回の配置に属してはいますが、配置のマーキングは解除されます。たとえば、元の配置にインタラクティブフローチャートのAとB、インタラクション方法のCとDが含まれているとします。インタラクション方法Cに変更を加えて、配置をマーキングします。[運用配置を待機中の変更]リストには、A、B、C、Dが表示されますが、Cのみが黒色で表示されます。A、BおよびDは無効です。インタラクティブフローチャートBに変更を加えますが、配置はマーキングしません。この時点で配置を行うと、Interactは元のA、BおよびDと、新しいバージョンのCを配置します。Interactは新しいバージョンのBは使用しません。配置をマーキングされていないからです。</p>

タスク2: ゾーンおよびインタラクションポイントの作成

- ゾーンでの作業
- ゾーンを追加するには
- インタラクションポイントでの作業
- インタラクションポイントを追加するには
- インタラクションポイントでの操作方法

ゾーンでの作業

ゾーンにより、インタラクションポイントをタッチポイントの領域のように分割することができます。処理ルールを作成するときは、ルールにゾーンを追加することで、より詳細なルールにできます。たとえば、Webサイトを商品タイプ別(例: 電気通信会社の電話料金プランと機種)に分割して、インタラクションポイントを商品タイプに関連付けたゾーンで整理することができます。処理ルールでは、顧客が閲覧しているゾーンに応じて、同じセグメントの別のオファーを割り当てることができます。たとえば、訪問者が電話料金プランゾーンにいる場合、割安な新しい電話料金プランに関するオファーのみが表示されます。訪問者がタッチポイントの機種ゾーンに移動すると、すべてのオファーが新しい携帯電話に関するものになります。

インタラクションポイントはゾーン間で移動できます。1つのインタラクションポイントは、一度に1つのゾーンのメンバにしかできません。

ゾーンを追加するには

1. インタラクティブチャンネルの[インタラクションポイント]タブで、[ゾーンの追加]アイコンをクリックします。

[ゾーンを追加/編集]ダイアログが表示されます。

2. ゾーンの名前を入力します。
3. ゾーンの説明を入力します。

この説明は、[インタラクションポイント]タブ上に表示されます。

4. [保存して戻る]をクリックして[インタラクションポイント]タブに戻るか、または[保存して他を追加]をクリックしてインタラクションポイントの追加を続行します。

ゾーンの名前または説明を編集するには、[インタラクションポイント]タブのゾーン名をクリックします。

ゾーンを削除するには、[インタラクションポイント]タブのゾーンの横にあるチェックボックスをオンにして、[選択項目の削除]アイコンをクリックします。ゾーンが処理ルールで使用されている場合、そのゾーンは削除できません。

インタラクションポイントでの作業

インタラクションポイントは、Interact APIと直接やりとりする設計環境における、Interact構成の3つの要素の1つです。インタラクションポイントは、情報を要求するタッチポイントの場所を識別する手段です。すべてのインタラクションポイントはゾーンで整理できます。処理ルールのセグメントにオファーの割り当てを定義するときは、これらのルールもゾーンによって定義できます。そのため、タッチポイントのさまざまなセクションに対して、異なる種類のオファーを利用できます。

`getOffers`メソッドまたは`postEvent`メソッドをInteract APIで使用するときは、必ずインタラクションポイントを参照する必要があります。Interact APIで使用されるインタラクションポイントの名前は、設計環境で構成したインタラクションポイントの名前に一致する必要があります。

すべてのインタラクションポイントには、オファーが利用できない場合にタッチポイントで使用可能な既定の文字列が含まれている必要があります。

インタラクションポイントを追加するには

1. インタラクティブチャンネルの[インタラクションポイント]タブで、[インタラクションポイントの追加]アイコンをクリックします。

[インタラクションポイントを追加/編集]ダイアログが表示されます。

2. インタラクションポイントの名前を入力します。
3. [ゾーン]を選択します。

新しいゾーンを作成すると、そのゾーンにインタラクションポイントを移動できます。

4. [返す既定文字列]を入力します。
5. インタラクションポイントの[説明]を入力します。
この説明は、[インタラクションポイント]タブ上に表示されます。
6. [保存して戻る]をクリックして[インタラクションポイント]タブに戻るか、または[保存して他を追加]をクリックしてインタラクションポイントの追加を続行します。

インタラクションポイントは、[インタラクションポイント]タブのインタラクションポイント名をクリックすることで編集できます。

インタラクションポイントは、インタラクションポイントの横にあるチェックボックスをオンにして、[移動先]アイコンをクリックすることで他のゾーンに移動できます。

インタラクションポイントは、インタラクションポイントの横にあるチェックボックスをオンにして、[選択項目の削除]アイコンをクリックすることで削除できます。

インタラクションポイントでの操作方法

[インタラクションポイント]タブでは次のアイコンを使用します。



各アイコンの説明を左から右の順に、次の表に示します。

アイコンの名前	説明
ゾーンの追加	このインタラクティブチャネルに新しいゾーンを追加する場合にクリックします。
インタラクションポイントの追加	このインタラクティブチャネルに新しいインタラクションポイントを追加する場合にクリックします。
移動先	選択したインタラクションポイントを新しいゾーンに移動するには、インタラクションポイントを選択してからこのアイコンをクリックします。
選択項目の削除	インタラクションポイントまたはゾーンを削除するには、それらを選択してからこのアイコンをクリックします。

タスク3: カテゴリとイベントの作成

- カテゴリでの作業
- カテゴリを追加するには
- イベントでの作業
- イベントを追加するには
- イベントでの操作方法

カテゴリでの作業

カテゴリは、イベントを整理するためのツールです。カテゴリはゾーンとは異なり、何百ものイベントの管理を容易にする以外は、Interact構成に影響を与えません。

カテゴリを作成してイベントをグループ別に整理すると、組織が理解しやすくなります。たとえば、イベントの目的別のカテゴリ(「resegment」や「logContact」)を作成したり、タッチポイントで使用されるイベントの場所(「cellPhoneCatalogPage」や「newCallPlanScript」)を作成できます。

イベントはカテゴリ間で移動できます。イベントがメンバになれるのは1つのカテゴリだけです。

カテゴリを追加するには

1. インタラクティブチャンネルの[イベント]タブで、[カテゴリの追加]アイコンをクリックします。
[カテゴリの追加/編集]ダイアログが表示されます。
2. [カテゴリ名]と[説明]に入力します。
3. [保存して戻る]をクリックして[イベント]タブに戻るか、または[保存して他を追加]をクリックしてカテゴリの追加を続行します。

カテゴリの名前または説明を編集するには、[イベント]タブのカテゴリ名をクリックします。

カテゴリを削除するには、[イベント]タブのカテゴリの横にあるチェックボックスをオンにして、[選択項目の削除]アイコンをクリックします。イベントを含むカテゴリを削除すると、そのカテゴリ内のすべてのイベントも削除されます。

イベントでの作業

イベントは、Interact APIと直接やりとりする設計環境において、Interact構成の3つの要素の1つです。Interact APIと動作するタッチポイントをコーディングする場合は、`postEvent`メソッドを使用してイベントを参照します。Interact APIで使用されるイベントの名前は、設計環境で構成したイベントの名前に一致する必要があります。この名前の大文字と小文字は区別されません。

イベントは、事前に定義された次の1つまたは複数のアクションによってトリガされます。

- 再セグメントのトリガ ランタイム環境により、訪問者のセッションの現在のデータを使用して、インタラクティブチャンネルに関連付けられた現在のオーディエンスのインタラクティブフローチャートがすべて再実行されます。

インタラクションを設計するときは、特定のフローチャートを指定しない限りは、再セグメントによって、現在のオーディエンスでこのインタラクティブチャンネルに関連付けられたインタラクティブフローチャートのすべてが再実行されます。その際、オファーに対する要求はすべてのフローチャートが完了するまで待機状態になります。一度の訪問で再セグメントをしすぎると、顧客への表示方法においてタッチポイントのパフォーマンスに影響を及ぼすことがあります。

重要な新しいデータをランタイムセッションオブジェクトに追加した後は、顧客を新しいセグメントに配置する必要があります。この新しいデータはInteract APIからの要求(例: オーディエンスの変更)または顧客のアクション(例: 新しいアイテムをほしい物リストまたはショッピングカートに追加したとき)によって追加されます。

- ログオファーコンタクト ランタイム環境は、データベースサービスがコンタクト履歴にオファーを記録できるように、推奨オファーにフラグを付けます。

Web統合の場合、ベストプラクティスは、オファーを要求する同じ呼び出しでオファーコンタクトを記録して、タッチポイントとランタイムサーバ間の要求数を最小限にすることです。

タッチポイントで、訪問者に提示されたオファーの処理コードが返されない場合、ランタイム環境によって推奨オファーの最新リストが記録されます。

- ログオファー承認 ランタイム環境は、データベースサービスがレスポンス履歴に記録できるように、選択されたオファーにフラグを付けます。
- ログオファー拒否 ランタイム環境は、データベースサービスがレスポンス履歴に記録できるように、選択されたオファーにフラグを付けます。

複数のログオファーアクションを使用してイベントを作成する場合、Interact APIは関連付けられたオファーの同じアクションを実行することに注意してください。そのため、オファーの承認とオファーの拒否の両方を記録するイベントは作成しないでください。矛盾が発生するからです。ただし、環境によっては、オファーコンタクトと承認またはオファーコンタクトと拒否を記録する単一のイベントを作成するのは有効な場合があります。

既定では、ランタイム環境は2つのレスポンスタイプ(オファー承認およびオファー拒否)をトラッキングできます。ログオファー承認およびログオファー拒否のイベントレコードで記録されるレスポンスタイプは、`accept`および`reject`の構成プロパティで変更できます。

Interact APIでは、イベントを使用してアクションをトリガすることもできます。この場合のアクションはAPI内のイベントパラメータで定義します。これらのイベントには、カスタムテーブルの記録、複数のレスポンスタイプのトラッキング、実行するフローチャートの指定などが含まれます。ログコンタクトなどの予約済みのイベントパラメータで使用するため、システムの反応を定義しないイベントや、同じシステムの反応を定義したイベントをいくつか作成する必要があるかもしれません。

個々のレスポンスタイプを記録するために`postEvent`の呼び出しを使用するには、ログオファー承認アクションを使用する複数のイベント、記録するレスポンスタイプごとに1つのイベント、またはログオファー承認アクションを使用する単一のイベントを作成します。

たとえば、レスポンスのタイプごとにログオファー承認アクションを使用してイベントを作成します。UA_UsrResponseTypeテーブルで次のカスタムレスポンスを[名前(コード)]の形式で定義します。Explore (EXP)、Consider (CON)、Commit (CMT)。続いて3つのイベントを作成して、それぞれLogAccept_Explore、LogAccept_Consider、LogAccept_Commitという名前を付けます。3つのイベントはログオファー承認アクションがあるという点ですべて同一ですが、名前が異なります。Interact APIで作業している担当者がこれらを識別できるようにするためです。

または、すべてのカスタムレスポンスタイプで使用するため、ログオファー承認アクションを使用して単一のイベントを作成することができます。たとえば、LogCustomResponseという名前を付けます。

Interact APIで作業する場合、イベント間に機能的な違いがなくても、命名規則によってコードの動作を明確にすることができます。また、カスタムレスポンスに固有の名前を付けると、チャンネルイベントアクティビティのサマリレポートに、より正確な情報が表示されます。

予約済みのパラメータおよびpostEventメソッドの詳細については、『*Interact管理者ガイド*』を参照してください。

システム定義イベント

[イベント]タブには、既定のカテゴリであるシステム定義済みカテゴリが含まれています。このカテゴリでは、イベントの編集、追加または削除ができません。このカテゴリにはInteract APIに対応するイベントが含まれています。チャンネルイベントアクティビティのサマリレポートを使用して、タッチポイントでこれらすべてのイベントが発生している頻度を監視できます。

これらのイベントに含まれる情報は次のとおりです。

- セッションを終了 — 訪問者のインタラクティブセッションの終了をマーキングします。
- オファーの取得 — 訪問者に提供する推奨オファーのリストを要求します。
- プロファイルを取得 — セッションに保存されている訪問者プロフィールデータを要求します。このデータには、プロフィールテーブルから読み込まれるデータだけでなく一時データも含まれています。
- オーディエンスの設定 — 訪問者のインタラクティブセッション内でのオーディエンスを変更します。
- デバッグを設定 — 訪問者のインタラクティブセッションの現在のログレベルを上書きします。
- セッションを開始 — 訪問者のインタラクティブセッションの開始をマーキングします。

関連トピック

- チャンネルイベントアクティビティのサマリレポートについて

イベントを追加するには

1. インタラクティブチャネルの[イベント]タブで、[イベントの追加]アイコンをクリックします。
[イベントの追加/編集]ダイアログが表示されます。
2. イベントの[名前]を入力します。
3. [カテゴリ]を選択します。
新しいカテゴリを作成したら、そのカテゴリにイベントを移動できます。
4. このイベントで実行するアクションを選択します。
5. イベントの[説明]を入力します。
この説明は、[イベント]タブ上に表示されます。
6. [保存して戻る]をクリックして[イベント]タブに戻るか、または[保存して他を追加]をクリックしてイベントの追加を続行します。

イベントは、[イベント]タブのイベント名をクリックすることで編集できます。

イベントは、イベントの横にあるチェックボックスをオンにして、[移動先]アイコンをクリックすることで他のカテゴリに移動できます。

イベントは、イベントの横にあるチェックボックスをオンにして、[選択項目の削除]アイコンをクリックすることで削除できます。

イベントでの操作方法

[イベント]タブでは次のアイコンを使用します。



各アイコンの説明を左から右の順に、次の表に示します。

アイコンの名前	説明
カテゴリの追加	このインタラクティブチャネルに新しいカテゴリを追加する場合にクリックします。
イベントの追加	このインタラクティブチャネルに新しいイベントを追加する場合にクリックします。
移動先	選択したイベントを新しいカテゴリに移動するには、イベントを選択してからこのアイコンをクリックします。
選択項目の削除	イベントまたはカテゴリを削除するには、それらを選択してからこのアイコンをクリックします。

タスク4: オファー制約の作成

- 制約での作業
- オファー制約を追加するには
- オファー制約を編集するには
- オファー制約を有効/無効にするには
- オファー制約を削除するには

制約での作業

オファー制約では、オファーまたはオファーコレクションを一定期間内に提示できる回数を制限できます。たとえば、事前に定義された印象数(1日の印象数を指定するなど)のノルマを満たした後はオファーを非表示にしたり、またはオファーをさまざまな製品ラインのWebページに分散させたりすることができます。

Interactの[制約]タブでは、オファー制約の作成、削除、有効化、または無効化ができます。

オファー制約を追加するには

1. インタラクティブチャンネルの[制約]タブで、**[制約の追加]**アイコンをクリックします。

[制約の追加/編集]ダイアログが表示されます。
2. オファー制約の**[名前]**を入力します。
3. 制約の**[説明]**を入力します。

この説明は、[制約]タブに表示され、このオファー制約を特定します。
4. **[フォルダ内]**または**[オファーリスト内]**を選択し、付属のドロップダウンリストを使用して目的のフォルダまたはオファーリストを選択する方法で、制約を適用する必要があるオファーを指定します。

オファーを、指定した期間または回数の間、または指定した期間内の最大回数に達するまで、またはその両方で使用可能にする必要があることを指定できます。
5. 次の手順に従って、オファーを利用可能にする期間を指定します。
 - a. **[次の日付の後にオファー配信を開始]**項目をクリックし、表示されるカレンダーツールを使用して、オファーを利用可能にする最初の日付を指定し、その横のドロップダウンリストを使用して、利用可能にする最も早い時刻を選択します。
 - b. **[次の条件によりオファー配信を停止]**項目をクリックし、表示されるカレンダーツールを使用して、オファーを利用できる最後の日付を指定し、その横のドロップダウンリストを使用して利用できる最終時刻を選択します。
6. (任意)**[均等な配布方法]**項目に入力し、1 期間にオファーが表示される最大印象数を指定します。
 - **[最大<数字>印象]**項目(<数字>を実際に必要な最大数で置き換え)で表示されるオファーの最大回数を入力します。

- [単位]ドロップダウンリストを使用して、訪問者に提供される印象の最大数の対象期間(1時間あたり、1日あたりなど)を指定します。

[均等な配布方法]の項目に入力しない場合、Interactサーバはこのインタラクシヨンチャンネルの通常どおりにオファーを利用可能にします。

7. (任意)[印象]項目に、提供されるオファーの全体の最大回数を入力します。
この項目に値を入力しない場合は、オファー制約の最大数は適用されません。
8. [有効にする]をクリックして、定義したパラメータ内でこのオファー制約をアクティブにします。
9. [保存して戻る]をクリックして[制約]タブに戻るか、または[保存して他を追加]をクリックしてオファー制約の追加を続行します。

制約は、[制約]タブの制約名をクリックすることで編集できます。

オファー制約は、その名前の横にあるチェックボックスをオンにして、[選択項目の削除]アイコンをクリックすることで削除できます。

オファー制約を編集するには

1. インタラクティブチャンネルの[制約]タブをクリックして、制約のリストを表示します。
2. 編集する制約の名前をクリックします。
[制約の追加/編集]ダイアログが表示されます。
3. (任意)制約の[名前]、[説明]、または定義の設定を変更します。
4. [保存して戻る]をクリックして[制約]タブに戻るか、または[保存して他を追加]をクリックして変更を保存し、新しい制約を追加します。

オファー制約は、変更を反映して更新されます。

オファー制約を有効/無効にするには

オファー制約は、それが使用される期間で定義されます。しかし、オファー制約がその運用範囲を再定義しないと使用できないようにしたい場合、またはオファー制約がその開始および終了時刻後に少しでも考慮されるのを避けるために制約を無効にしたい場合があります。[制約の追加/編集]ダイアログでは、オファー制約を有効にしたり無効にしたりできます。

1. インタラクティブチャンネルの[制約]タブで、編集する制約の名前をクリックします。
[制約の追加/編集]ダイアログが表示されます。
2. オファー制約を無効にして、選択したオファーがここで定義されている制限なしで提供されるようにするには、[無効にする]をクリックします。
3. オファー制約を有効にするには、[有効にする]をクリックします。
4. [保存して戻る]をクリックして[制約]タブに戻るか、または[保存して他を追加]をクリックして別の制約を追加します。

オファー制約を削除するには

✧ いったん削除した制約は回復できません。

1. 削除する制約の横のチェックボックスをオンにします。
2. [選択項目の削除]をクリックします。
3. 削除を確認します。

Interactによって、選択した制約が削除されます。

タスク5: カスタム学習モデルの作成

- 学習モデルでの作業
- 学習モデルを追加するには
- 学習モデルを編集するには
- 学習モデルを削除するには
- 学習モデルを有効/無効にするには

学習モデルでの作業

Interactには、訪問者のリアルタイムの動きを監視することで、インタラクティブフローチャートに影響を与え、表示するオファーの選択にも役立つ組み込みの学習モジュールがあります。学習設定によって、インタラクティブチャンネルレベルで属性を割り当てることができるので、各チャンネルに独自のカスタム学習モデルセットを設定できます。これは「自習」とも呼ばれます。

✧ 自習機能を使用するには、まず組み込みの学習をInteract環境でグローバルに有効にする必要があります。学習モジュールの有効化、および学習全般に関する追加情報については、『*IBM Unica Interact Administrator's Guide*』を参照してください。

Interactの[自習]タブを使用すると、インタラクティブチャンネルの学習モデルを作成、削除、編集、有効化、または無効化できます。

学習モデルを追加するには

1. インタラクティブチャンネルの[自習]タブで、[モデルの追加]アイコンをクリックします。

[学習モデルを追加/編集]ダイアログが表示されます。

2. 学習モデルの[名前]を入力します。
3. 学習モデルの[説明]を入力します。

この説明は、[自習]タブに表示され、この学習モデルを特定します。

4. **[対象の予測属性]**リストに訪問者の属性を追加して、学習モデルの定義を終了します。

このリストに基づきInteractが訪問者の属性を監視し、訪問者に提示する最も条件の良いオファーを決定します。学習および学習属性の詳細な説明は、『*IBM Unica Interact*管理者ガイド』内の[Interact組み込み学習の概要](#)を参照してください。

5. **[有効にする]**をクリックして、定義したパラメータ内でこの学習モデルをアクティブにします。
6. **[保存して戻る]**をクリックして**[自習]**タブに戻るか、または**[保存して他を追加]**をクリックして学習モデルの追加を続行します。

学習モデルを編集するには、**[自習]**タブの各学習モデル名をクリックします。

学習モデルは、その名前の横にあるチェックボックスをオンにして、**[選択項目の削除]**アイコンをクリックすることで削除できます。

学習モデルを編集するには

1. インタラクティブチャンネルの**[自習]**タブをクリックして、学習モデルのリストを表示します。
2. 編集する学習モデルの名前をクリックします。
[学習モデルを追加/編集]ダイアログが表示されます。
3. 学習モデルの**[名前]**、**[説明]**、または定義の設定を変更します(任意)。
4. **[保存して戻る]**をクリックして**[自習]**タブに戻るか、または**[保存して他を追加]**をクリックして変更点を保存し、新規学習モデルの追加を続行します。

学習モデルは、変更を反映して更新されます。

学習モデルを削除するには

✦ いったん削除した学習モデルは回復できません。

1. 削除する学習モデルの横のチェックボックスをオンにします。
2. **[選択項目の削除]**をクリックします。
3. 削除を確認します。

Interactによって、選択した学習モデルが削除されます。 Note that you cannot delete a learning model that is currently in use.

学習モデルを有効/無効にするには

学習モデル全体を削除することなく、学習チャンネル内で学習モデルを無効化し、さらにこれを後日必要になったときに有効化することが可能です。[学習モデルの追加/編集]ダイアログでは、学習モデルを有効にしたり無効にしたりできます。

1. インタラクティブチャネルの[自習]タブで、編集する学習モデルの名前をクリックします。
[学習モデルを追加/編集]ダイアログが表示されます。
2. 学習モデルを無効化してインタラクティブチャネル内で使用できない状態にするには、[無効にする]をクリックします。
3. 学習モデルを有効にするには、[有効にする]をクリックします。
4. [保存して戻る]をクリックして[自習]タブに戻るか、または[保存して他を追加]をクリックして追加のカスタム学習モデルの作成を続行します。


タスク6: スマートセグメントの作成

- スマートセグメントでの動作
- セッションの作成
- インタラクティブフローチャートの定義

スマートセグメントでの動作

Interactでは、処理ルールでスマートセグメントを使用して、訪問者にオファーを割り当てます。戦略的セグメントとは異なり、スマートセグメントはCampaignセッションでのみ作成できます。スマートセグメントを作成するには、インタラクティブフローチャートを使用します。

スマートセグメントを作成すると、戦略的セグメントを整理する場合と同様に整理することができます。

Campaignのセグメントページ上のセグメントで作業するときは、次のアイコンでスマートセグメントを区別できます。 

セッションの作成

インタラクティブフローチャートはCampaignセッション内でのみ利用できます。セッションは、インタラクティブフローチャートごとに最低でも1つ作成する必要があります。セッションでフローチャートに関連付けるインタラクティブチャネルに関しては、セッションごとに同じセキュリティポリシーを使用します。

セッションには、バッチフローチャートとインタラクティブフローチャートを含めることができます。セッションに両方の種類のフローチャートが含まれる場合は、[実行]アイコンをクリックして、[セッションサマリ]ページから[すべて実行]を選択し、バッチフローチャートのみを実行します。インタラクティブフローチャートは設計環境からは実行できません。テスト実行でのみ実施できます。

関連トピック

- インタラクティブフローチャートのテスト実行の概要

インタラクティブフローチャートの定義

インタラクティブフローチャートは、インタラクションの分類ロジックを提供します。ランタイム環境で訪問者のランタイムセッションを作成するときは、最初の手順で訪問者に関する利用可能なすべてのプロフィール情報を取得します。この手順はインタラクティブチャンネルに関連付けられたすべてのインタラクティブフローチャートで実行します。この処理により、訪問者はセグメントに配置されないか、または複数のスマートセグメントに配置されます。次に、ランタイム環境でこれらのセグメントを使用して、処理ルールによって定義されたオファーを推奨します。

再セグメントのトリガアクションのあるイベントを使用して、すべてのフローチャートを通じてプロフィール情報を再実行します。

インタラクティブフローチャートはCampaignセッション内にのみに作成できます。

インタラクティブフローチャートの作成の詳細については、「[インタラクティブフローチャートについて](#)」を参照してください。

関連トピック

- [インタラクティブフローチャートについて](#)
- [インタラクティブフローチャートの作成](#)
- [インタラクティブフローチャートを作成するには](#)
- [インタラクティブフローチャートのテスト実行の概要](#)

タスク7: オファーの定義

- [オファーの定義](#)
- [Interactのオファーテンプレートを作成するには](#)

オファーの定義

オファーをまだ定義していない場合は、Interactが推奨するオファーを作成する必要があります。

❗ Interactは、現時点ではオファーリストをサポートしていません。

オファーを作成するときは、Interact API では次の情報をオファーから参照できることに注意してください。

- カスタムオファー属性
- オファーコード
- オファーの説明
- オファー有効日
- オファー終了日
- オffer名
- オffer処理コード

Campaignでオファーをタッチポイント上のオファーにマップするときは(例: バナー広告のHTMLコード)、使用可能な情報に命名規則を適用するようにしてください。たとえば、すべてのバナー広告をオファーコードと同じ名前のファイルで保存して、識別しやすくすることができます。

オファーの承認または拒否を記録する`postEvent`の呼び出しを作成している場合は、オファー処理コードを含める必要があります。ただし、クロスセッションレスポンストラッキングを有効にすると、各自の環境に固有の処理コード、オファーコードまたはカスタムコードに一致させることができます。クロスセッションレスポンストラッキングの詳細については、『*Interact管理者ガイド*』を参照してください。

Interact APIの`nameValuePair`クラスを使用して、カスタムオファー属性のデータを定義したり、このデータを取得したりできます。

処理ルールで使用されるオファーにオファーの回収などの変更を加える場合、サーバグループにその変更を反映させるには、サーバグループに関連付けられたすべてのインタラクティブチャンネルを配置しなおす必要があります。

Interactのオファーテンプレート

Interactで使用されるすべてのオファーに対し、IP IDおよびIP Nameのオファー属性を有効にする必要があります。これらの属性が存在することで、ランタイム時に値が自動的に挿入され、定義済みの既定のIP IDまたはIP Nameの属性が上書きされます。IP IDは内部IDであり、IP Nameはオファーに関連付けられたインタラクションポイントの名前です。このデータはレポートで必要です。[このテンプレートから作成したオファーをリアルタイムインタラクションで使用できます]を有効にしていない場合は、処理ルールを使用してオファーを使用し続けることができますが、Interactでこれらのオファーをレポートに含めることはできません。

オファーテンプレートに、オファー有効日とオファー終了日が含まれている場合は、[フローチャート実行日]に関する日付を定義できます。たとえば、オファー有効日を定義して、その日をフローチャートの実行日にできます。オファーは、有効日の数日後に期限切れにできます。インタラクティブフローチャートの場合は、[フローチャート実行日]が、ランタイム環境がタッチポイントに表示用オファーを推奨する日になります。

Interactのオファーテンプレートを作成するには

1. 次の場合を除き、『*Campaign管理者ガイド*』に記載されている手順に従ってください。
2. 手順3の1: メタデータ。[このテンプレートから作成したオファーをリアルタイムインタラクションで使用できます]チェックボックスをオンにします。
3. 手順3の3: 既定値。IP IDおよびIP Nameの既定値を定義します。

IP IDの既定値としては整数を、IP Nameとしては文字列を入力できます。ランタイム環境では正しいデータの値が自動挿入されますが、設計環境では既定値が必要です。

タスク8: 処理ルールを作成

- 処理ルールでの作業
- オファーの資格
- マーケティングスコア
- 処理ルールの詳細オプション
- インタラクション方法タブでの作業
- インタラクション方法タブを作成するには
- 処理ルールを追加するには
- 詳細オプションを追加するには
- 処理ルールの詳細オプションの式
- 処理ルールを有効/無効にするには
- 処理ルールを削除するには
- インタラクション方法タブの配置について
- インタラクション方法タブに配置をマーキングするには
- 配置要求をキャンセルするには
- インタラクション方法タブに配置解除をマーキングするには
- インタラクション方法での操作方法

処理ルールでの作業

処理ルールは、オファーを表示するためにInteractによって使用されるメインのガイドラインです。処理ルールにより、スマートセグメントにゾーン別のオファーを割り当てます。また、マーケティングスコアを各ルールに追加して、学習エンジン内でオファーに重みを加えることができます。

※ 複数のオプション機能があり、処理ルールに影響を与えたり処理ルールを上書きするために使用できます。Interactによるオファー配信の詳細については、『*Interact* 管理者ガイド』を参照してください。

処理ルールは、スマートセグメント別に整理されます。各セグメントに任意の数のオファーを割り当てます。オファーをセグメントに割り当てたら、そのオファーが適用されるゾーンを定義します。同じオファーを同じセグメントに複数回割り当てたり、別のゾーンに割り当てることができます。

スマートセグメントを削除したりオファーを回収すると、Campaignにより、そのセグメントまたはオファーが含まれる処理ルールが無効になります。

スマートセグメントは、キャンペーン内のセルにマップされます。インタラクション方法タブからは、各スマートセグメントに関連付けられたセルコードを編集できます。

[このテンプレートから作成したオファーをリアルタイムインタラクションで使用できます]が有効なオファーテンプレートから作成されたオファーだけを選択する必要があります。それ以外の場合、レポートデータが正確になりません。

処理ルールは、キャンペーンのインタラクション方法タブで定義されます。インタラクション方法タブを、キャンペーン間でコピーすることはできません。

オファ어의資格

処理ルールは、訪問者にふさわしいオファ어를決定するためにInteractで使用する最初のメソッドレベルです。Interactには、訪問者へのオファ어의割り当てを充実させるために実装できるオプション機能がいくつか用意されています。

- オファ어非表示
- グローバルオファ어
- 個々のオファ어의割り当て
- スコアオーバーライド
- 学習

処理ルールを作成する前に、Interact管理者に、利用できるオファ어의資格機能について確認してください。たとえば、スコアオーバーライドテーブルを使用してマーケティングスコアを上書きする場合は、すべての処理ルールに対する既定のマーケティングスコアを変更する必要はありません。

オファ어의資格機能の詳細については、『*Interact*管理者ガイド』を参照してください。

マーケティングスコア

各処理ルールにはマーケティングスコアが含まれており、スライダで表されます。既定のスコアは50です。高いスコアは、Interactが推奨するオファ어를選択する場合に設定される場合があります。複数のキャンペーンにまたがる処理ルールをどのように構成したかによっては、複数のオファ어를同じスマートセグメントに割り当てることができます。Interactでは、マーケティングスコアを使用して、単一の要求に対して複数のオファ어가利用できる場合に、どのオファ어를表示するかを決定します。たとえば、マーケティングスコアが30のオファ어Aとマーケティングスコアが80のオファ어Bからオファ어를選択する必要がある要求では、Interactによってオファ어Bが表示されます。

同じオファ어를スコアの異なる同じセグメントに割り当てた場合、たとえば、異なる2つのキャンペーンで同じインタラクティブチャネルに対する処理ルールを作成して、高いスコアの方をInteractで採用することが考えられます。

処理ルールの詳細オプションを使用して、マーケティングスコアを定義することもできます。IBM Unica マクロ、オファ어属性、セッション変数、ディメンションテーブルおよび顧客のプロファイルの値を使用すると、マーケティングスコアを定義するための式を作成できます。

インタラクシオン方法タブで行ったマーケティングスコアへの変更は、スコアオーバーライドテーブルにデータを入力することで上書きできます。スコアオーバーライドテーブルを使用すると、IBM Unica PredictiveInsight、Optimize、または他のモデリングソフトウェアで生成されたスコアを簡単にインポートできます。スコアオーバーライドテーブルでは、100以上のスコアを定義できます。

組み込み学習を有効にした場合、マーケティングスコアは学習アルゴリズムで使用されます。

スコアオーバーライドテーブルを使用した作業の詳細については、『*Interact*管理者ガイド』を参照してください。

処理ルールの詳細オプション

詳細オプションを使用して、処理ルールを強化することができます。式を追加して、処理ルールが適切であるかどうかを判断したり、マーケティングスコアを上書きしたりできます。

処理ルール内にオファーの資格に関する式を直接書き込むことで、インタラクティブフローチャートの外部からオファーのターゲティングを制御できます。ルールの中には、セグメントレベルより、このレベルで管理するほうが容易なものがあります。たとえば、`offer.dynamic.ownProductX='yes'`という式を書き込むことができます。これは、オファー属性`ownProductX`が`yes`である場合に、この処理ルールを使うという意味です。この例では、製品Xを所有している人に対して、特定のオファーを含めたりオファーへの別のスコアを設定したりできます。たとえば、オファー属性や曜日に基づく特定のオファーを割り当てることで、具体的な処理ルールを作成することができます。

また、マーケットスコアを定義または調整するために式を書き込むこともできます。たとえば、`profileTable.dimensionTable.scoreAdj * MarketerScore`では、`scoreAdj`列の値を処理ルールのスライダで定義された現在のマーケティングスコアとかけ算します。

関連トピック

- 詳細オプションを追加するには
- 処理ルールの詳細オプションの式

インタラクシオン方法タブでの作業

インタラクシオン方法タブは、リアルタイムインタラクシオンのオファーを割り当てるキャンペーン内の場所です。インタラクシオン方法タブを作成するときは、インタラクシオンチャンネルに割り当てます。

✧ インタラクシオン方法タブは、キャンペーンのインタラクシオンチャンネルごとに1つ作成できます。インタラクティブチャンネルが3つある場合、1つのキャンペーンで設定できるインタラクシオン方法タブは3つまでです。これらのタブは、それぞれ別のインタラクティブチャンネルに割り当てる必要があります。

インタラクシオン方法タブを格納するためのキャンペーンは、組織に必要なだけ作成できます。たとえば、新しい当座預金のキャンペーンとオートローンのキャンペーンがある場合、両方ともコールセンターの同じインタラクティブチャンネルを参照させることができます。インタラクシオン方法タブをコピーしたり移動することはできません。

インタラクシオン方法タブには、配置領域と処理ルール領域という2つの主要セクションがあります。配置領域には、処理ルールの配置ステータスが表示されます。処理ルールでは、セグメントにオファーを割り当てる場所を決定します。

インタラクシオン方法タブを使用したキャンペーン

キャンペーンの[サマリ]タブには、そのキャンペーンに関連付けられたセグメントとオファーが表示されます。処理ルールによってキャンペーンに追加されたオファーは、次の3つの条件が満たされた場合にのみ、キャンペーンの[サマリ]タブに表示されます。まず、インタラクシオン方法を配置する必要があります。次に、データをランタイム環境から設計環境に転送するためにコンタクト履歴とレスポンス履歴モジュールを構成します。続いて、ランタイム環境から設計環境へのデータ転送を完了します。たとえば、コンタクト履歴とレスポンス履歴モジュールを構成して、2時間ごとに実行するようにします。続いて、インタラクシオン方法タブをキャンペーンに追加します。オファーはキャンペーンの[サマリ]タブには表示されません。続いて、インタラクシオン方法タブを配置します。オファーはまだ、キャンペーンの[サマリ]タブには表示されません。2時間後、コンタクト履歴とレスポンス履歴モジュールが次のデータ転送を完了すると、オファーがキャンペーンの[サマリ]タブに表示されます。

スマートセグメントは、キャンペーンの[サマリ]タブには表示されません。

インタラクシオン方法タブを作成するには

インタラクシオン方法タブを作成する前に、インタラクティブチャネルを作成する必要があります。

1. 次のいずれかの方法で、インタラクシオン方法タブをキャンペーンに追加できます。
 - 新しいキャンペーンを作成する場合は、[インタラクシオン方法の保存と追加]をクリックします。
 - 既存のキャンペーンの[サマリ]タブを表示している場合は、[インタラクシオン方法の追加]アイコンをクリックします。

[新規インタラクシオン方法]ページが表示されます。

2. インタラクシオン方法タブの[名前]と[説明]を入力します。
3. インタラクシオン方法タブの[インタラクティブチャネル]を選択します。
4. [処理ルールを保存して作成]をクリックします。

インタラクシオン方法タブの名前と説明は、後で[編集]アイコンをクリックすることで編集できます。インタラクティブチャネルは変更できません。

インタラクシオン方法は、[インタラクシオン方法の削除]アイコンをクリックすることで削除できます。インタラクシオン方法を削除できるかどうかは、そのインタラクシオン方法タブに関連付けられているインタラクシオンチャネルの配置ステータスに依存します。

処理ルールを追加するには

処理ルールを作成する前に、スマートセグメントとオファーを作成する必要があります。

1. インタラクシオン方法タブで、[ルールの追加]アイコンをクリックします。

[ルールの追加]パネルが表示されます。

2. [ルールの追加]パネルの[対象のインタラクティブセグメントを選択する]タブからセグメントを選択してルールテーブルにドラッグすることで、セグメントをルールに追加します。

新しい処理ルールが作成されると、その領域はピンク色になります。ルールの順序は問題となりません。


3. [推奨するオファーを選択する]をクリックします。

[推奨するオファーを選択する]タブが表示されます。

4. [ルールの追加]パネルの[推奨するオファーを選択する]タブからオファーを選択してルールテーブルにドラッグすることで、オファーをルールに追加します。

新しい処理ルールが作成されると、その領域はピンク色になります。ルールの順序は問題となりませんが、オファーをドラッグすると、選択されたオファーの上位にルールが挿入されます。セグメントにドラッグすると、処理ルールのリストの下位にルールが挿入されます。

同じセグメントに複数のオファーを追加できます。

5. 任意のゾーン内のセグメントにオファーを割り当てる場合は、適切なゾーン名をクリックして、ゾーンのリストからゾーンを選択します。
6. 詳細オプションを追加してルールを適切に定義するか、またはマーケティングスコアを上書きするには、処理ルールのスコアスライダの右側にある詳細オプションのアイコン()をクリックします。
7. スライダを使用して、各処理ルールにマーケティングスコアを割り当てます。
8. [完了]をクリックして、[ルールの追加]パネルを閉じます。

[すべてのゾーン]を除き、同じオファーを同じゾーンの同じセグメントに追加すると、重複を回避するための警告が表示されます。この警告は無視することができます。

セグメントとオファーは、ツリー表示またはリスト表示で表示できます。ツリー表示には、セグメントまたはオファーが個々のセグメントまたはオファーページで作成されたフォルダ構造で表示されます。リスト表示には、セグメントとオファーがアルファベットの名前順で表示されます。[ソースフローチャート]列と[前回実行日]列は、すべてのスマートセグメントで空白です。セグメントとオファーは、名前別、説明別またはコード別に検索できます。セグメントの検索結果は、スマートセグメントのみが表示されます。


セグメントごとのオファー別インタラクティブセルパフォーマンスレポートは、[パフォーマンス統計]の下にある[表示]リンクをクリックすることで表示できます。[このテンプレートから作成したオファーをリアルタイムインタラクションで使用できます]を有効にしていないオファーを選択すると、レポートのデータは収集されません。

関連トピック

- 処理ルールの詳細オプション

詳細オプションを追加するには

式を作成して、処理ルールの資格を定義したり、マーケティングスコアを上書きしたりできます。

1. 詳細オプションを追加するには、処理ルールのスコアスライダの右側にある詳細オプションのアイコン()をクリックします。
[詳細オプション]パネルが表示されます。
2. [次の式がTRUEの場合は、このルールを対象と見なす]を選択して資格のルールを作成するか、[次の式をマーケティングスコアとして使用する]を選択してマーケティングスコアを上書きします。

詳細オプションを無効にするには、[詳細オプションを使用しない]を選択します。この操作では式は削除されません。

3. [式]を作成します。

表示されているすべての利用可能な関数、変数および演算子を使用して、式の作成に役立てることができます。

式の妥当性は、[構文チェック]をクリックして確認できます。

※ [構文チェック]では、妥当性の確認にテスト実行のInteractランタイムサーバを利用します。関数の構文をチェックするには、テスト実行のランタイムサーバを稼働させておく必要があります。

4. [変更の保存]をクリックします。

処理ルールの詳細オプションの式

処理ルールをフィルタリングする場合は、ブール式またはマーケティング担当者のスコアのオーバーライドを計算する式を作成できます。ただし、式のビルドブロックの数には制限があります。

! カスタムマクロ、ユーザ定義項目およびユーザ変数は、処理ルールの詳細オプションでは使用できません。

次のビルドブロックは使用できます。

- IBM Unica でサポートされているInteractマクロ
InteractでサポートされているIBM Unica のマクロのリストについては、『*IBM Unica マクロユーザガイド*』を参照してください。
- オファー属性
- セッション変数
- デイメンションテーブル
- プロファイルデータ
- マーケティング担当者のスコア

マーケティングスコアにブール式を定義すると、TRUEは1に、FALSEは0になります。ブール式に数式を定義すると、0はFALSEに、その他の値はすべてTRUEになります。

次に、さまざまなビルドブロックを使用したルールのフィルタリングとスコア計算の式の両方の例をいくつか示します。

次の式がTRUEの場合は、このルールを対象と見なす

```
profileTable.accountType != 'Gold' ||
profileTable.dimensionTable.accountBalance > 5000
```

```
Offer.Static.EffectiveDateFlag = 0
```

```
Offer.Dynamic.OfferColor = 'Blue'
```

```
EXTERNAL_CALLOUT('GetPrimeRate') <= 6.9
```

この例では、GetPrimeRate外部コールアウトはJavaプログラムであり、Webサイト上で現在の最優遇貸付金利を収集します。

次の式をマーケティングスコアとして使用する

```
AVG(profileTable.dimensionTable.accountBalance)
```

```
MarketerScore + STDEV(profileTable.dimensionTable.accountBalance)
```

次の例では、マーケティング担当者のスコアは、顧客のライフサイクル(この顧客のオファーへの反応の可能性、この顧客に売り込む企業の情熱を表します)、特定個人に対して特定クラスの商品を売り込みたいという事前の決定要因、オファーの承認によって顧客のアカウントに付加される会社から見た価値として取り入れられます。

```
Calculated Marketer's Score =
  [sLifeCycle] *
  [wClassA] *
  [(wShortTermVal * vShortTerm) + (wLongTermVal * vLongTerm)]
```

顧客の属性:

```
wShortTermVal = global weighting towards short term value = 1
wLongTermVal = global weighting towards long term value = 0.7
wClassA = customer weighting towards product class A = 1.2
sLifeCycle = customer life cycle score = 1.5
  1 - Onboarding
  1.5 - Settled
  0.2 - At Risk
  0 - Leaving
```

オファー属性:

```
vShortTerm = offer short term value gain = 250
vLongTerm = offer long term value gain = 150
```

処理ルールを有効/無効にするには

処理ルールは、有効にしたり、削除せずに無効にしたりすることができます。インタラクション方法タブの読み込みが完了するまでは、処理ルールを有効または無効にすることはできません。

セグメントまたはオファーをクリックすると、コンテキストメニューが開きます。

アクション	手順
単一のルールを有効にする	<ul style="list-style-type: none"> [ルールを有効にする]アイコンを、緑色のチェックマークが表示されるまでクリックします。 オファーをクリックして、[このルールを有効にする]を選択します。
特定のオファーを含むすべてのルールを有効にする	オファーをクリックして、[このオファーに関するすべてのルールを有効にする]を選択します。
特定のセグメント(セル)を含むすべてのルールを有効にする	セグメントをクリックして、[このセルのすべてのルールを有効にする]を選択します。
単一のルールを無効にする	<ul style="list-style-type: none"> [ルールを有効にする]アイコンを、灰色のチェックマークが表示されるまでクリックします。 オファーをクリックして、[このルールを無効にする]を選択します。
特定のオファーを含むすべてのルールを無効にする	オファーをクリックして、[このオファーに関するすべてのルールを無効にする]を選択します。
特定のセグメント(セル)を含むすべてのルールを無効にする	セグメントをクリックして、[このセルのすべてのルールを無効にする]を選択します。

処理ルールを削除するには

必要でなくなった処理ルールは削除することができます。

セグメントまたはオファーをクリックすると、コンテキストメニューが開きます。

アクション	手順
単一のルールを削除する	オファーをクリックして、[このルールを削除]を選択します。
1つのセグメント(セル)のすべてのルールを削除する	セグメントをクリックして、[このセルのすべてのルールを削除する]を選択します。
1つのセグメントのすべてのルールを削除すると、処理ルールテーブルからもセグメントが削除されます。	

インタラクシヨン方法タブの配置について

インタラクシヨン方法タブの構成を終了したら、そのタブに配置をマーキングする必要があります。インタラクシヨン方法タブに配置をマーキングすると、このインタラクシヨン方法タブに関連付けられたインタラクティブチャンネルを、テスト用または運用用のランタイムサーバグループに配置できることを示す通知が表示されます。

インタラクシヨン方法タブに配置をマーキングすると、そのタブは編集できません。インタラクシヨン方法タブを配置する前に変更を加える必要がある場合は、配置要求をキャンセルできます。この操作により、インタラクシヨン方法タブが、配置を保留中のアイテムのリストから削除されます。

必要でなくなったインタラクシヨン方法タブには、配置解除をマーキングできます。この操作により、回収要求が配置キューに追加されます。次回すべての変更が配置されると、インタラクシヨン方法タブとその処理ルールのすべてが、ランタイムサーバから削除されます。

インタラクシヨン方法タブに配置をマーキングするには

1. 配置をマーキングするインタラクシヨン方法タブを表示します。
2. **[配置をマーキング]**をクリックします。

インタラクシヨン方法タブに配置がマーキングされます。インタラクシヨン方法タブが、インタラクティブチャンネルの[サマリ]タブで配置を待機しているアイテムのリストに追加されます。配置をマーキングされたインタラクシヨン方法タブは編集できません。

次回にインタラクティブチャンネルを配置するときは、このインタラクティブ方法タブへの変更が含まれます。

レポートがインストールされている場合、**[配置履歴を表示]**をクリックすると、インタラクティブチャンネル配置履歴レポートを表示できます。

配置要求をキャンセルするには

1. 配置をキャンセルするインタラクシヨン方法タブを表示します。
2. **[配置要求をキャンセル]**をクリックします。

インタラクシヨン方法タブから配置のマーキングが解除されます。インタラクシヨン方法タブが、インタラクティブチャンネルの[サマリ]タブで配置を待機しているアイテムのリストから削除されます。これでインタラクシヨン方法タブを編集できます。

レポートがインストールされている場合、**[配置履歴を表示]**をクリックすると、インタラクティブチャンネル配置履歴レポートを表示できます。

インタラクション方法タブに配置解除をマーキングするには

インタラクション方法タブで作成したスマートセグメントが必要でなくなった場合には、そのインタラクション方法タブを配置解除にできます。この操作により、インタラクション方法タブへのすべての参照が、ランタイムサーバから削除されます。

このオプションは、インタラクション方法タブを既に配置済みである場合にのみ利用できます。

1. 配置解除をマーキングするインタラクション方法タブを表示します。
2. [配置解除をマーキング]をクリックします。

インタラクション方法タブに配置解除がマーキングされます。データの削除要求が、インタラクティブチャンネルの[サマリ]タブで配置を待機しているアイテムのリストに追加されます。配置解除をマーキングされたインタラクション方法タブは編集できません。

次回にインタラクティブチャンネルを配置するときは、このインタラクティブ方法タブへのすべての参照が、ランタイムサーバから削除されます。

レポートがインストールされている場合、[配置履歴を表示]をクリックすると、インタラクティブチャンネル配置履歴レポートを表示できます。

インタラクション方法での操作方法

インタラクション方法タブでは次のアイコンを使用します。



各アイコンの説明を左から右の順に、次の表に示します。

アイコンの名前	説明
ルールの追加	このインタラクティブ方法に新しい処理ルールを追加する場合にクリックします。
編集	インタラクション方法の名前と説明を編集する場合にクリックします。インタラクティブチャンネルは変更できません。
インタラクション方法の削除	このアイコンは、このインタラクティブ方法タブを削除する場合にクリックします。
フローチャートの追加	このアイコンは、このキャンペーンに新しいバッチフローチャートを追加する場合にクリックします。インタラクティブフローチャートを追加する場合は、セッションでそれらを作成する必要があることに注意してください。
インタラクション方法の追加	このアイコンは、このキャンペーンに新しいインタラクション方法を追加する場合にクリックします。

タスク9:ターゲットセルとコントロールセルの割り当て

- (任意)ターゲットセルとコントロールセルの割り当て
- セルコードを上書きするには

(任意)ターゲットセルとコントロールセルの割り当て

インタラクション方法タブはキャンペーンの一部であるため、ターゲットセルスプレッドシートを利用することもできます。ターゲットセルスプレッドシート(TCS)は、キャンペーンや(割り当てられたオファーなどの)キャンペーン詳細にあるすべてのセルを表示する、キャンペーンごとのスプレッドシート型機能です。

TCS機能は、インタラクション方法とともに動作し、バッチフローチャートを使用した場合とは少し異なる動きをします。トップダウンおよびボトムアップのアプローチを両方使用できます。インタラクション方法タブ内の処理ルールによって生成されたセルが、TCSの最下位のセルになります。トップダウンのアプローチはバッチフローチャートと同じように使用できます。ただし、この時点で、インタラクション方法からのセル割り当てへのオファーは、TCSには表示されません。また、処理ルール内で使用するためにオファーをTCS上のセルに割り当てることはできません。インタラクション方法タブを使用して、オファーをセルに割り当てて、リアルタイムインタラクションを行う必要があります。

Marketing Operations TCSのインタラクション方法で使用されるセルを承認する必要はありません。

コントロールセルも、リアルタイムインタラクションでの動作が異なります。たとえば、Webサイトでは常にオファーを表示する必要がありますが、それ以外の場合はページレイアウトが乱れる場合があります。コントロールセルのオファーは、従来のオファーの代わりに単純なブランドイメージになる場合があります。利用可能なレポートがインストールされている場合、リアルタイムインタラクション用のコントロールセルはレポートされません。

ターゲットセルスプレッドシートの詳細については、『Campaignユーザガイド』を参照してください。

関連トピック

- セルコードを上書きするには

セルコードを上書きするには

処理ルールを作成すると、Campaignによってセグメントがセルにマップされます。必要に応じて、セル名またはセルコードを上書きできます。

1. セルコードを編集するセグメントをクリックします。
2. [このセル名またはコードを上書き]を選択します。
[セル名とコードを上書きする]ダイアログが表示されます。
3. [ターゲットセル名]を編集します。

4. セルコードを次のように変更します。
 - 新しいセルコードは、Campaignのセルコード生成プログラムで[このルール専用
に作成された自動生成コードまたは手入力コードを使用する]および[自動生成]を
選択することで作成します。
 - セルコードを、[このルール専用
に作成された自動生成コードまたは手入力
コードを使用する]を選択して、新しい[ターゲットセルコード]を入力することで作成
します。
 - ターゲットコントロールスプレッドシート(TCS)でトップダウンに作成されたセ
ルコードを、[事前に作成されたターゲットセルコードを選択または入力する]を
オンにして、リストからコードを選択することで選択します。

リストは、入力した内容でフィルタリングされます。たとえば、ABCと入力す
ると、リストには「ABC」で始まるセルコードのみが表示されます。
5. [保存して戻る]をクリックして[セル名とコードを上書きする]ダイアログに戻る
か、[保存して次を編集]をクリックして次のセグメントのセル名とコードを編集し
ます。

関連トピック

- (任意)ターゲットセルとコントロールセルの割り当て

タスク:10: IBM Unica Interactの設定の配置

■ Interact構成の配置

Interact構成の配置

Interact構成を設定した場合には、インタラクション方法タブとすべてのインタラクティブフローチャートに配置をマーキング済みである必要があります。設計環境においてInteract実装のすべての構成が完了すると、ランタイムサーバに構成を配置する準備が整ったこととなります。

インタラクティブチャネルの配置の詳細については、「[配置の概要](#)」を参照してください。

関連トピック

- [配置の概要](#)
- [運用ランタイムサーバグループに配置するには](#)
- [テストサーバグループに配置するには](#)

3 インタラクティブフローチャート

- インタラクティブフローチャートについて
- インタラクティブフローチャートの作成
- インタラクティブフローチャートを作成するには
- インタラクティブフローチャートとデータソース
- インタラクティブフローチャートのプロセスについて
- 決定プロセスについて
- PopulateSegプロセスについて
- インタラクティブフローチャートのサンプルプロセスについて
- インタラクティブフローチャートの選択プロセスについて
- インタラクティブフローチャートのスナップショットプロセスについて
- インタラクティブフローチャートのテスト実行の概要
- インタラクティブフローチャートの配置について

インタラクティブフローチャートについて

インタラクティブフローチャートは、戦略的セグメントを作成するときに使用されるCampaignのバッチフローチャートと似ています。

Campaignのバッチフローチャートは、一連のアクションをデータ上で実行してキャンペーンを行うために使用します。バッチフローチャートはプロセスでできており、これを構成することでキャンペーンに必要な実際のデータ操作を実行します。セッションでバッチフローチャートを使用するときは、すべてのキャンペーンにグローバルに利用できる、戦略的セグメントなどの永続的なデータ構造体を作成します。戦略的セグメントはセッションで作成されるIDのリストで、すべてのキャンペーンで利用可能になります。戦略的セグメントは、どのキャンペーンでもグローバルに使用できるという点を除き、他のセグメント(例: セグメントプロセスで作成されたもの)との違いはありません。

インタラクティブフローチャートも、タッチポイントへの訪問者をセグメントに割り当てるという目的を実現します。各インタラクティブフローチャートはプロセスでできしており、これを構成して訪問者をセグメントに割り当てます。インタラクティブフローチャートでは、キャンペーンでインタラクティブチャネルに対応するため、インタラクティブ方法でグローバルに利用できるセグメントも作成されます。ただし、インタラクティブフローチャートで作成されるセグメントは、バッチフローチャートで作成されるセグメントとは異なります。バッチフローチャートで作成されるセグメントはIDのリストです。インタラクティブフローチャートで作成されたセグメントはスマートセグメントと呼ばれ、セグメントにどの顧客を配置するかを定義します。

インタラクティブフローチャートはリアルタイムに機能し、一度に1人の訪問者を処理するように設計されています。ランタイムサーバにインタラクティブフローチャートを配置した後は、各フローチャートのインスタンスが、タッチポイントへのアクティブな訪問者ごとに1つ存在します。各訪問者がインタラクティブフローチャートを通ると、スマートセグメントにリアルタイムに割り当てられます。インタラクティブフローチャートを構成して、運用データソース内のデータおよびタッチポイントからリアルタイムに収集したデータを参照できます。

インタラクティブフローチャートに設定できるオーディエンスは、フローチャートごとに1つだけです。ただし、オーディエンスごとに多数のインタラクティブフローチャートを設定することはできます。

インタラクティブフローチャートを設計するときは、インタラクティブフローチャートのパフォーマンスとバッチフローチャートのパフォーマンスの違いに注意する必要があります。これらのフローチャートは、リアルタイムに実行されます。Webサイトで最適な広告を読み込むのに時間がかかりすぎる場合、顧客は別のサイトに移動する可能性があります。フローチャートを設計する場合、タッチポイントの管理者と協力して、セグメント要件とタッチポイントのパフォーマンス要件のバランスをとる必要があります。タッチポイントの管理者と相談する必要がある設計上の考慮事項には、オーディエンスごとに実行するインタラクティブフローチャートの数や、データベースの検索に要する時間などがあります。

インタラクティブフローチャートは設計環境内ではなくランタイムサーバ上で実行するため、インタラクティブフローチャートをCampaignで実行することはできません。ただし、インタラクティブフローチャートをCampaignでテスト実行することはできます。

インタラクティブフローチャートの作成

通常のインタラクティブフローチャートは、インタラクティブプロセスと共に開始され、データ操作プロセスを経て、少なくとも1つのPopulateSegプロセスで終了します。データ操作プロセス(決定、選択、サンプル)により、詳細なセグメントを作成できます。決定とサンプルのプロセスではブランチロジックを作成することができ、選択プロセスは決定とセグメントを行う際に考慮するデータを充実させるために使用できます。スナップショットプロセスにより、プロファイルデータ、セッションデータまたはリアルタイムに算出したデータをデータベースに保存できます。

すべてのインタラクティブフローチャートは、インタラクティブプロセスで開始する必要があります。インタラクティブプロセスでは、フローチャートのテスト実行時に処理されるオーディエンスレコードの数も定義されます。

決定プロセスでは、条件式に基づいてブランチを作成することで、入力内容をさまざまなセルに分割できます。

入力内容をフローチャートのセルに分けた後は、PopulateSegプロセスを使用してセルのメンバをスマートセグメントのメンバとして指定します。

選択プロセスは、訪問者の選択肢を広げるために、詳細なクエリにアクセスする場合に使用できます。選択プロセスにより、ユーザ変数、ユーザ定義項目、カスタムマクロ、Webコールアウトにアクセスできます。データソースで使用可能なディメンションテーブルのデータを含めることもできます。

サンプルプロセスでは、バッチフローチャートで使用可能なサンプル構成の選択を制限することができます。バッチフローチャートの場合と同様、サンプルプロセスを使用すると、さまざまな処理、コントロールグループまたはモデリングデータのサブセットのセルを1つ以上作成できます。

スナップショットプロセスを使用すると、データソース内のテーブルにデータを書き込みます。たとえば、Webコールアウトとカスタムマクロによってリアルタイムデータにアクセスする場合に選択プロセスを使用するときは、スナップショットプロセスを使用してそのデータをカスタムプロファイルに追加します。

インタラクティブフローチャートを作成するには

❗ インタラクティブフローチャートを作成するときは、そのフローチャートにオーディエンスを定義する必要があることに注意してください。インタラクティブフローチャートのオーディエンスは、作成後に変更することはできません。

1. インタラクティブフローチャートを追加するセッションの[サマリ]タブを開きます。
 2. [フローチャートの追加]アイコンをクリックします。
[新規フローチャート]ページが表示されます。
 3. フローチャートの名前と説明を入力します。
 4. フローチャートタイプは[インタラクティブフローチャート]を選択します。
インタラクティブフローチャートの構成設定が表示されます。
 5. このインタラクティブフローチャートの[インタラクティブチャンネル]を選択します。
 6. このインタラクティブフローチャートの[オーディエンス]を選択します。
 7. [保存とフローチャートの編集]をクリックします。
[インタラクティブフローチャートの編集]ページに、プロセスパレットと空白のフローチャートワークスペースが表示されます。
- これでインタラクティブフローチャートを編集できます。

関連トピック

- ・インタラクティブフローチャートの構成

インタラクティブフローチャートとデータソース

バッチフローチャートと同様、インタラクティブフローチャートを使用して、セグメントのオーディエンスメンバを、関連付けられたデータの特徴に基づいて定義します。ただし、インタラクティブフローチャートで使用するデータは、バッチフローチャートで使用するデータとは異なります。

バッチフローチャートでは、データベースで利用できるデータを使用します。インタラクティブフローチャートでは、データベースから永続的なプロファイルデータを使用することも、リアルタイムのセッションデータも使用できます。リアルタイムのセッションデータには、タッチポイントから書き込み可能なすべてのデータを含めることができます。電話をかけてきた人が保留にされていた時間を含めたり、どのWebサイトから訪問してきたかをトラッキングしたり、訪問者のいる場所の天気調べたりできます。永続的なプロファイルデータは、バッチフローチャートと同様、データベーステーブルから取得されます。これにより、訪問者、名前、アカウント番号、アドレスなどに関する従来のすべてのデータを含めることができます。

設計中は、永続的なプロファイルデータのみアクセスできます。Campaignがタッチポイントに接続されないため、リアルタイムのセッションデータを収集することはできません。リアルタイムのセッションデータを参照するインタラクティブフローチャートを作成して、インタラクティブフローチャートのテストを実行するには、サンプルのリアルタイムセッションデータをテスト実行プロファイルテーブルで使用する必要があります。

テスト実行プロファイルテーブル

テスト実行プロファイルテーブルには、少なくともフローチャートのオーディエンスに適したIDのリストが含まれている必要があります。たとえば、フローチャートのオーディエンスが世帯である場合、インタラクティブプロセスによって参照されるテーブルには、最低でも世帯IDのリストが含まれている必要があります。テスト実行プロファイルテーブルは、オーディエンスごとに1つあります。これらのテーブルは、インタラクティブチャンネルごとにマップされます。

テスト実行プロファイルテーブルには、分類ロジックで使用するリアルタイムセッションデータの列も含まれます。たとえば、タッチポイントの設計者が、Webページの訪問者の名前を収集してlinkFromという名前で保存すると、この情報がテスト実行プロファイルテーブルのlinkFromという名前の列になります。

テスト実行プロファイルテーブルには、その他のデータも含めることができます。ディメンションテーブルの永続的なすべてのプロファイルデータを参照している場合は、プロファイルテーブルに永続的なプロファイルデータのコピーを含める必要はありません。

インタラクティブフローチャートを設計する人、タッチポイントで統合の設計とコーディングを担当する人、およびInteract管理者が協力し合ってテスト実行プロファイルテーブルを設計する必要があります。タッチポイントの設計者は、利用できるリアルタイムセッションデータのリストを用意する必要があります。フローチャートの設計者は、分類に必要なデータのリスト、および分類ロジックをテストするための推奨サンプルデータのリストを用意する必要があります。Interact管理者は、フローチャートのデザインに影響を及ぼす可能性のある、最適化と構成に関するすべての設定リストを用意する必要があります。たとえば、データベースへのアクセス回数を制限することでパフォーマンスを向上させようとしている場合は、プロファイルテーブル内およびディメンションテーブル内に格納するデータを決定する必要があります。

ディメンションテーブル

ディメンションテーブルをインタラクティブフローチャートにマップできますが、Campaign Settingsで利用できるCampaignテーブルマッピングではなく、インタラクティブチャンネル内のテーブルをマップする必要があります。これらのディメンションテーブル内には、プロファイルテーブルにマップされる列が1つ必要です。ディメンションテーブルは別のディメンションテーブルにマップすることもできます。別のディメンションテーブルにマップされるディメンションテーブル内には、その他のディメンションテーブルにマップされる列が必要です。一連のディメンションテーブルは、最終的にはプロファイルテーブルにマップする必要があります。たとえば、ディメンションテーブルAはディメンションテーブルBと列を1つ共有する必要があり、ディメンションテーブルBはディメンションテーブルCと列を共有する必要があり、ディメンションテーブルCはプロファイルテーブルと列を共有する必要があります。

多数のディメンションテーブルを設定することができますが、それらのディメンションテーブルはすべて同じデータソースに存在する必要があります。すべてのディメンションテーブルをインタラクティブチャンネルにマップしてから、インタラクティブフローチャートで作業を開始する必要があります。テーブルを、インタラクティブフローチャート内のデータを取得するためにマップすることはできません(スナップショットプロセスで使用する場合には、その他のテーブルをマップできます)。

多数のディメンションテーブルがある場合は、パフォーマンスの要件を満たしていることを確認するため、タッチポイントの管理者と一緒に作業してください。

インタラクティブフローチャートの構成

インタラクティブフローチャートは通常、バッチフローチャートと同じ方法で構成します。バッチフローチャートとの比較において別の概念でインタラクティブフローチャートを考慮する必要がある場合は、バッチフローチャートと同じ方法でインタラクティブフローチャートにプロセスを追加したり編集したりします。ここで説明している例外を除いて、プロセスの追加やプロセス名の変更などの一般的なフローチャートの作成方法については、『Campaignユーザガイド』を参照してください。

- インタラクティブフローチャートのオーディエンスは変更できないことに注意してください。
- インタラクティブフローチャートを削除できるかどうかは、その配置ステータスに依存します。

- [テーブルマッピング]ダイアログにアクセスする場合、[読み込み]をクリックすると、一般的なテーブルのみが読み込まれます。

フローチャートに関連付けられたインタラクティブチャンネル内のインタラクティブフローチャートには、すべてのテーブルマッピングを実行する必要があります。

- 保存されたテーブルカタログは、インタラクティブフローチャートでは使用されません。

関連トピック

- 配置と削除

クエリとInteract

インタラクティブフローチャートのいくつかのプロセスと処理ルールの詳細オプションにより、クエリを作成してデータソースからデータを選択することができます。これらは通常、Campaignと同じクエリです。インタラクティブフローチャートまたは処理ルールの詳細オプションでクエリを作成するには、次の方法のいずれかを使用できます。

- ポイント&クリック
- SQL入力
- マクロ

これらの方法の詳細については、『*Campaignユーザガイド*』を参照してください。

インタラクティブフローチャートと処理ルールの詳細オプションは、未加工のSQLをサポートしていません。

次の項では、インタラクティブフローチャートおよび処理ルールの詳細オプションで利用できるオプションの違いを説明します。

データ型と保存されたオブジェクトについて

Campaignと同様、Interactは保存されたオブジェクトについて、複数のデータ型をサポートします。ユーザ変数、ユーザ定義項目およびマクロでは、数値、文字列および日付のデータ型のすべてを使用できます。日付定数は、Campaignの日付形式設定を使用して解釈されます。

Interactは、ベクトルデータ型もサポートしています。ベクトルは、要素の数値が変数であることを除き、配列と同じです。Interactで利用できるすべての演算子は、少なくとも1つの引数としてベクトルを使用できます。

次のように使用します。

- $X \text{ [operation] } Y = Z$ の X 、 Y および Z はベクトルです。
- S_x 、 S_y 、 S_z は各ベクトルのサイズです。
- D_x 、 D_y 、 D_z は、各ベクトルのデータ型です。 X および Y には同じデータ型を含める必要があります。

続いて、次の条件がTRUEの場合:

- $Sz = Sx * Sy$
- $Dx = Dy = Dz$

次に2つの例を挙げます。

次の表に、式 $IF((X+Y)==10)$ と $IF(NOT((X+Y)==10))$ で、 $X=\{1, 2, 3\}$ および $Y=\{9, 10, 11\}$ である場合に、Interactによってどのように評価されるかを示します。

X	Y	X+Y	(X+Y)==10?	NOT((X+Y)==10)?
1	9	10	TRUE	FALSE
1	10	11	FALSE	TRUE
1	11	12	FALSE	TRUE
2	9	11	FALSE	TRUE
2	10	12	FALSE	TRUE
2	11	13	FALSE	TRUE
3	9	12	FALSE	TRUE
3	10	13	FALSE	TRUE
3	11	14	FALSE	TRUE

方程式はTRUEまたはFALSEのいずれかに評価される必要があり、少なくとも1つの演算がTRUEに評価されると、 $IF((X+Y)==10)$ と $IF(NOT((X+Y)==10))$ の式のいずれか方の結果がTRUEになります。

ユーザ定義項目、ユーザ変数、マクロおよびInteract

インタラクティブフローチャートおよび処理ルールの詳細オプションに式を作成することができますが、すべてのビルドブロックは、両方のクエリビルダで使用できません。次の表に、クエリビルドブロックがインタラクティブフローチャートまたは詳細オプションで使用できるかどうか、および特記事項について示します。

ここに記載されている以外のクエリの作成方法の詳細については、『Campaignユーザガイド』を参照してください。

オブジェクト	インタラクティブフローチャートで使用可能	詳細オプションで使用可能	説明
ユーザ定義項目	はい	いいえ	決定、選択、スナップショットのプロセスを使用しているインタラクティブフローチャートでは、ユーザ定義項目、永続的なユーザ定義項目、保存されたユーザ定義項目およびユーザ変数を使用できます。ユーザ定義項目には、定数、ユーザ変数、その他のユーザ定義項目およびマクロを含めることができます。Interact APIの名前と値のペアで使用できるように、インタラクティブフローチャートにユーザ定義項目を作成している場合は、SessionVar構成プロパティで定義されたプレフィックスを付けて命名する必要があります(例: SessionVar.DerivedFieldName)。
ユーザ変数	はい	いいえ	ユーザ変数に含めることができるのは数値または文字列のみです。インタラクティブフローチャートは、Noneデータ型をサポートしていません。
IBM Unica マクロ	はい	はい	<p>インタラクティブフローチャートおよび処理ルールの詳細オプションで使用するため、IBM Unica マクロの選択リストが用意されています。設計環境では、使用可能なIBM Unica マクロがクエリビルダにリストされます。マクロの使用の詳細については、『IBM Unica マクロユーザガイド』を参照してください。</p> <p>☀ NUMBER、ISおよびINは、Campaignのインタラクティブフローチャートおよび詳細オプションとは異なる動作になります。</p> <p>EXTERNALCALLOUTは、インタラクティブフローチャートでのみ使用できます。この関数では、外部サービスへの同時コールアウトを作成することができます。</p>
カスタムマクロ	はい	いいえ	

EXTERNALCALLOUTの使用

EXTERNALCALLOUTは、インタラクティブフローチャートのプロセス(決定、選択およびスナップショット)のカスタムマクロで作業するときに利用できる新しい関数です。EXTERNALCALLOUTにより、外部サービスを同時に呼び出すことで、特定のオーディエンスのクレジットスコアの要求などができます。

外部コールアウトを使用するには、IAffiniumExternalCalloutインターフェイスを使用して、Javaで外部サービスを書き込む必要があります。IAffiniumExternalCalloutの詳細については、『Interact管理者ガイド』を参照してください。

インタラクティブプロセスについて

すべてのインタラクティブフローチャートは、インタラクティブプロセスから開始する必要があります。インタラクティブプロセスにより、次のことを実行します。

- インタラクティブフローチャートを開始します。
- インタラクティブフローチャートのテストを実行するときに、Interactで使用するテストプロファイルサンプルのサイズを定義します。

決定プロセスについて

決定プロセスは、インタラクティブフローチャートの主要部分です。決定プロセスでは、構成可能な条件に基づいて、プロセスに渡されたセルを新しいセルに分割します。新しいセルには、それぞれブランチが作成され、決定ツリーのように形成されます。

インタラクティブフローチャートには、決定プロセスを必要なだけ含めることができます。たとえば、インタラクティブフローチャートの最初の決定プロセスで、HighValue、MediumValueおよびLowValueというセルを作成したとします。これらの最初のセグメントをそれぞれ分割して、FrequentShopper、ShopperおよびRareShopperという決定プロセスを3つ追加することで、セグメントをより絞り込むことができます。

インタラクティブフローチャートをランタイムサーバ上で実行するときに、フローチャートを通過できるのは一度に1人の顧客だけです。ブランチが空白である場合、ランタイム環境はブランチも子ブランチも処理できません。

決定プロセスは、インタラクティブ、決定、サンプルまたは選択のプロセスなどの、セルが作成されるプロセスからのみ入力できます。

決定プロセスの構成には、2つの手順があります。最初に入力セルを選択し、次にブランチを構成する必要があります。

決定プロセスを構成するには

1. **[編集]**モードのインタラクティブフローチャートで、フローチャートのワークスペースに決定プロセスを追加します。
2. 1つまたは複数のデータ操作プロセスに接続することで、決定プロセスでの入力を実行します。

データ操作プロセスには、インタラクティブ、決定、サンプル、選択があります。

3. 決定プロセスをダブルクリックします。

[プロセス設定]ウィンドウに、[決定]タブが表示されます。

4. [入力]ドロップダウンリストから、1つのソースセルを選択します。
5. データを重複しないようにセグメントを作成する場合は、[データの重複を許可しない]を選択します。
ブランチに残りの顧客IDをすべて含める場合は、[データの重複を許可しない]を選択する必要があります。
6. ブランチを構成します。
7. (任意)プロセスに名前と説明を割り当てるには、[全般]タブをクリックします。
名前はフローチャートのプロセス上に表示されます。説明はフローチャートのプロセス上にマウスを移動すると表示されます。
8. [OK]をクリックします。
構成され有効になったプロセスが、フローチャートに表示されます。

決定プロセスのブランチを構成するには

1. [決定]タブの決定プロセスで、次のいずれかを実行します。
 - ブランチの条件を編集するには、ブランチを選択して[編集]をクリックして、
 - 新しいブランチを作成するには、[ブランチの追加]をクリックします。
 - ブランチを削除するには、ブランチを選択して[削除]をクリックします。
 2. [編集]ウィンドウまたは[ブランチの追加]ウィンドウで、[ブランチ名]を入力します。
 3. クエリを作成しない場合、または残りのすべての顧客を選択する場合は、[すべての顧客IDを選択]を選択します。
[すべての顧客IDを選択]は、この決定プロセスを複数のデータ操作の後に実行する場合や、顧客IDが以前のプロセスで既にフィルタリングされている場合に便利です。
- ※ 残りのすべての顧客を選択するには、決定プロセスの構成ダイアログで[相互排他的なブランチ]を選択する必要があります。[相互排他的なブランチ]を選択しない場合、このブランチでは決定プロセスに接続されているすべての顧客IDが選択されます。

既定では[条件を指定して顧客IDを選択]が選択されており、クエリビルダがアクティブになっています。

4. [ソースの選択]ドロップダウンリストから、1つのテーブルを選択します。
5. クエリを使用してブランチの条件を作成します。
6. [OK]をクリックします。
[追加]ウィンドウまたは[ブランチの編集]ウィンドウが閉じられ、決定プロセスの[決定]タブに戻ります。ブランチの構成を続行するか、または決定プロセスの構成を完了することができます。

PopulateSegプロセスについて

PopulateSegプロセスでは、バッチフローチャート内のセグメント化プロセスと同じ機能を実行します。PopulateSegプロセスでは、入力セルを取得して、それらのセルをスマートセグメントにします。PopulateSegプロセスで作成したこれらのセグメントが、処理ルールで使用するスマートセグメントになります。PopulateSegプロセスは、インタラクティブフローチャートの終端ノードです。

スマートセグメントはインタラクション方法でのみ使用でき、インタラクション方法はスマートセグメントでのみ使用できることに注意してください。戦略的セグメントをインタラクション方法で使用することはできません。

スマートセグメントを作成するには

1. **[編集]**モードのインタラクティブフローチャートで、フローチャートのワークスペースにPopulateSegプロセスを追加します。
2. 1つまたは複数のデータ操作プロセスに接続することで、PopulateSegプロセスでの入力を実行します。
データ操作プロセスには、決定、サンプル、選択があります。
3. PopulateSegプロセスをダブルクリックします。
[プロセス設定]ウィンドウに、[セグメントの定義]タブが表示されます。
4. **[入力]**ドロップダウンリストから、1つまたは複数のソースセルを選択します。
5. **[結果セグメント]**で入力セルを選択し、**[セグメント名]**を選択します。
新しいセグメントを作成する場合は、**[新規セグメント]**を選択し、新規スマートセグメントのダイアログの項目を設定します。**[名前]**と**[説明]**を入力し、セグメントを作成するセグメントフォルダを選択します。スマートセグメントは、戦略的セグメントを整理する場合と同様に整理することができます。
6. (任意)プロセスに名前と説明を割り当てるには、**[全般]**タブをクリックします。
名前はフローチャートのプロセス上に表示されます。説明はフローチャートのプロセス上にマウスを移動すると表示されます。
7. **[OK]**をクリックします。
構成され有効になったプロセスが、フローチャートに表示されます。

インタラクティブフローチャートのサンプルプロセスについて

インタラクティブフローチャートのサンプルプロセスは、バッチフローチャートのサンプルプロセスと同じ目的で提供されています。サンプルプロセスでは、さまざまな処理、コントロールグループまたはモデリングデータのサブセットのセルを1つ以上作成できます。ただし、インタラクティブフローチャートのサンプルプロセスには、バッチフローチャートのサンプルプロセスのサブセット機能のみが格納されます。サンプルサイズ計算と最大セルサイズは削除されます。インタラクティブフローチャートのサンプルプロセスには、サンプルの選択に関する新しいメソッドである決定論的ハッシュ関数もあります。

バッチフローチャートでは、サンプルプロセスが顧客を無作為に何人が選択して1つのサンプルセルにします。一方、インタラクティブフローチャートでは、ランタイム時にサンプルプロセスが一度に1人の顧客を処理します。サンプルのパーセンテージを定義するということは、訪問者がそのセルのメンバになる可能性を定義するということです。

サンプルセルを定義するときは、少なくとも2つのセルを作成する必要があります。1つのサンプルに[パーセント]を定義して、もう1つに対しては[残りすべて]を選択します。この設定をしておかないと、結果が不明瞭なものになります。たとえば、30%のサンプルだけを作成すると、残り70%の訪問者はどのセルにも割り当てられません。

サンプリングに使用するスマートセグメントの作成を完了するには、サンプルプロセスをPopulateSegプロセスに接続する必要があります。

決定論的ハッシュ関数は、訪問者を無作為にサンプルに割り当てます。ただし、同じ訪問者がフローチャートを複数回通過した場合、その訪問者は同じセルに配置されます。それが望ましい結果である場合、同じセルに重複して配置された訪問者が、一定期間後に別のサンプルに適していることを確認するには、決定論的ハッシュ関数にリセット時間と周期を構成する必要があります。


別のフローチャートの機能をコピーしてフローチャートを作成している場合は、[ハッシュシード]フィールドを使用して、サンプルプロセスがコピー元のインタラクティブフローチャートと同じ決定論的ハッシュ関数を使用していることを確認できます。訪問者を同じサンプルグループに配置するには、両方のサンプルプロセスで同じセル数、ハッシュシード、最初のリセット日、およびリセット期間を使用します。Interactでは、ハッシュ入力シードとリセット日付の値を使用して、訪問者が配置されるセルを決定します。

サンプルプロセスを構成するには

1. **[編集]**モードのインタラクティブフローチャートで、フローチャートのワークスペースにサンプルプロセスを追加します。
2. 1つまたは複数のデータ操作プロセスに接続することで、サンプルプロセスでの入力を実行します。

データ操作プロセスには、決定、サンプル、選択があります。サンプルプロセスは、インタラクティブプロセスに接続することもできます。

3. サンプルプロセスをダブルクリックします。

4. **[入力]**ドロップダウンリストから、1つまたは複数のソースセルを選択します。
そのサンプルプロセスに接続されたプロセスのすべての出力セルが、ドロップダウンリストに一覧表示されます。複数のソースセルを使用するには、**[複数セル]**オプションを選択します。複数のソースセルが選択されている場合、同じサンプリングが各ソースセルで実行されます。
5. 入力セルごとに作成するサンプル数を決定し、その数を**[サンプル数]**項目に入力します。
既定では、各入力セルに3つのサンプルが作成され、それぞれに「Sample1」、「Sample2」、「Sample3」という既定の名前が付けられます。
6. **[項目名]**列で各サンプルを選択し、次の操作を行います。
[サンプルの編集]セクションが有効になっています。
 - a. **[セル名]**テキストボックスにカーソルを置き、サンプル名を入力して変更します。
文字、数値、スペースを組み合わせる使用できます。ピリオド(.)やスラッシュ(/または\))は使用しないでください。
 - b. 訪問者をサンプルに割り当てる可能性を**[パーセント]**項目に入力するか、**[残りすべて]**チェックボックスをオンにします。
パーセントは100.00未満にする必要があります。
7. (任意)**[決定論的ハッシュ関数]**の**[ハッシュシード]**を変更します。
ハッシュシードは、このサンプルプロセスで訪問者を、他のサンプルプロセスと同じ方法でセルに割り当てる場合にのみ変更する必要があります。ハッシュシードは英数字の値にする必要があります。
8. (任意)**[決定論的ハッシュ関数]**の**[最初のリセット日]**を入力します。
日付を選択するには、省略記号ボタンをクリックしてカレンダーを表示します。
9. (任意)リセット間隔の日数を入力します。
10. (任意)プロセスに名前と説明を割り当てるには、**[全般]**タブをクリックします。
名前はフローチャートのプロセス上に表示されます。説明はフローチャートのプロセス上にマウスを移動すると表示されます。
11. **[OK]**をクリックします。
構成され有効になったプロセスが、フローチャートに表示されます。
サンプリングに使用するスマートセグメントの作成を完了するには、サンプルプロセスをPopulateSegプロセスに接続する必要があります。

インタラクティブフローチャートの選択プロセスについて

インタラクティブフローチャートの選択プロセスは、バッチフローチャートの選択プロセスと同じ目的で提供されています。このプロセスでは、インタラクティブフローチャートで使用する顧客データを指定できます。インタラクティブフローチャートの選択プロセスには、バッチフローチャートの選択プロセスのサブセットである[ソース]タブおよび[全般]タブのみが含まれます。

選択プロセスは、インタラクティブプロセスで参照するプロファイルテーブルを増補するために、データソースからデータを選択する場合に使用できます。また、ユーザ変数、ユーザ定義項目およびマクロにもアクセスできます。インタラクティブフローチャートは、1つのオーディエンスに制限されることに注意してください。ただし、選択プロセスを使用すると、ディメンションテーブル内のデータを異なるオーディエンスで参照することができます。たとえば、インタラクティブフローチャートの世帯のトランザクションデータを顧客オーディエンスで参照して、世帯データ内の情報別にソートすることができます。

選択プロセスを構成するには

1. **[編集]**モードのインタラクティブフローチャートで、フローチャートのワークスペースに選択プロセスを追加します。
2. 1つまたは複数のデータ操作プロセスに接続することで、選択プロセスでの入力を実行します。
データ操作プロセスには、決定、インタラクティブ、サンプル、選択があります。
3. 選択プロセスをダブルクリックします。
4. **[入力]**ドロップダウンリストから、1つまたは複数のソースセルを選択します。
その選択プロセスに接続されたプロセスのすべての出力セルが、ドロップダウンリストに一覧表示されます。複数のソースセルを使用するには、**[複数セル]**オプションを選択します。複数のソースセルが選択されている場合、同じ選択アクションが各ソースセルで実行されます。
5. データソースのすべての行を選択するかどうか、または指定された条件に基づいて行をフィルタリングするかどうかを決定します。次のオプションのいずれかを選択します。
 - a. **すべてのIDを選択:** [入力]ドロップダウンリストのデータソースからすべてのデータ行を含めます。
 - b. **条件を指定してIDを選択:** 定義した条件に基づいて任意のIDのみを選択するクエリを作成します。
6. **[条件を指定してIDを選択]**を使用して、指定した条件に基づく任意のIDのみを選択する場合は、クエリを作成します。
7. (任意)プロセスに名前と説明を追加する場合、または出力セル名やセルコードを構成する場合は**[全般]**タブをクリックします。

名前はフローチャートのプロセス上に表示されます。説明はフローチャートのプロセス上にマウスを移動すると表示されます。

8. **[OK]**をクリックします。

構成され有効になったプロセスが、フローチャートに表示されます。

インタラクティブフローチャートのスナップショットプロセスについて

インタラクティブフローチャートのスナップショットプロセスは、バッチフローチャートのスナップショットプロセスと同じ目的で提供されています。このプロセスでは、IDのリストや関連付けられたデータを取得して、テーブルにエクスポートできます。インタラクティブフローチャートのスナップショットプロセスには、バッチフローチャートのスナップショットプロセスのサブセットが格納されます。保存先は1つのテーブルだけです。テーブル内のエントリを順序付けたり、重複エントリをスキップすることはできませんが、インタラクティブフローチャートは一度に1レコードしか処理しないため、これらの機能は必要ありません。

スナップショットとデータ形式

スナップショットプロセスから既存のテーブルを保存すると、Interactは次の表のようにデータを保存します。

範囲	テキスト(String)まで	数値(Double)まで	日付(Date)まで
テキスト(String)	元の値	Double	次で定義したSimpleDateFormat defaultDateFormat構成プロパティ
数値(Double)	String	元の値	例外のスロー
日付(Date)	次で定義したSimpleDateFormat defaultDateFormat構成プロパティ	例外のスロー	元の値

既に存在していないテーブルに書き込むと、Interactランタイム環境では既定のデータ型を使用してテーブルが動的に作成されます。これらの既定のデータ型は、代替データ型のテーブルを作成することで上書きできます。詳細については、『Interact管理者ガイド』を参照してください。

スナップショットプロセスを構成するには

1. **[編集]**モードのインタラクティブフローチャートで、フローチャートのワークスペースにスナップショットプロセスを追加します。

2. 1つまたは複数のデータ操作プロセスに接続することで、スナップショットプロセスでの入力を実行します。

データ操作プロセスには、決定、インタラクション、サンプル、選択があります。

3. スナップショットプロセスをダブルクリックします。
4. [入力]ドロップダウンリストから、1つまたは複数のソースセルを選択します。

そのスナップショットプロセスに接続されたプロセスのすべての出力セルが、ドロップダウンリストに一覧表示されます。複数のソースセルを使用するには、[複数セル]オプションを選択します。複数のソースセルが選択されている場合、同じ選択アクションが各ソースセルで実行されます。

5. [エクスポート先]リストから、1つのテーブルを選択します。

テーブルが存在しない場合は、新規マップテーブルを選択し、『Campaign管理者ガイド』に記載されている新規テーブルの作成手順に従ってください。

6. オプションを選択して、出力テーブルへの更新の処理方法を指定します。
 - a. [データ追記]: テーブルの末尾に新しい情報を追加します。この方法は、データベーステーブルの場合にお勧めします。
 - b. [データ置換]: テーブルから既存のデータを削除して、新しい情報に置き換えます。
 - c. [データ更新]: スナップショットに指定されたすべての項目は、プロセスの現在の実行値で更新されます。

7. スナップショットプロセスによって書き取られる項目を指定します。

- a. テーブル内の項目は、[テーブル項目]列の[出力項目]リストに表示されます。一致する項目は、[照合>>]をクリックすることで自動的に検出できます。テーブル項目名と完全に一致する項目は、[出力項目]リストに自動的に追加されます。一致する項目が複数ある場合は、最初に一致した項目が取得されます。

- b. 項目を手動で選択して含めることもできます。

- a. [選択項目]リストから出力に含める項目を選択します。

一度に複数の項目を選択するには、**Ctrl**キーを押しながらクリックします。項目の範囲を選択する場合は**Shift**キーを押しながらクリックします。

- b. [追加>>]をクリックして、選択した項目を[エクスポート項目]リストに追加します。
- c. [<<削除]または[追加>>]をクリックすることで、組み合わせを手動で変更できます。
- d. [エクスポート項目]リスト内の項目の順序を並べ替える必要がある場合、任意の項目を選択して[1つ上へ]または[1つ下へ]をクリックすることで、リスト内を上下に移動させることができます。

8. (任意)プロセスに名前と説明を追加する場合、または出力セル名やセルコードを構成する場合は[全般]タブをクリックします。

名前はフローチャートのプロセス上に表示されます。説明はフローチャートのプロセス上にマウスを移動すると表示されます。

9. [OK]をクリックします。

構成され有効になったプロセスが、フローチャートに表示されます。

インタラクティブフローチャートのテスト実行の概要

インタラクティブフローチャートは、ランタイムサーバ上で一度に1人の訪問者を処理するように設計されています。ただし、Campaignでテストフローチャートをテストすることで、インタラクティブフローチャートで訪問者が作成され、予測どおりにセグメントに割り当てられることを確認できます。

インタラクティブフローチャートのテスト実行では、分類ロジックを確認するだけです。インタラクティブフローチャートを完全にテストして、タッチポイントとの動作を確認するには、インタラクティブフローチャートをテスト用ランタイムサーバに配置する必要があります。

インタラクティブフローチャートのテスト方法はバッチフローチャートのテスト方法と同じで、テスト実行を実施します。各セグメントには何人かのメンバが割り当てられており、結果は同じように見えますが、フローチャートがメンバに割り当てる方法は異なります。インタラクティブフローチャートのテスト実行を実施する場合、設計環境ではランタイム環境を使用します。ランタイム環境では、プロファイルテーブルの各行を訪問者として扱い、各訪問者は一度に1人ずつフローチャートを通過します。

ランタイム環境では、インタラクティブフローチャートで参照するテーブルで顧客データを参照し、すべてのリアルタイムデータはイベントパラメータ、外部コールアウトなどから利用できます。テスト実行中は、設計環境で実際のリアルタイムデータにアクセスすることはできません。設計環境では、テスト実行テーブルで使用可能なデータを使用します。インタラクティブフローチャートを適切に実行するには、Interact管理者と一緒に作業して、テスト実行プロファイルにサンプルデータを追加する必要があります。たとえば、郵便番号の最初の数字に基づいてオーディエンスメンバ进行分类するロジックを定義して、最初の数字の候補ごとにテスト実行プロファイルの1つのエントリを確保するようにします。

既定では、インタラクティブプロセスによって、テスト実行で使用されるプロファイルテーブルの入力レコード数が制限されますが、必要に応じて使用するレコード数は調整できます。設計環境では、オーディエンスIDの順序で最初のレコード数が選択されます。たとえば、テスト実行を5レコードに制限すると、設計環境では最初の5レコードをオーディエンスID別にソートしたものを、テスト実行プロファイルテーブルで使用します。

✧ インタラクティブフローチャートは、何千単位のレコードを実行するには最適化されていません。テスト実行を開始して非常に多くのレコードを処理すると、テスト実行が完了するまで数分かかる場合があります。

結果を表示できるのは最新のテスト実行だけです。設計環境では、新しいテスト実行を開始すると、以前のテスト実行のデータがすべて削除されます。テスト実行で1000を超えるエントリがある場合、またはテスト実行データをテスト実行ウィンドウを閉じた後に表示する場合、テスト実行データはtestRunDataSourceで定義されたデータベースの次のテーブルに保存されます。

- `TestAttr_n`: テスト実行の属性データレポートのデータ、つまり各オーディエンスIDのプロファイルテーブルのすべてのデータが含まれます。
- `TestCount_n`: テスト実行のセル数レポートのデータ、つまり各セルのメンバ数が含まれます。
- `TestError_n`: テスト実行エラーレポートのデータ、つまりテスト実行で発生したエラーがある場合、すべてのエラーが含まれます。
- `TestSeg_n`: テスト実行のセグメントデータレポートのデータ、つまり各オーディエンスIDと割り当てられたセグメントが含まれます。

`サフィックス_n`は、フローチャートIDを表します。フローチャートIDは、Campaignシステムテーブル内の`UA_Flowchart`テーブルを調べることで特定できます。

テスト実行のサイズを構成するには

1. **[編集]**モードのインタラクティブフローチャートで、インタラクティブプロセスをダブルクリックします。
[プロセス設定]ウィンドウに、[入力]タブが表示されます。
2. [入力レコードの上限]を選択し、レコードの数を入力します。
3. **[OK]**をクリックします。

テスト実行を行うには

インタラクティブフローチャートのテスト実行機能は、バッチフローチャートのテスト実行とは異なります。インタラクティブフローチャートのテスト実行では、一時停止、再開または停止ができません。

1. **[編集]**モードのインタラクティブフローチャートで、**[実行]**をクリックして、**[フローチャートのテスト実行]**を選択します。
設計環境でインタラクティブフローチャートをテストする場合は、テスト実行データソース内のすべてのデータと共に、`serverGroup`構成プロパティで定義されたランタイム環境を使用します。
テスト実行のステータスダイアログが開きます。
2. テスト実行が完了したら、**[結果を表示]**をクリックすると結果を確認できます。
テスト実行の結果は4つのテーブルで構成されます。
 - テスト実行のセグメントデータ: オーディエンスIDと割り当てられたセグメントが表示されます。
 - テスト実行の属性データ: 各オーディエンスIDのプロファイルテーブルのすべてのデータが表示されます。
 - テスト実行のセル数: 各セルのメンバ数が表示されます。
 - テスト実行エラー: テスト実行で発生したエラーがある場合、すべてのエラーが表示されます。

バッチフローチャートと同様、テスト実行でもプロセスにより、各セルの出力にメンバ数が挿入されます。後続のないプロセスでは他のプロセスに対してセルへの出力が行われないため、この数値は挿入されません。たとえば、[インタラクシオン]、[決定]、[PopulateSeg]でシンプルなフローチャートを作成します。テスト実行をすると、インタラクシオンプロセスにより、プロセスが正常に実行されたことを示す青色のチェックマークの下部において、出力セルにメンバ数が表示されます。この数値はテスト実行のサイズと同じである必要があります。決定プロセスでは、各セルにメンバ数が表示されます。決定プロセスで3つのセルが作成される場合は、「29;11;10」のように3つの数値がセミコロン(;)で区切られます。PopulateSegプロセスでは、他のプロセスにセルが出力されないため、メンバは表示されません。

インタラクティブフローチャートの配置について

インタラクティブフローチャートの構成を終了したら、そのフローチャートに配置をマーキングする必要があります。インタラクティブフローチャートに配置をマーキングすると、このインタラクティブフローチャートに関連付けられたインタラクティブチャンネルを、テスト用または運用用のランタイムサーバグループに配置できることを示す通知が表示されます。

インタラクティブフローチャートに配置をマーキングすると、そのフローチャートは編集できません。インタラクティブフローチャートを配置する前に変更を加える必要がある場合は、配置要求をキャンセルできます。この操作により、フローチャートが、配置を保留中のアイテムのリストから削除されます。

必要でなくなったインタラクティブフローチャートには、配置解除をマーキングできません。この操作により、回収要求が配置キューに追加されます。次回すべての変更が配置されると、そのインタラクティブフローチャートが、Interactサーバから削除されます。処理ルールには、削除したフローチャートによって作成されたスマートセグメントがまだ格納されていますが、そのセグメントに訪問者を割り当てるインタラクティブフローチャートはもう存在しないため、削除したフローチャートで作成されたセグメントに訪問者が割り当てられることはありません。

インタラクティブフローチャートを配置するには

1. 配置をマーキングするインタラクティブフローチャートを表示します。

フローチャートを表示する必要があります。編集モードでは、フローチャートの配置をマーキングできません。

インタラクティブフローチャートはセッション内でのみ利用できます。

2. [配置をマーキング]をクリックします。

インタラクティブフローチャートに配置がマーキングされます。インタラクティブフローチャートが、インタラクティブチャンネルの[サマリ]タブで配置を待機しているアイテムのリストに追加されます。配置をマーキングされたインタラクティブフローチャートは編集できません。

次回にインタラクティブチャンネルを配置するときは、このインタラクティブフローチャートへの変更が含まれます。

配置要求をキャンセルするには

1. 配置をキャンセルするインタラクティブフローチャートを表示します。

フローチャートを表示する必要があります。編集モードでは、フローチャートの配置をキャンセルすることはできません。

インタラクティブフローチャートはセッション内でのみ利用できます。

2. **[配置要求をキャンセル]**をクリックします。

インタラクティブフローチャートから配置のマーキングが解除されます。インタラクティブフローチャートが、インタラクティブチャンネルの[サマリ]タブで配置を待機しているアイテムのリストから削除されます。これでインタラクティブフローチャートを編集できます。

インタラクティブフローチャートの配置を解除するには

インタラクティブフローチャートで作成したスマートセグメントが必要でなくなった場合には、そのフローチャートの配置を解除できます。この操作により、フローチャートへのすべての参照が、ランタイムサーバから削除されます。

このオプションは、フローチャートを既に配置済みである場合にのみ利用できます。

1. 配置解除をマーキングするインタラクティブフローチャートを表示します。

フローチャートを表示する必要があります。編集モードでは、フローチャートの配置解除をマーキングできません。

インタラクティブフローチャートはセッション内でのみ利用できます。

2. **[配置解除をマーキング]**をクリックします。

インタラクティブフローチャートに配置解除がマーキングされます。データの削除要求が、インタラクティブチャンネルの[サマリ]タブで配置を待機しているアイテムのリストに追加されます。配置解除をマーキングされたインタラクティブフローチャートは編集できません。

次回にインタラクティブチャンネルを配置するときは、このインタラクティブフローチャートへのすべての参照が、ランタイムサーバから削除されます。

4 バッチフローチャートでのIBM Unica Interact

- バッチフローチャートのインタラクティブリストプロセスについて
- [インタラクティブリスト]プロセスボックス
- インタラクティブリストプロセスを設定するには

バッチフローチャートのインタラクティブリストプロセスについて

IBM Unica Campaignのバッチフローチャートは、一連のアクションをデータ上で実行してキャンペーンを行うために使用します。バッチフローチャートはプロセスでできしており、これを設定することでキャンペーンに必要な実際のデータ操作を実行します。IBM Unica Interactでは、Campaignバッチフローチャートと統合できるので、特定のオーディエンスまたはオーディエンスのタイプに提供できるオファーリストの決定に役立ちます。

Interactがインストールされている場合は、バッチフローチャートでインタラクティブリストプロセスを使用できます。コールリストおよびオファーリストプロセスと同様に、インタラクティブリストプロセスでは、インタラクティブサイトのどの訪問者にどのオファーを提供するかを指定できます。これにより、テーブル駆動機能を使用して、オファーの対象を全オーディエンスレベルまたは特定の個別オーディエンスメンバにしたり、特定のオーディエンスメンバからのオファーを非表示にしたりすることもできます。

[インタラクティブリスト]プロセスボックス

[インタラクティブリスト]プロセスボックスは、IBM Unica InteractがCampaignサーバにインストールされている場合にのみ使用できるバッチフローチャートプロセスです。バッチフローチャートで[インタラクティブリスト]プロセスボックスを使用して、Interactランタイムサーバによって顧客に提供されるオファーを決定します。以下の選択肢があります。

- 個人レベルでオファーの非表示(「ブラックリスト」)
- 個人レベルでのオファーの割り当て(「ホワイトリスト」またはスコアオーバーライド)

- オーディエンスレベルでのオファーの割り当て(グローバル、または既定のオファー)
- カスタムSQLクエリによるオファーの割り当て

インタラクティブキャンペーンを配置している場合、ランタイムサーバはこのプロセスの出力にアクセスできます。バッチフローチャートには、[インタラクティブリスト]プロセスボックスの複数のインスタンスを含めることができる点に注意してください。

インタラクティブリストプロセスで作業するとき、次の概念について理解している必要があります。

- [バッチフローチャートの\[インタラクティブリスト\]プロセスボックスについて](#)

このページから実行できるタスク:

- [\[インタラクティブリスト\]プロセスボックスの設定](#)

インタラクティブリストプロセスを設定するには

1. **[編集]**モードのバッチフローチャートで、フローチャートのワークスペースにインタラクティブリストプロセスを追加します。
 インタラクティブリストプロセスは、IBM Unica InteractがCampaignサーバにインストールされている場合にのみ、バッチフローチャートで使用できることに注意してください。
2. サンプルや選択などの1つまたは複数のデータ操作プロセスに接続することで、インタラクティブリストプロセスでの入力を実行します。
3. フローチャートでインタラクティブリストプロセスをダブルクリックします。
 プロセス設定ダイアログが表示されます。
4. **[実現]**タブで、リスト出力の実現の詳細を指定します。
 - a. **[オファーリストタイプ]**ドロップダウンリストを使用して、このプロセスを設定しているオファーフィルタで使用するタイプを指定します。
 - **[ブラックリスト(オファー非表示)]** — オファーを非表示にして特定のオーディエンスに提供されないようにすることを示します。訪問者がオーディエンスのどのセグメントにあてはまるかに基づいて、特定の訪問者にオファーが表示されるのを回避できます。
 - **[ホワイトリスト(スコアオーバーライド)]** — 通常Interactでオファーを利用可能にするかどうかの基準となるマーケティングスコアに関係なく、特定のオーディエンスに対してInteractで常にオファーを提供する必要があることを示します。
 - **[グローバルオファー(デフォルトのオファー)]** — すべてのオーディエンスタイプに提供されるオファー(ホワイトリストと同様)を定義します。通常は訪問者が属するセグメントが考慮されますが、これは、セグメントに関係なく表示されるデフォルトのオファーです。

- **[オファーフィルタ(SQL別オファー)]** — 指定した訪問者に提示するオファーを決定するためのSQLを提供できるようにします。このオプションでは、たとえば、特定の訪問者のプリファレンスに基づいてオファーを提示できます。

このオファーリストタイプを選択する場合は、このプロセスへの入力がSQLクエリによって決定され、[入力]/[オーディエンス]ドロップダウンリストが淡色表示され選択できなくなることに注意してください。

ここで指定する[オファーリストタイプ]によって、インタラクティブプロセスの動作と、以下に示すこの設定ダイアログで使用できるオプションが決まります。

- b. **[インタラクティブチャンネル]**ドロップダウンリストから、定義中のインタラクティブプロセスに適用するインタラクションポイント、イベント、その他の設定を指定します。

このドロップダウンリストは、「**インタラクティブチャンネルでの作業**」での説明に従って既に定義しているインタラクティブチャンネルを自動的にリストします。

- c. ([ホワイトリスト]または[ブラックリスト]のみ)[入力]ドロップダウンリストから、(コンタクトリストのデータソースとして使用する)入力セルを指定します。複数のセル(複数の入力セグメントなど)を使用するには、[入力]項目の横の省略符号()ボタンをクリックし、表示される[セルの選択]ダイアログで、使用する入力セルを選択します。

この手順で複数の入力セルを選択する場合は、それらの入力セルのオーディエンスレベルがすべて同じであることが必要です。

✧ **コンタクトプロセスが、出力セルを提供するプロセスに接続されていない場合、[入力]ドロップダウンリストで選択できるセルがなくなります。これを修正するには、プロセス設定ダイアログを閉じ、インタラクティブプロセスを出力プロセスに接続した後、設定プロセスを再度開始します。**

- d. ([グローバルオファー]のみ)[オーディエンス]ドロップダウンリストを使用して、このインタラクティブプロセスの適用対象のオーディエンスタイプを指定します。
- e. **[ターゲットデータソース]**ドロップダウンリストを使用して、このプロセスの出力を書き込むデータソースを指定します。
- f. このプロセスの出力を書き込むデータベーステーブルを[テーブル名]項目に入力します。

指定したテーブルが存在しない場合は、プロセスの実行時に自動的に作成されます。

- g. このプロセスを実行するたびに指定したオファーリストテーブルに書き込まれる項目を指定するには、[テーブル名]項目の横の省略記号()ボタンをクリックします。

[カスタマイズオプション]ダイアログが表示されます。テーブルに書き込まれる定義済みの項目セットが[ログ項目]リストに表示されます。

- **[選択項目]**リストから出力に含める項目を選択します。

[IBM Unica Campaign定義項目]リストを展開してIBM Unica Campaign定義項目を使用するか、**[ユーザ定義項目]**ボタンをクリックしてユーザ定義項目を使用することもできます。

- 選択項目と既に**[ログ項目]**リストにリストされている項目をペアにするには、選択項目を選択し、次に**[ログ項目]**リスト内の項目を選択して、**[追加>>]**をクリックします。
 - 既存の項目とペアにせずに選択項目を**[ログ項目]**リストに追加するには、**[ログ項目]**の項目の最後のエントリの後の空白行をクリックし、**[追加>>]**をクリックします。
 - **[ログ項目]**リストから項目を削除するには、項目を選択し、**[<<削除]**をクリックします。
 - **[ログ項目]** リスト内の項目の順序を並べ替える必要がある場合、任意の項目を選択して**[1つ上へ]**または**[1つ下へ]**をクリックすることで、リスト内を上下に移動させることができます。
 - また、**[ユーザ定義項目]**ボタンをクリックすると、新たな変数を作成してテーブルに出力を与えることが可能です。
- h. オプションを選択して、出力テーブルへの更新の処理方法を指定します。
- **[データ追記]** — このプロセスを実行するたびに、出力データが**[テーブル名]**項目で指定したテーブルに追加されます。
 - **[データ置換]** — このプロセスを実行するたびに、テーブルからすべてのデータが削除され、新しい出力データが書き込まれます。
5. 1つまたは複数のオファーまたはオファーリストを、このプロセスで定義した各ターゲットセルに割り当てるには、**[処理]**タブをクリックします。

[セルに対応するオファーを指定します]インターフェイスが表示されます。

[処理]タブでの出力設定方法は、**[実現]**タブで選択した**[オファーリストタイプ]**に依存します。

- a. **[ブラックリスト(オファー非表示)]** — テーブルに表示されるターゲットセルごとに、**[オファー]**列をクリックして、ドロップダウンリストから利用可能なオファーを選択するか、**[オファー指定]**をクリックします。**[オファー指定]**ダイアログを使用して、このプロセスの**[実現]**タブで指定した入力セル(訪問者)に対して非表示にするオファーを1つまたは複数選択します。
- b. **[ホワイトリスト(スコアオーバーライド)]** — テーブルに表示されるターゲットセルごとに、**[オファー]**列をクリックして、ドロップダウンリストから利用可能なオファーを選択するか、**[オファー指定]**をクリックします。**[オファー指定]**ダイアログを使用して、このプロセスの**[実現]**タブで指定した入力セル(訪問者)に対して提供するオファーを1つまたは複数選択します。これは、通常であればマーケティングスコアによって訪問者にそのオファーが提供されない場合でも提供されます。

- c. **[グローバルオファー(デフォルトのオファー)]** — テーブルに表示されるターゲットセルごとに、**[オファー]**列をクリックして、ドロップダウンリストから目的のオファーを選択するか、**[オファー指定]**をクリックします。**[オファー指定]**ダイアログを使用して、このプロセスの**[実現]**タブで選択したオーディエンスタイプのすべての訪問者に対して、そのセグメントに関係なく提供するオファーを選択します。
- d. **[オファーフィルタ(SQL別フィルタ)]** — **[SQL別オファー]**ボタンをクリックして、Interactランタイムサーバーで訪問者のセットに提供するオファーを選択できるようにするSQL式を作成します。次の方法で表示される**[SQL別オファーを作成]**ダイアログを使用します。
 - 既存のSQLテンプレート名を**[SQL]**ドロップダウンリストから選択するか、新規テンプレートを定義している場合はこの項目にテンプレートの新しい名前を入力します。
 - SQLクエリの内容を**[SQLテンプレート]**項目に入力します。
 - **[構文チェック]**をクリックして式の妥当性を確認します。**[構文チェック]**では、妥当性の確認にテスト実行のInteractランタイムサーバを利用することに注意してください。関数の構文をチェックするには、テスト実行のランタイムサーバを稼働させておく必要があります。

[SQL別オファーを作成]ダイアログの使用の詳細については、『IBM Unica Campaign ユーザーガイド』の「[Creating queries using SQL](#)」を参照してください。

6. (任意)プロセスに名前や説明を割り当てるには、**[全般]**タブをクリックします。
名前はフローチャートのプロセス上に表示されます。説明はフローチャートのプロセス上にマウスを移動すると表示されます。
7. **[OK]**をクリックして、インタラクティブリストプロセス設定を完了します。
構成され有効になったプロセスが、フローチャートに表示されます。プロセスをテストして期待した結果を返すことを確認します。

5 ランタイムサーバへの配置

- 配置の概要
- ランタイムサーバの概要
- 配置と削除
- 運用ランタイムサーバグループに配置するには
- テストサーバグループに配置するには
- 配置を解除するには

配置の概要

配置とは、設計環境で定義したすべての構成をランタイムサーバグループに転送する方法です。配置はインタラクティブチャンネルでグループ化されます。インタラクティブチャンネルを配置すると、インタラクティブチャンネルに関連付けられたすべてのデータが、選択されたランタイムサーバグループに送信されます。これが、インタラクティブチャンネルを作成しているときに、運用ランタイムサーバと非運用(テスト)ランタイムサーバを定義する必要がある理由です。

最初の配置には次のデータが含まれます。

- 配置をマーキングされたインタラクティブチャンネルに関連付けられた、すべてのインタラクティブフローチャート。
これにはスマートセグメントも含まれます。
- 配置をマーキングされたインタラクティブチャンネルに関連付けられた、すべてのインタラククション方法。
これには、オファーなどの処理ルールが含まれます。
- インタラククションチャンネルで定義されたすべてのイベント、ゾーンおよびインタラククションポイント。
- インタラクティブチャンネルに固有でないが必要なデータ。オーディエンスの定義、組み込みの学習構成、オファー属性の定義、カスタムマクロ定義、コンタクト履歴とレスポンス履歴のマッピング情報、キャンペーンの開始日と終了日などがあります。

後続するすべてのインタラクティブチャンネルの配置において、Interactは、選択されたランタイムサーバに次の情報を送信します。

- インタラクティブポイントやイベントなどのインタラクティブチャンネルに関連付けられたすべてのデータ。
- 配置をマーキングされたインタラクティブチャンネルに関連付けられた、編集済みのすべてのインタラクティブフローチャートおよびインタラクティブ方法。
- 配置解除をマーキングされていない直前の配置に含まれている、最後に配置したインタラクティブフローチャートおよびインタラクティブ方法のバージョン。
- インタラクティブチャンネルに固有でないその他の必要な全データ。

インタラクティブフローチャートまたはインタラクティブ方法に配置解除がマーキングされている場合、Interactは、すべてのデータおよび配置解除対象のフローチャートと方法への参照をランタイムサーバから削除します。

✧ Interactランタイムサーバにインタラクティブチャンネルを配置すると、ランタイムサーバはCampaignパーティションなどの特定の設計環境に関連付けられます。同じランタイムサーバを新しい設計環境に関連付けることによって再利用しようとすると、その配置は失敗します。このシナリオは、ステージングのCampaignインストールと運用のCampaignインストールを行っているときに起こることがあります。

配置には4段階の手順があります。

1. 配置するインタラクティブチャンネルに関連付ける、すべてのインタラクティブフローチャートを構成し、マーキングします。
2. 配置するインタラクティブチャンネルに関連付ける、すべての方法タブを構成し、マーキングします。
3. インタラクティブチャンネルのイベントおよびインタラクティブポイントを構成します。
4. インタラクティブチャンネルの[サマリ]タブからデータを配置します。

配置するまたは配置を解除するインタラクティブフローチャートまたはインタラクティブ方法をマーキングすると、運用サーバに配置するまではマーキングが維持され、編集がロックされます。次の表に、設計環境で処理するときにインタラクティブ方法にマーキングされる配置ステータスを示します。

手順	マーキングされるステータス	設計環境でのアクション
1	配置をマーキングされ、編集はロックされます。	配置に対してインタラクティブ方法をマーキングします。
2	配置をマーキングされ、編集はロックされます。	ステージングサーバグループに配置します。 ステージングサーバ上でテストを実行して、変更が必要な処理ルールを確認します。
3	編集可能	変更を行うため、インタラクティブ方法への配置要求をキャンセルします。
4	配置をマーキングされ、編集はロックされます。	インタラクティブ方法への変更を行った後、再度配置をマーキングします。

手順	マーキングされるステータス	設計環境でのアクション
5	配置をマーキングされ、編集はロックされます。	再度、ステージングサーバグループに配置します。 変更した処理ルールをテストして正常に実行されることを確認して、インタラクティブチャネルの運用準備ができているかどうかを判断します。
6	編集可能	運用サーバグループに配置します。

配置時の注意

次のデータのいずれかを変更するときは、インタラクティブチャネルを配置してください。

- インタラクティブフローチャート
- インタラクティブチャネル
- インタラクシオン方法
- オーディエンスの定義
- 組み込み学習構成
- オファー属性の定義
- カスタムマクロの定義
- コンタクト履歴とレスポンス履歴のマッピング情報
- キャンペーンの開始日と終了日
- 回収されたオファー

インタラクティブチャネルに固有でないその他の必要なデータのいずれかを変更した場合、その変更を反映させるためには、サーバグループに関連付けられたすべてのインタラクティブチャネルを配置しなおす必要があります。

ランタイムサーバの概要

ランタイムサーバは、Interactの実装における主要部分です。ランタイムサーバは、Interact APIを通じてタッチポイントからの要求をリッスンして応答します。タッチポイントがオファーを要求すると、そのオファーに応答するのがランタイムサーバです。

Interactはサーバグループで動作します。1つのサーバグループには、1つまたは複数のランタイムサーバが含まれます。複数のランタイムサーバがある場合は、それらのサーバを負荷分散装置とともに動作するように構成するとパフォーマンスを向上させることができます。タッチポイントは、これらのランタイムサーバと通信するように構成する必要があります。

複数のサーバグループを設定できます。たとえば、コールセンターに対して1グループ、Webサイトに対して1グループを設定できます。また、テスト用に1グループ、顧客対応のタッチポイントで動作させるために1グループ、という設定もできます。各インタラクティブチャンネルで、1つの運用サーバグループだけを稼働させることもできます。

設計環境におけるインタラクションの設計と構成を終了し、Interact APIコードをタッチポイントで動作するように作成すると、ランタイムサーバにインタラクションデータを送信すなわち配置する準備が整ったこととなります。インタラクションデータをランタイムサーバに配置すると、タッチポイントとInteractとの動作方法のテストを開始できます。

配置と削除

Interactランタイムサーバを正しく実行するには、必要なデータを誤って削除しないように、Interactオブジェクトをロックするインタラクション構成を配置します。インタラクション構成を配置すると、そのインタラクション構成に関連付けられたインタラクション方法タブ、インタラクティブフローチャートまたはインタラクティブチャンネルは、すべてのサーバグループからオブジェクトの配置を解除するまでは削除できません。

インタラクション方法またはインタラクティブフローチャートに配置解除をマーキングし、インタラクション方法またはインタラクティブフローチャートを格納しているすべてのサーバグループにインタラクティブチャンネルを配置すると、インタラクション方法またはインタラクティブフローチャートを削除できます。

インタラクティブチャンネルを配置したすべてのサーバグループからインタラクティブチャンネルの配置を解除すると、インタラクティブ方法、インタラクティブフローチャートまたはインタラクティブチャンネルを削除できます。

たとえば、インタラクティブフローチャートAとインタラクション方法Aを格納しているインタラクションチャンネルAがあるとします。インタラクティブチャンネルAを、サーバグループTestとサーバグループProductionに配置します。インタラクティブフローチャートAが適切でないと感じたので、インタラクティブフローチャートBを作成しました。インタラクティブフローチャートAに配置解除をマーキングし、インタラクティブフローチャートBに配置をマーキングします。これをサーバグループTestに配置します。インタラクティブフローチャートAは、サーバグループProductionに配置されたままなので、まだ削除できません。サーバグループProductionに配置した後に、インタラクティブフローチャートAを削除できます。時間の経過と共に、インタラクション構成を再構築する必要性に気付きます。インタラクティブチャンネルB、インタラクション方法BおよびインタラクティブフローチャートCを作成します。このインタラクション構成をサーバグループTestとサーバグループProductionに配置します。さらに、インタラクティブチャンネルA、インタラクション方法AおよびインタラクティブフローチャートBをサーバグループProductionから配置解除します。すべてのオブジェクトはいずれかに配置されているため、どのオブジェクトも削除できません。インタラクティブチャンネルA、インタラクション方法AおよびインタラクティブフローチャートBをサーバグループTestから配置解除すると、インタラクティブチャンネルA、インタラクション方法AおよびインタラクティブフローチャートBを削除できます。

運用ランタイムサーバグループに配置するには

この手順では、インタラクティブチャネルの運用ランタイムサーバグループとして選択されたランタイムサーバグループに配置します。テストサーバグループに配置する場合は、**[別の場所に配置]**を使用する必要があります。

稼働中の顧客対応の運用ランタイムサーバグループに配置する前に、すべてのインタラクティブフローチャート、インタラクション方法タブ、インタラクションポイント、ゾーンおよびイベントがテストおよび承認されていることを確認する必要があります。

1. 配置するインタラクティブチャネルに移動します。
インタラクティブチャネルの**[サマリ]**タブが表示されます。
2. **[運用サーバに配置]**をクリックします。
[運用サーバに配置]ダイアログが表示されます。
3. チェックボックスをオンにすることによって、前提条件が検証済みであることを確認します。
[変更内容を配置]ボタンは、すべての前提条件が確認されるまではアクティブになりません。
4. **[変更内容を配置]**をクリックします。
5. ランタイムサーバ上のInteractのユーザ名とパスワードを入力し、**[サーバにログイン]**をクリックします。

同一のIBM Unica Marketingユーザセッション内で複数の配置を実行する場合、ランタイムサーバのログインデータはキャッシュされるため、ログイン情報を再度入力する必要はありません。

データが、選択された運用ランタイムサーバグループに配置されます。結果はインタラクティブチャネル配置履歴レポートで確認できます。

テストサーバグループに配置するには

この手順では、インタラクティブチャネルの運用ランタイムサーバグループとして選択されたサーバグループを除く、ランタイムサーバグループのいずれかに配置します。運用ランタイムサーバグループに配置する場合は、**[運用サーバに配置]**を使用する必要があります。

いったん安定した配置を作成したら、この配置に関連付けられたインタラクティブチャネル、インタラクティブフローチャートおよびインタラクション方法は変更しないでください。同じ構成を運用サーバに送信できるようにするためです。

1. 配置するインタラクティブチャネルに移動します。
インタラクティブチャネルの**[サマリ]**タブが表示されます。
2. **[別の場所に配置]**をクリックします。
[別の場所に配置]ダイアログが表示されます。
3. 変更内容を配置するサーバグループを選択します。

4. チェックボックスをオンにすることによって、前提条件が検証済みであることを確認します。

[変更内容を配置]ボタンは、すべての前提条件が確認されるまではアクティブになりません。

5. [変更内容を配置]をクリックします。
6. ランタイムサーバグループ上のInteractのユーザ名とパスワードを入力し、[サーバにログイン]をクリックします。

同一のIBM Unica Marketingユーザセッション内で複数の配置を実行する場合、ランタイムサーバのログインデータはキャッシュされるため、ログイン情報を再度入力する必要はありません。

データが、選択された非運用ランタイムサーバグループに配置されます。結果はインタラクティブチャンネル配置履歴レポートで確認できます。

配置を解除するには

インタラクティブチャンネルまたはタッチポイントをオフラインにしている場合は、配置を解除できます。

配置を解除すると、Interactは選択されたランタイムサーバの以前の配置のデータを無効にします。

1. Campaignで、配置を解除するインタラクティブチャンネルに移動します。
2. [すべての配置を解除(運用)]または[すべての配置を解除(別の場所)]をクリックします。
3. チェックボックスをオンにすることによって、因果関係が検証済みであることを確認します。

[インタラクティブチャンネルの配置を解除]ボタンは、すべての因果関係が確認されるまではアクティブになりません。

4. [インタラクティブチャンネルの配置を解除]をクリックします。
5. Interactランタイム上のInteractユーザのユーザ名とパスワードを入力し、[サーバにログイン]をクリックします。

同一のCampaignユーザセッション内で複数の配置を実行する場合、Interactランタイムのログインデータはキャッシュされるため、ログイン情報を再度入力する必要はありません。

選択されたInteractランタイムサーバグループ上のデータが無効になります。結果はインタラクティブチャンネル配置履歴レポートで確認できます。配置解除操作では、レポートで使用されるデータは削除されません。

Interactランタイムサーバから、すべてのインタラクティブチャンネルと関連付けられたデータを配置解除しても、ランタイムサーバの設計環境への関連付けは解除されません。

6 IBM Unica Interactのレポート

- Interactのレポートについて
- Interactのレポートデータ
- Interact 8.0.0レポートとレポートスキーマ
- Interactレポートの表示
- インタラクシオンポイントパフォーマンスレポートのポートレットについて
- インタラクティブチャンネルの[レポート]タブから利用できるInteractレポート
- キャンペーンの[レポート]タブから利用できるInteractレポート
- レポートのフィルタリング

Interactのレポートについて

InteractはIBM Unica Marketingのレポートと統合されています。IBM Unica Marketingのレポートには、InteractをIBM Cognos 8 BIと統合し、Interactで利用できるCognosレポートを実行および保守するために必要な、レポートスキーマと関連の保守ツールが用意されています。

Interactのレポートデータ

Interactでレポートを生成するには、次の3つのデータセットが必要です。それは設計環境のデータ、運用ランタイム環境のデータ、学習モジュールのデータの3つです。たとえば、チャンネルオファーパフォーマンスのサマリレポートでは、オファー関連のデータ、および運用ランタイムサーバのコンタクト履歴とレスポンス履歴のデータに対する、Campaignデータソースのデータが必要です。

運用環境のパフォーマンスを低下させないようにするため、ランタイム環境では、すべてのコンタクト履歴とレスポンス履歴をステージングテーブルに保存します。Interactには、レポートに正しいデータを反映させるため、ランタイムサーバから設計環境にコピーするためのコンタクト履歴とレスポンス履歴のモジュールが用意されています。このユーティリティを構成しない場合、レポートに正しいデータが反映されません。

複数のレポートで、オファーに関する特定のデータが必要です。レポートに正しいデータが含まれるようにするには、[このテンプレートから作成したオファーをリアルタイムインタラクシオンで使用できます]が有効なオファーテンプレートで作成されたオファーを使用する必要があります。

関連トピック

- ・ オファアの定義

Interact 8.0.0レポートとレポートスキーマ

Interact Report Package v 8.0.0のレポートスキーマは、次の方法でカスタマイズできます。

- ・ パフォーマンスレポートのカレンダー期間を指定する
- ・ パフォーマンスレポートのオーディエンスを構成する
- ・ 追加のオーディエンスに対して追加のパフォーマンスレポートスキーマを作成する

次の表は、Interact Reports Packageで提供されている各IBM Cognos 8 BIレポートを、それらをサポートするIBM Unica レポートスキーマにマップしたものです。

	インタラクティブ表示スキーマ	Interactパフォーマンス表示スキーマ	インタラクティブチャンネル/キャンペーン配置履歴	Interactランタイム表示スキーマ	Interact学習表示スキーマ
キャンペーン - インタラクティブチャンネル配置履歴	X		X		
キャンペーン - 時刻別インタラクティブセルパフォーマンス	X	X		X	
キャンペーン - オファア別インタラクティブセルパフォーマンス	X	X		X	
キャンペーン - 時刻別インタラクティブオファアパフォーマンス	X	X		X	
キャンペーン - セル別インタラクティブオファアパフォーマンス	X	X		X	

	インタラクティブ表示スキーマ	Interactパフォーマンス表示スキーマ	インタラクティブチャンネル/キャンペーン配置履歴	Interactランタイム表示スキーマ	Interact学習表示スキーマ
キャンペーン - インタラクティブオファー学習の詳細	X				X
インタラクティブセルリフト分析	X	X		X	X
インタラクティブチャンネル - チャンネル配置履歴	X		X		
インタラクティブチャンネル - チャンネルイベントアクティビティのサマリレポート	X			X	
インタラクティブチャンネル - チャンネルインタラクションポイントパフォーマンスのサマリ	X	X		X	
インタラクティブチャンネル - チャンネル処理ルールインベントリ	X				
インタラクティブセグメントリフト分析	X	X		X	
インタラクティブポイントパフォーマンス	X	X		X	

Interactレポートの表示

Interactはレポートとの統合により、Campaign内からCognosレポートを実行することができます。レポートの中には、追加情報を提供するため、他のレポートへのリンクが含まれているものがあります。

InteractのレポートはCampaign内に存在しているため、レポートを表示する一般的な手順については、『*Campaignユーザガイド*』を参照してください。

Interact Reports Packageで利用できるすべてのレポート例は、追加のオーディエンスなどをカスタマイズできます。Interactのレポート例をカスタマイズする方法の詳細については、『*Marketing Platform管理者ガイド*』を参照してください。

関連トピック

- 分析ホームからInteractレポートを表示するには
- キャンペーンの[レポート]タブからInteractレポートを表示するには
- インタラクティブチャネルの[レポート]タブからレポートを表示するには

インタラクティブチャネルの[レポート]タブからレポートを表示するには

インタラクティブチャネルの[レポート]タブから利用できるレポートは次のとおりです。

- チャンネル配置履歴
 - チャンネルイベントアクティビティのサマリ
 - チャンネルインタラクションポイントパフォーマンスのサマリ
 - チャンネルインタラクティブセグメントリフト分析
 - インタラクティブチャネル処理ルールインベントリ
1. インタラクティブチャネルの[レポート]タブから、[レポートタイプ]を選択します。レポートが表示されます。
 2. 適用される場合、レポートにフィルタを選択します。

たとえば、チャンネルインタラクションポイントパフォーマンスのサマリレポートを表示する場合は、インタラクションポイントを選択します。

関連トピック

- オフアー別にフィルタリングするには
- ターゲットセル別にフィルタリングするには
- 時刻別にフィルタリングするには
- チャンネル配置履歴レポートをフィルタリングするには
- チャンネル処理ルールインベントリレポートをフィルタリングするには

キャンペーンの[レポート]タブからInteractレポートを表示するには

キャンペーンの[レポート]タブから利用できるレポートは次のとおりです。

- チャンネル配置履歴
- インタラクティブセルリフト分析
- オファー別インタラクティブセルパフォーマンス
- 時刻別インタラクティブセルパフォーマンス
- インタラクティブオファー学習の詳細
- セル別インタラクティブオファーパフォーマンス
- 時刻別インタラクティブオファーパフォーマンス

1. キャンペーンの[レポート]タブから、[レポートタイプ]を選択します。

レポートが表示されます。

2. 適用される場合、レポートにフィルタを選択します。

たとえば、オファー別インタラクティブセルパフォーマンスレポートを表示する場合は、セルを選択します。

関連トピック

- オファー別にフィルタリングするには
- ターゲットセル別にフィルタリングするには
- 時刻別にフィルタリングするには

分析ホームからInteractレポートを表示するには

次のレポートは、[レポート]領域のInteractレポートフォルダから利用できます。

- チャンネル配置履歴
- インタラクティブセルリフト分析
- オファー別インタラクティブセルパフォーマンス
- 時刻別インタラクティブセルパフォーマンス
- インタラクティブオファー学習の詳細
- セル別インタラクティブオファーパフォーマンス
- 時刻別インタラクティブオファーパフォーマンス

1. 分析ホームのInteract[レポート]フォルダを選択します。

2. 表示するレポートを選択します。

[レポートパラメータ]ウィンドウが開きます。

3. データを表示するキャンペーンを選択します。

レポートが表示されます。

4. 適用される場合、レポートにフィルタを選択します。

たとえば、オファー別インタラクティブセルパフォーマンスレポートを表示する場合は、セルを選択します。

関連トピック

- オファー別にフィルタリングするには
- ターゲットセル別にフィルタリングするには
- 時刻別にフィルタリングするには

インタラクティブポイントパフォーマンスレポートのポートレットについて

ダッシュボードで使用できるInteractに固有のレポートのみが、インタラクティブポイントパフォーマンスレポートのポートレットです。このポートレットには、過去7日間でインタラクティブポイントごとに承認されたオファーの数が表示されます。このレポートを分析することで、インタラクティブチャンネル上のピークマーケティングの場所を特定して、今後のキャンペーンの設計に役立てることができます。

このダッシュボードレポートは、IDが1のインタラクティブチャンネルを示すために定義されます。このレポートで示すインタラクティブチャンネルのIDを変更するには、『Marketing Platform 管理者ガイド』を参照してください。

インタラクティブチャンネルの[レポート]タブから利用できるInteractレポート

- チャンネル配置履歴レポートについて(インタラクティブチャンネル)
- チャンネルイベントアクティビティのサマリレポートについて
- チャンネルインタラクティブポイントパフォーマンスのサマリレポートについて
- チャンネル処理ルールイベントリレポートについて
- インタラクティブセグメントリフト分析レポートについて

チャンネル配置履歴レポートについて(インタラクティブチャンネル)

インタラクティブチャンネルの[レポート]タブのチャンネル配置履歴レポートは、すべてのランタイムサーバへの追跡変更に関する監査ログです。このレポートは、ランタイムサーバ、キャンペーンまたは配置を実行したユーザでフィルタリングできます。

キャンペーン、インタラクティブ方法、セッションおよびフローチャートの名前は、キャンペーン、インタラクティブ方法、セッションおよびインタラクティブフローチャートへのリンクになっています。レポートに戻るには、ブラウザの[戻る]ボタンを使用します。

また、このレポートはキャンペーンの[レポート]タブおよび分析ホームの[Interactレポート]フォルダから利用できます。

関連トピック

- チャンネル配置履歴レポートをフィルタリングするには
- チャンネル配置履歴レポートについて(キャンペーン)

チャンネルイベントアクティビティのサマリレポートについて

チャンネルイベントアクティビティのサマリレポートでは、インタラクティブチャネルに配置されたイベントのアクティビティをトラッキングできます。レポートは、すべてのカテゴリ、特定のカテゴリ、すべてのイベントまたは単一のイベントでフィルタリングできます。過去24時間、または過去7日間に発生したイベントの頻度を比較できます。このレポートでは、イベントのピーク時間やピーク日、最大ボトム時間や最大ボトム日も示されます。ピークデータを使用すると、リソースの処理を最適化する方法、または予測されるトラフィックに関するマーケティング戦略を計画することができます。最大ボトム時間を知ることで、混乱を最小限に抑えられそうな時間帯に配置を行うことが可能になります。

関連トピック

- 時刻別にフィルタリングするには
- イベントまたはカテゴリでフィルタリングするには

チャンネルインタラクティブポイントパフォーマンスのサマリレポートについて

チャンネルインタラクティブポイントパフォーマンスのサマリレポートでは、すべてのオファーとセグメント間のインタラクティブチャネルで、インタラクティブポイントごとにパフォーマンスを測定します。このレポートを分析することで、インタラクティブチャネル上のピークマーケティングの場所を特定して、今後のキャンペーンの設計に役立てることができます。

このレポートは、すべてのインタラクティブポイントまたは単一のインタラクティブポイントによってフィルタリングできます。このレポートには、インタラクティブポイントで表示、承認および拒否されたオファーの数が表示されます。

関連トピック

- 時刻別にフィルタリングするには
- インタラクティブポイントでフィルタリングするには

チャンネル処理ルールインベントリレポートについて

チャンネル処理ルールインベントリレポートは、インタラクティブチャンネルに関連付けられたすべての処理ルールのリストです。このリストは、ターゲットセル、ゾーンおよびキャンペーンを組み合わせることでフィルタリングできます。このレポートは、特定のセル、ゾーンまたはキャンペーン周辺のマーケティングの動きを調査するときに、診断ツールとして使用できます。

キャンペーンとインタラクティブ方法の名前は、キャンペーンまたはインタラクティブ方法へのリンクになっています。オファー名は、時刻別インタラクティブオファーパフォーマンスレポートへのリンクになっており、そのオファーでフィルタリングされています。チャンネル処理ルールインベントリレポートに戻るには、ブラウザの[戻る]ボタンを使用します。

関連トピック

- チャンネル処理ルールインベントリレポートをフィルタリングするには

インタラクティブセグメントリフト分析レポートについて

リフト分析レポートには、Interactの組み込み学習によるパフォーマンスの進捗状況が表示されます。インタラクティブセグメントリフト分析レポートには、ランダムに表示されたオファーおよびInteractの組み込み学習によって表示されたオファーとの比較で、オファーの承認率がスマートセグメント別に示されます。このレポートには、これらの値が時刻別に表示されるため、良い傾向と悪い傾向を知ることができます。そうした情報を使用して、マーケティング戦略を絞り込みます。

このレポートには、Interactの組み込み学習を使用する場合にのみデータが挿入されません。

キャンペーンの[レポート]タブから利用できるInteractレポート

- チャンネル配置履歴レポートについて(キャンペーン)
- インタラクティブオファー学習の詳細レポートについて
- インタラクティブセルパフォーマンスレポートについて
- インタラクティブオファーパフォーマンスレポートについて
- インタラクティブセルリフト分析レポートについて

チャンネル配置履歴レポートについて(キャンペーン)

キャンペーンの[レポート]タブのチャンネル配置履歴レポートには、すべてのインタラクティブ方法の配置データと、このキャンペーンに割り当てられたインタラクティブチャンネルが表示されます。

キャンペーン、インタラクティブ方法、セッションおよびフローチャートの名前は、キャンペーン、インタラクティブ方法、セッションおよびインタラクティブフローチャートへのリンクになっています。レポートに戻るには、ブラウザの[戻る]ボタンを使用します。

このレポートは、インタラクティブチャネルの[レポート]タブから表示できます。

関連トピック

- チャンネル配置履歴レポートについて(インタラクティブチャネル)

インタラクティブオファー学習の詳細レポートについて

インタラクティブオファー学習の詳細レポートには、組み込み学習モジュールでトラッキングしている、すべての学習属性が表示されます。各チャートには、関心のある任意の属性に対して特定の値をもつ訪問者が、指定したオファーに応答する可能性が示されます。このレポートを使用すると、学習モジュールの学習状況を分析したり、トラッキングする属性やセグメントへのオファーの割り当てを変更できます。

インタラクティブオファー学習の詳細レポートにデータを表示するには、オファーを選択する必要があります。既定では、データは何も表示されません。

このレポートは、外部の学習機能を使用している場合には利用できません。

関連トピック

- オファー別にフィルタリングするには

インタラクティブセルパフォーマンスレポートについて

インタラクティブセルパフォーマンスレポートには、2種類あります。時刻別とオファー別です。これらのレポートでは、特定キャンペーンの受信マーケティングシナリオにおける、ターゲットセルのパフォーマンスを測定します。ターゲットセルでフィルタリングすると、処理ルール内のスマートセグメントに割り当てられたセルでフィルタリングすることになります。これらのレポートは、すべてのセルまたは特定のターゲットセルでソートできます。このレポートには、ターゲットセルによって提示され、承認され、拒否されたオファーの数が時刻別またはオファー別に表示されます。このレポートでは、キャンペーン内のインタラクティブ方法の処理ルールに関連付けられたすべてのターゲットセルがカバーされます。

関連トピック

- 時刻別にフィルタリングするには
- ターゲットセル別にフィルタリングするには

インタラクティブオファーパフォーマンスレポートについて

インタラクティブオファーパフォーマンスレポートには、2種類あります。時刻別とオファー別です。これらのレポートでは、特定キャンペーンの受信マーケティングシナリオにおける、オファーのパフォーマンスを測定します。これらのレポートは、すべてのオファーまたは特定のオファーでソートできます。このレポートには、提示され、承認され、拒否されたオファーの回数が時刻別またはターゲットセル(セグメント)別に表示されます。このレポートは、キャンペーン内の処理ルールに関連付けられたすべてのオファーが対象です。

関連トピック

- 時刻別にフィルタリングするには
- オファー別にフィルタリングするには

インタラクティブセルリフト分析レポートについて

リフト分析レポートには、Interactの組み込み学習によるパフォーマンスの進捗状況が表示されます。インタラクティブセルリフト分析レポートには、ランダムに表示されたオファーおよびInteractの組み込み学習によって表示されたオファーとの比較で、オファーの承認率がセル別に示されます。このレポートには、これらの値が時刻別に表示されるため、良い傾向と悪い傾向を知ることができます。そうした情報を使用して、マーケティング戦略を絞り込みます。

このレポートには、Interactの組み込み学習を使用する場合にのみデータが挿入されます。

レポートのフィルタリング

- インタラクションポイントでフィルタリングするには
- イベントまたはカテゴリでフィルタリングするには
- オファー別にフィルタリングするには
- ターゲットセル別にフィルタリングするには
- 時刻別にフィルタリングするには
- チャンネル配置履歴レポートをフィルタリングするには
- チャンネル処理ルールイベントリポートをフィルタリングするには

インタラクティブポイントでフィルタリングするには

チャンネルインタラクティブポイントパフォーマンスのサマリレポートは、インタラクティブポイントによってフィルタリングできます。

レポートをインタラクティブポイントでフィルタリングするには、[インタラクティブポイント]リストから、データをフィルタリングするインタラクティブポイントを選択します。すべてのインタラクティブポイントを選択するには、[インタラクティブポイント]を選択します。

レポートは自動的に再読み込みされ、選択されたデータのみが表示されます。

イベントまたはカテゴリでフィルタリングするには

チャンネルイベントアクティビティのサマリレポートは、イベントおよびカテゴリでフィルタリングできます。

レポートをカテゴリでフィルタリングするには、[カテゴリを選択]リストから、データをフィルタリングするカテゴリを選択します。すべてのカテゴリを選択するには、[カテゴリ]を選択します。

レポートをイベントでフィルタリングするには、[イベントを選択]リストから、データをフィルタリングするイベントを選択します。すべてのイベントを選択するには、[イベント名]を選択します。カテゴリを選択してレポートを再読み込みすると、[イベントを選択]リストには選択されたカテゴリのイベントのみが表示されます。

レポートは自動的に再読み込みされ、選択されたデータのみが表示されます。

オファー別にフィルタリングするには

次のレポートはオファー別にフィルタリングできます。

- インタラクティブオファー学習の詳細
- セル別インタラクティブオファーパフォーマンス
- 時刻別インタラクティブオファーパフォーマンス

レポートをオファー別にフィルタリングするには、[オファー]リストから、データをフィルタリングするオファーを選択します。すべてのオファーを選択するには、[オファーID]を選択します。

レポートは自動的に再読み込みされ、選択されたデータのみが表示されます。

ターゲットセル別にフィルタリングするには

次のレポートはターゲットセル別にフィルタリングできます。

- オファー別インタラクティブセルパフォーマンス
- 時刻別インタラクティブセルパフォーマンス

ターゲットセルでフィルタリングすると、処理ルール内のスマートセグメントに割り当てられたセルでフィルタリングすることになります。

レポートをターゲットセル別にフィルタリングするには、[ターゲットセル]リストから、データをフィルタリングするターゲットセルを選択します。すべてのセルを選択するには、[セルID]を選択します。

レポートは自動的に再読み込みされ、選択されたデータのみが表示されます。

時刻別にフィルタリングするには

次のレポートは時刻別にフィルタリングできます。

- 時刻別インタラクティブセルパフォーマンス
- 時刻別インタラクティブオファーパフォーマンス
- チャンネルイベントアクティビティのサマリ
- チャンネルインタラクシオンポイントパフォーマンスのサマリ

レポートを日付でフィルタリングするには、過去7日間の終了日を選択し、**[更新]**をクリックします。日付は直接入力することも、カレンダーリストから選択することもできます。

レポートを時刻でフィルタリングするには、過去24時間の終了時刻を選択し、**[更新]**をクリックします。既定では午前12:00です。この場合、昨日のデータが表示されます。チェックボックスをオフにすると、レポートではCognosレポートサーバの現在時刻が使用されます。

日付や時刻が指定されていない場合、グラフにはデータが何も表示されません。折れ線グラフでは、データがない場合、データが含まれている日付だけに線が引かれます。次のデータポイントで例を示します。6/1(100)、6/2(データなし)、6/3(50)。折れ線は、6/1の100から6/3の50に向かって引かれます。線は6/2の75までの間を通過しますが、これは実際のデータポイントではありません。また、データポイントが1つだけの場合も接続点がないため、折れ線は表示されません。

チャンネル配置履歴レポートをフィルタリングするには

インタラクティブチャンネルの[レポート]タブにあるチャンネル配置履歴レポートは、次の項目でフィルタリングできます。

- **[配置先]**: このインタラクティブチャンネルの配置先であるサーバグループ
- **[変更によって更新されたキャンペーン]**: このインタラクティブチャンネルに関連付けられたインタラクシオン方法を含むキャンペーン
- **[配置担当者]**: このインタラクティブチャンネルを配置した IBM Unica ユーザ

レポートをフィルタリングするには、データをフィルタリングする条件を選択し、**[更新]**をクリックします。**Ctrl**キーを押しながらクリックすると、リストごとに複数の条件を選択できます。すべての条件を選択するには、**[すべて選択]**をクリックします。**[すべて選択解除]**を選択するとフィルタは何も適用されないため、**[すべて選択]**を選択したときと同じデータが表示されます。

レポートは、**[更新]**をクリックするまでは読み込まれません。再読み込みされると、レポートには選択されたデータのみが表示されます。

チャネル処理ルールインベントリレポートをフィルタリングするには

チャネル処理ルールインベントリレポートは、次の項目でフィルタリングできます。

- **[ターゲットセル]**: このインタラクティブチャネルに関連付けられた処理ルール内のスマートセグメントに割り当てられたセル
- **[ゾーン]**: このインタラクティブチャネル内のゾーン
- **[キャンペーン]**: このインタラクティブチャネルに関連付けられたインタラククション方法を含むキャンペーン

レポートをフィルタリングするには、データをフィルタリングする条件を選択し、**[更新]**をクリックします。 **Ctrl**キーを押しながらクリックすると、リストごとに複数の条件を選択できます。すべての条件を選択するには、**[すべて選択]**をクリックします。**[すべて選択解除]**を選択するとフィルタは何も適用されないため、**[すべて選択]**を選択したときと同じデータが表示されます。

レポートは、**[更新]**をクリックするまでは読み込まれません。再読み込みされると、レポートには選択されたデータのみが表示されます。